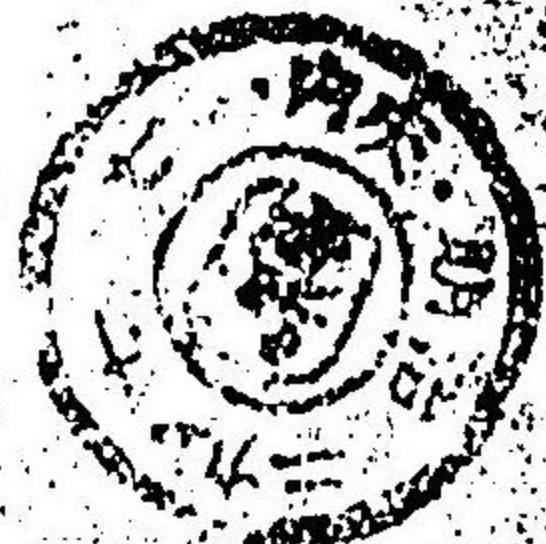


子戲曲

下卷





目次

浦島年代記	一頁
弘徽殿鴉羽産家	六二
蛾歌加留多	一二三
井筒業平河内通	一七七
日本武尊吾妻鑑	二四三
用明天皇職入鑑	三〇四



# 浦島年代記



1

珠の宮、貝の關、天上の三光に應じ、そよめく衣、綉せる裳、人間の五福をそなへ、三萬里の蓬萊指麻の中、すべて兜卒にいたるがごとく、又邯鄲を夢見るに似たりとうたひし、水府龍宮の靈神、御承威に傳へます、海の幸、山の幸、うけつぐ君や廿一代、安康天皇の志をしめす國者常世とさかへける。そも御即位の始より、花鳥風月の御宴にそみ、歌舞音樂の御もておそひ、等閑ならぬ御色好わけくれ御藥がらなるに、女御圓の大臣の娘中蒂姫、十五ヶ月の御懐妊御産の氣まします、もし天にそむき神にたがふ事有て、鬼胎妖懐のあやしき誕生あるべきかと、おぼし惱の御心、鬱滞し、御足の立居まゝならず、石樟舟のいにしへも御身にせまり、手橋を、女婦命婦さしつとひ、殿上の欄より押きしらせて出御有り、君御冠をぬかせたまひ、官女に仰せ高御座にすゑさせ、御身は引かへ御立をぼしかへ



たまふ御有さま、女御を始め列座の公卿庭上の諸武士迄あつと驚斗りなり。中にも葵の臣種房卿笏とり直し、君御位にありながらをぼしを召さる、條謂なし、あり位の後には布衣はじめとて其時をぼしを召さる、故實申すに及ぬ所、いまだ立太子の御沙汰もなくいかなる慮慮ばし候と、謹で奏せらる。天皇や、御涙ながら、朕一天の主として萬心のまことなれども、まかせぬものは病にて、良藥醫術その甲斐なく、淺ましや足たらず、五躰不具にて位にある事我日の本に例なし、天照神の照覽もあそろしく、自ら位を去るぞとよ、いかに中帯の女御、今より朕にかはり民安全に治めたまへと打志ほれたまへば、こは勿躰なの詔、數ならぬ自御寵愛いやまさり、忝なくも女御と召れ、御種の身に宿らせたまへども、人の恨か位の罰か十月に餘りたまふとも御誕生まします、おもき我身の物思ひ、御や、さまを産む迄は生死の程も定まらず、殊更いやしき臣下の娘、御位をけがさんと思もよらず、慮慮を覺しかへたまへと、妾詞もうつくしき娘に似ざる圓の大臣、ヤア何を申す中帯姫、救説を背くといひ、父を父とも思はぬいひぶん、御身内裏へ召されぬ以前大草香臣といふもの妻にくれよとよぎなく所望せしかども、大草香般に添はせて大臣が身に花咲かぬを合點して、詞でけとばし天皇へさし上しは、かやうの時節をぬらふての事、サア、はやうあ請、天王の種は懷妊、圓か娘、位も氏も憚なし、コレあつといや、ヤレあつとい

どうじやくと氣をいらつ、女御は父の直ならぬ心に心を苦しめて、さしうつむいておはします。葵の臣憚からず、君は御惱に御心亂れ、一腹一種の御弟親王泊瀬の御事御失念候や、兄として其弟をあはれむが親の子を愛す道にをなじ、御國ゆづりは泊瀬の皇子外に誰か候はんと、詞をはなつて申さる。大臣あけ高に成り、其泊瀬の皇子はとれとこに、天下をたもつ器量はあろか、不智不徳を我と知り、雲井のすまみまりこそばゆく、三年前國遠、雲介同然の皇子、位に立んとは葵殿の御思案違と打けつれば、にっこり笑ひ、泊瀬の皇子を不徳と見るこそ不徳なれ、御兄弟ならびまし、ては、我がた人の御方よと諂阿る説臣出で、御兄弟御中不和の基と末を見開き、都を出させたまへたる御賢徳、吳の泰伯の遺風といはる、皇子、尋求めて御國を譲らせたまひなば、萬民其徳に和し、御代長久の基ならんと、道をたしし理をつくす、臣を力、女御も共に泊瀬の皇子へ御位をを詞をそへ奏せらる。天皇龍顔うるはしく、貞有る后義有る臣いさめをいかで背くべき、泊瀬の皇子を位に立てん、急ぎ行衛を尋ねよと、あらたに宣旨下さるれば、臣はあつと冠をさげ、たごへば皇子遠き海つら世はなれたる山林に隠れ忍びたまふとも、武士に命し尋ねんに何條知れぬ事や候べきと、誠をあらはす悦喜の顔、色圓は引かへぶつてう顔、執權阿閉の郡領諸宗何かなまやまといと出で、葵公には似合ぬほうづもない奏問、いかな武士でも當所も



なひ僉議はならず、只あるいても四五年かゝる日本國中、はかりなき人かず一人く引と  
 りへ泊瀬の皇子は知らぬかと尋ねるならば、ゆつくりと廿年、べんくとした長僉議取り  
 置き、女御を位につけ奉るが上分別と、嘲る多言、耳にこらへぬ葵の臣の執權、玄上、廷尉  
 之介、鶴國憚からずす、み出、ヤ、理屈の濟ぬいひぶん、たとへば君を弑し親を殺す大罪人  
 逃走り隠るども、はかりなき人數當所がない僉議がならぬと其向にして置めさるゝか、日  
 月のあゆまずしてあゆむが如く、千里萬里も心であゆめば日本國をかけ廻らずとも尋ねる  
 手だては其身の器量、武門の職、左程不心掛では太刀先の劔味も覺束なし、泊瀬の皇  
 子の御迎鶴國仰をかふむらんと忍入てぞ申ける。イヤサ鶴國聞様があるい、無用の人を尋  
 るゆへ廻り遠しといふ事、僉議の筋を御邊にまけふか、皇子の迎は此諸宗。だまれく、  
 人の願をかち落し、皇子の御迎俄に望む下心此方合點、うまい事させぬく、是非御迎は某。  
 イヤ御使は諸宗と、互にまけじに言ひ募る。廷尉之介が弟御藏之介、鶴國真中へわつて入り、  
 此御使は鶴國どのもならぬく、諸宗は猶ならぬ、諍ふ迎は中からつかむ鶴國、サアとい  
 つでもじやますれば兄きと違ふて短氣者、びくともせば手は見せぬと諸宗がはなの先踏を  
 ぬつと突付て庭上に平伏すれば、我々無法の諸宗も、鶯國がいきほひにちそれて詞なかり  
 けり。天皇葵の臣を召れ、ものふどもの諍も世を思ふゆへぞかし、互に遺恨を残さぬた

め、今度の迎は御藏之介、皇子歸落有るやうに思案を廻らし、此玉の冠これを帝位のしる  
 しとして、加冠の儀式宜敷調へ計らはれよと、入御ならせたまひける。車の名のみか  
 はらねど、片輪車や足曳の大和の國のみやにます、例を代々につたへけり。桃の小路を櫛  
 笥通、引廻したる御所造、圓の大臣の車寄せ、まきだいしんでん遠侍、當番の近習外機青  
 侍原に至る迄、主の威をかるとらの間の役所の火鉢に高咄し、郡領諸宗が父阿閉の府生諸  
 門、腰はたわめど氣ははり弓、出仕に怠りなし打をばし引しめ、大紋の袖わかくと、心  
 は廿齡は七十、古來稀なるかた親仁、何も御大儀、七ツの時計は打ち申たが殿はまたあさ  
 がりないか、ヤアゑいと座に着けば、乾平馬平群隼人、御老人の御勤御苦勞、餘寒も強しと  
 火鉢あいそに指すれば、イヤいやくく、いや御無用、極寒の内でも此年迄火燵の味  
 も存せぬ祖父め、火のきらひな證據せなにちりげの跡もありなひ、十四の時から御前を勤  
 めて五十七年、今日の只今迄、くつしやみ一ツ致さず、今てもまだ八分の弓は引き申す、  
 口のこはい荒馬でも一責では乗りふせてわたにする、曲乗でも長馬場でもわかい衆にまけ  
 ねども、内のばいせが乗らせぬには草臥たど、大口いふも殊勝なり。還御と呼はり圓の大  
 臣諸宗召つれ、内入悪しくすまぬ顔、裝束の腕まくり、指貫引あげ、どつかと座をくむ思  
 案の躰、阿閉の府生手をつかへ、當今安康天皇には御足なへと成り給ひ、みづから御位を



すべらせ給ふよし、女御の御懐胎もいまだ湯やら水やら知れず、春宮の御沙汰もなし、御位はどなたへ、御評議いかい、どうかいひける。エ、親の思ふ程にもない、娘めは不孝者まさしく御位をゆづらんと論言す、時こそと眉をひらく所、今女御と呼ばれても臣下の娘、位を嗣ぐは恐れあり、泊瀬の皇子を太子に立よといけもせぬ賢女だて、親にはなあかしたる欲しらずめ、につくしにくしと忿の面色火のごとく、目鼻をひとつにし加める顔火鉢の足に異ならず。府生黙然と聞居たりしが、世倅諸宗よつく聞け、あのと娘御様は御同年なれども心の違ひは雪と墨、根性がすわらぬ故七十に成る諸門隠居もさせぬ不孝者、ア姫君は殿の四十二の二ツ子、女子なれば家繁昌と俗説にたがわず、御身は御入内后とあをがれ、父君は大納言限の家筋大臣に經あがり諸人の尊敬榮耀榮花を山になされうとまゝな女御様、もどをわすれず謙り、泊瀬の皇子を御位とは女儀の心で扱々々能くは御意なされた、子たるもの、鑑ちのれがく心の鑑とも思ふべき筈、ゆがんだ心に引くらべ女御をさみすぶつてう顔は何事と、叱る我子は餅のかた、異見の口は一ツにて、聞かする耳は二人なり。大臣犬きに忿り、ヤア廻り遠い老ぼれの意見時代に合ず、コリヤ郡領葵の臣がはからひにて泊瀬の皇子都へ入らば何をしても跡へん、女御の御産をいそぐより外思案なし、物謙の咄に聞及ぶ、千歳をふるもの、生血をとり、はらみ女にあとふればそ

のまゝ平産、殊に女でも男に成す變生男子の妙術、命ながき者鳥類には鶴、海には龜、人倫には仙術を行ふ者、當國久米の山中に仙人ありと昔よりいひならはす、平群隼人は彼山に仙人を尋見よ、乾平馬は浦々里々詮義せよ、千歳を經し鶴は黃鶴とて毛色悉く黃に變じ、代々ふる龜は甲に齡をあらはす、大臣か一生の望大事の使、はやく急げ。畏たど立つ所府生といめて、先待たれよ兩人順を以てたしきとするは妾婦の道逆、君の辭言を知りながら御尤づくめは女わらべも同然、世倅にあてし御あけん廻り遠くば近道のとへ、諸門わかき時より花をすき、草木をうゆるに花をはやく咲せん、若芽の子をふやさん迪、様々の糞を用ひ、土かひ水を過し、明暮花壇に氣をいらてば、花もいらちてかたはに咲く、子をふやす事は扱置き、親木迄せり枯らして根をたやす、種樹郭藁陀がめいごん、草木にかぎらず人の教、女御の御懐胎まづ其ごとく、陰陽しせんの時たらではいか成る良藥妙術も草木のこやしにひとしく害となるとも益あるまじ、其上生有る物をたすけてこそ御産の祈りとは成るべきに、何そや跡方なき空言を用ひ、物の命を取りたまはし、誕生はあるか女御の御命迄あやうく、終には大臣の御運もつきん、歎かはしく、老人か一生の諫言、御承引下されと、忿つ泣つはらくと忠義にあつき涙なり。大臣くわつとせき上げ飛かいつて引ふせ、弱腰五ツ六ツふみ付く、我大望の先を折るたは言に屈せず、隼人は山手、平



馬は海手、いそげくと退立やり、ヤイ死そこないめ、暗ころすはやすけれ共、世悖諸宗が奉公にめんじ、命をたすくる、重て出仕は無用、身か前へ頼だすなど、蹴飛ばされ、烏帽子も落ちて亂る、白髪は老木のやなぎ、たよくと起上れば、コレ親仁、此場の命助くるは諸宗といふ御子息の御影、日來理窟張る片意地の病御りやうちなざる、お脚いたゞき、腰骨にこたへたか、御前のとりなし我等に任せ、先退立と引立る、腕ふししかと取てかばと突のけ、世をうし海と老るびの腰をたすくる腰刀、杖になして立上り、譜第の屋形も今日限り、何面目に老が身の命一ツ名も一ツ、ふたゝび出て三ツ輪くむ、四つの翁と身退く、心の中こそたぐひなき。所の名さへ世にひく、たんとこの國與謝の入江のあま小舟、ならはぬ身にもなれてしる、安康帝の御弟泊瀬の皇子、天の縦せる御かたち、書道の道にも暗からず、浮世の富貴はうかべる雲と都をのがれ出給ひ、大公伯夷の跡を追ひ、御身は奴隸の菅簀や、あしたには釣をたのしみ、ゆふべには我友千鳥浦がくれてぞあはします。都を跡にゆく船のく、うら山里を見なれさほ、竹の御園の御ゆく尋て父の懐を出るも始旅始め、比はふなちのなみあらし二八の月の顔かたち、綾織姫は十六のふりく袖に春風のを、匂も花の御所摸様、見るめに蟹とやつせども、それとかくれはあら磯の、岸に近付く舟の中、女房達口々に、御父葵の臣様の仰せとはいひながら、泊瀬の皇子様お迎ひならば、御公家

衆か、侍まゆう歴々有るに、蟹とやらのもね、舟こそ魚釣として仕廻はどうする事、此鏡の毛のあられもなひ、腰の廻りのむまやくは、ア、いやらしと笑へば、ともに袖おほひ、ヲ、不思議は理り、泊瀬の皇子様は御位の望なく、都の月花ふり捨て、御心すくな釣棹に楽しみ、今のよの賢人と呼れ、大抵むつかしい御方でない、なまなか御公家衆の御迎では唐のやまどの引事そろへ、いひまけては取かへされず、御藏之介を連れ、そなたあきやとの父の仰せ、かうした姿も驚國がはからひ、此上にも思案して都へ手ぶりでいなぬ様に頼むぞやといひ給へば、驚國ほうかぶり押のけ櫓の廻らぬ此船頭でも、智恵まんくの海上、あてがなふてお供はせぬ、皇子様が八十許りな親仁では有まひし、血氣さかりの女房めづらしいどう中へ、お姫様の其うつくしい顔のにつこりほやくを見せたらば、いかな泊瀬の山あろしでも、ころりとさせ、連れて歸るは定の物、ヤ返るとは船の思みごと、あれあれ扱も風よひ釣舟、十が九ツ皇子様、拙者はあなたにお見まり、皆な京者とさどられまいぞ、道々聞た海老釣歌、爰ぢやくと苦かぐれ、上臈達かはり上げて、歌は西國訛ぶし、えんびやらうくりたなごや、ひげながなせにせはん、もうえとあぐるぞ、もうえびよあぐるぞ、あけての後にかいらうが、もどろがためのえとやろ、どんぼもつづく、はやもつづく、つゞき腹が立つならば、親重代の熊手を以て追はらひめせ、おゝそれも



んに、沖中の釣舟のまねをして鑑をびんまやん〜とこきあげてめせ〜、今の事はそれ言、かへる戻ろのつり歌も、君か歸洛の告ならん。皇子は釣のいとかしこく、やさしき都上臈の何ゆへかゝる賤の業、いぶかしさよとの給へは、姫は言葉の先とられ、都者とはわるいすい、御身こそ都も都雲の上人、なぜに海邊の御身やつし、是が不思議とありければ、されば世の人の色を好み酒に心の濁るを知らず、我はすみ渡る此海づらの松風の琴の音に眠をさまし、戀も色も知らぬぞとよ。扱もかたし、松の琴より三味線の浮世の色に引かれてこそは樂みよ、誰ぞあま〜にほれたなら、とんとそこらに濁らして、戀の波をあげたがよし、人がつけさをのぞまば、ちよつとす〜つてのますがよし、何が故にか妹背事御嫌ひそやどほのめかす。イヤ我とても岩木ならぬと、きけば色にはだされて、上たる人もかんふりはじき、湯殿のかげの忍ひ合ひ、見付られてゆかたでふるふも有げなり、世こそつて皆にござれり、衆人皆酔りと屈原が詞いさぎよしと思ふ身が、女のまがつた釣針にかゝりはせぬと仰せける。綾織姫莞爾と笑ひ、柎た、ひてハ、〜、ア、かたくるし、女房持たりや去られぬか、それこそ男のけんべい、氣にいらすば去つがよし、親の心のよい娘は好んでも持しやんせ、よいもわるいも一がいにいはるれば腹が立つ、それこそほんのへんくつげんじやと皆々どつと笑ふにぞ、京上臈の口には勝れず、漁夫が詞も是迄と棹に

御手をかけ給へば、姫君ひらりと乗移り、御手に取付き、つゝましやんすな泊瀬の皇子様、葵の臣が娘あやあり姫と申者、御兄安康天皇様には御位をありさせ給ひ、お迎にまへれとの宣旨に付、大膽なをのこ子を釣にかゝるはさかさま、釣らるゝが順道、また餌の味も釣の先の細いも太いも知らぬ身の、耻を捨て口説ににっこりとも遊さず、女をつるがおいやなら、此海〜とんと身を投げ、鯛や鱧に成ても釣られにや置ぬと、抱きつくかほりに御心ときめき、いや釣といふは鯛も鱧も、此様な人魚は手とらまへが得物ぞと、ひつたり抱き付きしめ合て、笛引きおほひ入り給ふ。女房は氣をもみ上、さつても手ばしかひお働き、お姫様に疵つけ、此上に都へ行まいなど御意ならば、跡へも先へもいくまいぞや。何をいやる、あゝ取り組んでしつぱりと一汗の上では、都はあるか天竺迄もござれ〜、ア、志んき、あれ〜お舟がゆらつき出た、見れば目のどく皆おぢや〜と、船底へこそ入にける。爰に同國與謝の郡水の江の浦里に、浦島太郎久壽とて、もとは漁夫の業なりしが、天性仁愛の心厚く、所の人にもゆるされ、刀もさすが筋目よき妻をむかへて、むつまじき夫婦の中の小太郎が誕生日のみやまいり、また若草の懐に産着の紋の絶箔も、萬代祝ふ松と竹、與謝の社の下向道、なんと女房、常に御め下さるゝ皇子様へ立寄り、御祝申上まいか、ヤア〜濱から大勢わめいて来る、何事ぞやとちよれと立やすらへば、浦手の綱子數



十人聲々に、都からあふれの有る大龜をしてやつた、サア御はうびは望み次第、とり落し甲に疵付な、えい／＼と荷ひ來る。夫婦立より能見れば、甲の紋あざやかに尾は金糸をみだすが如く、耳ある龜の悲しげに、ねばき涙ぞ不便なる。なふ浦の衆是はまさしく千年に及ぶ龜、今日は世倅が宮参り、生さきを祝ふため申請て助けたし、地侍の身上過分の價は心に任せず、いづれもの骨も盗まず、酒手程はあませう、せひ／＼所望といひければ、ヤア千貫ともいふもの、酒手でくれい、のぶといわろ、邪魔さるなど、手々に龜を昇上る。突退け押退け取て投げ、龜の主は此太郎、寄て怪我まぐるなど、龜にとつかと腰かくる。ソリヤ大かたり、大盗人、ぶてよた／＼と口計り、乾平馬家來引つれどつと來り、ヤアかす侍のねだりもの、忝も當今のようご御懐胎の御難、その龜の生血を取る、早々渡せいちばらば親子三人木の空ですゝますと、かみ付くやうなる大音聲、浦島ちつとひるまらず、助くる程に下されど、禮を以て所望なら、了簡してやりませう、瘦侍とあなどり、生血をとるこちへあこせとは法を知らぬ雜言、權威をくふ男でなし、かたりもいはず盗みもせぬ、もとは是は某が龜、證據は甲に書付ある、文字が讀ずば慥に聞け、允恭天皇十一年秋七月水の江の住人浦島庄司是を放つ、是又左の方の書付、全じく四十二年春三月浦島太郎久壽是を放つと、朱うるしの書付け、我も以前は漁を業とし、過る年此龜をつり得し所に、

甲を見れば親庄司がたすけりとの書付け、幼少にてはなれし親の手跡、此龜の我釣にかゝりしは殺生を止めよとの父の意見と身にこたへ、棹を折り網を捨て、あなじく我も書付し助けたる龜なれば、親のゆずりの證文あり、慥な持主天下のさばきも證文次第、我物を我放つに／＼ともいひ手は有まい、親子も三代たすくるも是で三度、今日小太郎是を放つと甲を取て刎返せば、寄くる波に打つれ、二三度見返り、嬉しげに蕩くづにかくれまづみけけり。ヤア王命をそむく不敵者遁すな、やらぬと、真中に追取まく。身一ツならぬ久壽切ぬけんど働けども、十方より打刀拂ひかねて見へたる所に、泊瀬の皇子宮押上げ、年月我にみやづかへ心ざしある浦島夫婦、御藏之介あれ助けよ、頼む／＼と御説の下、水棹追取りかけ上り、なぐり立てぶち散し、浦島夫婦を後にかこひ、勅説をかしに非道をはたらく似せ者めら、誤て歸ればよし、意地ばらばかたはしに汐水くれんとねめつければ、ヤア似せものとは、天子にかわらぬ圓の大臣のまんざん乾平馬、狼藉者のかたふど一くるめにぶち殺せ。ヤア圓の蕪のやかましい、我こそ葵の臣の御内御藏の介鷲國、主君の姫諸共泊瀬の皇子の御迎へ、船中によします浦島夫婦は皇子の御家來同然、きやつ一人もあますな太郎と、左右へわかれてなき立きり立、松原さして追まくる。乾平馬取つて返し、泊瀬の皇子をぶち殺せば龜に劣らぬ高名と、太腿波にた／＼かせ、御船を見かけねらひ寄る。どつ



こひやらぬと浦島が妻、子を抱き乍ら腰たけ海にありひたり、波を踏みわけ歩み寄り、こりやさせぬと志がみ付く。ヤア芝やまな女郎めとふりはなせば、又取り付き、浦島の蟹に馴れたる女、波も藻くづも事共せず、引とめんどもまやくり引く。平馬は京者海は不得手、その岩角ふみ外しくたちくく、次第にさす汐はや汐に、もんづもまれつ、打波の音ちから聲命限りとせり合しが、さすが女の腕さきのよはる所をすつと引寄せ、龜をたすけた返報みくづになれと深みへどうと打込む波の、はかなき最期ぞ不便なる。鶯國浦島遙に見つけ、驅け来れば太刀も合さず、潮蹴立て、逃うせたり。妻子にはなれ浦島太郎いさむ心の力も落ち、涙うつきはにどうと座し、前後も知らず歎きしが、此身を惜むも小太郎故、妻子に別れ何ながらへん、介錯頼む鶯國殿と、刀取る手をまつかどとらへ、と、いめてもとどまらず、忝くも泊瀬の皇子まばしく浦島と、姫君諸共御舟を出給ひ、歎くはとはり、去ながら我此浦の笠屋住、夫婦が情になぐさみしに、妻は殺され汝は自害、我ひとりすすこと都へは歸るまじ、命ながらへ歸洛の供とは思はぬかと、の給ふ後に、浦島殿太郎殿小太郎も我身も死はせぬ、水底をくわたりたすかりしと歩み來るは、ヤア女房か、是はくあぶないかげん、不思議の命、浦島が助かるは皇子の今の御一言、妻子が放ちし龜の恩、龜の齡を此の子が壽命、萬と年と悦ぶ最中、討もらせしわかどうまもへ、皇子やらぬとも

らがりける。ヤア鶯國のわしが羽虫同然、サア來いくと、引よせく、六七八人左右の脇にうんと引しめ、浦島は龜を放す、うぬらは圓か泥水くらふどろ龜、サ、今日たけ今鶯國放すと、打込む音もすつばんく、すつばんばん、日本無双、三ツの絶景、天の橋立緑のはし、姫はいもせのなれ合くせ戸、與謝にかゝりし浦島が一夜の御宿内外の濱、浪松風も聲そへて、君をことぶく太平樂、笠上御藏が武勇に治る、波も靜に青海波、千代ふる年ふる萬世の龜の背に書く筆の跡、傳て今にまるとかや。

## 第一

餘所にのみ見し白雲の高間山、高嶺天に横たはり、刀もて削なすこうらんの勢、鑿して穿つ海岸の形、見れば異山の高根くをつたへ來て、此葛城の半腹にかゝる雲より其上は、人跡絶て道もなし。斯くて阿閉の郡領諸宗、主君の仰も雲をつかむ仙人の住む山もがなど、相傳の家來平群の集人一人召具し、天のかぐ山吉野山かけてぞ通ふ岩橋のかつらぎ山に着にける。隼人は付きかね、申く且那日は曇りて刻限は知らぬとも、我腹は七ツさがり、先に仙人か有やらないやら當もなき足づいやし。麓に一宿明日はち尋ねぬとされぬかと、いふ



頸は日影より遙の西にかたむけり。エ、辻占あるい、此葛城は一言生の神の靈地、仙術をまなぶもの此山に入り行なへば、忽に成就、日本に山多けれども心當は爰一ツ、ひだるくば木の實でも拾ふて食へ、汝一人は心元なく、某駈け着けてさへそのぶせう、ごくに立ずと叱かられ、仙人は木の實を食する者、此山にゐるならば一ツも残して置まいと、たはぶれながら打つれて、いばら萱笹押分け、木の根をふまへ、がづらに取付き遣上り、行手の大木松のあらかは押けつり、墨ぐるに書たる人かた、見るより諸宗びつくりし、こりや何ぞや、木こりも通はぬおく山にふしぎくどくはしく見れば、衣冠東帯の人かた、腰より足に大釘を打込み、八萬四千餘種の外道安楽天皇の身を不具になし、はやく帝位をさらしめ給へと、呪の筆跡讀みもあはらず大きに驚き、此の柳にも緋の袴着たる女の人かた、中帯の女御が平産をといめ給へと讀もあはらず、扱は天皇の御足た、女御の御産月のびしも此祟り、サア仙人は脇へ成る、天下の大事見付し、何者が何の意趣と主従顔を見合せて、あきれ果たる斗りなり。諸宗心も心ならず、仙人を尋るも殺して血を取り女御にまいらせ、御懐胎の御子を是非男子にせんとの爲め斗り、其子を封じられ、御産なくては何のへんてつもない事、たどへ五年が七年でも呪やつとらゆる迄當山は出まじ、我はあの岩屋にかくれんづ、汝は向ふの繁みに忍び、聲を相圖に出合ひ、ぬかるなあくれな

目を働けど、是も思案の遙き道をわかれて入にける。瓶には谷澗一滴の水を納め、かなへには青山數邊の雲を直す、曲を得て人見へず、青がりし梢も今は紅の秋の氣色は面白や、我もむかしは大草香の臣と呼ばれ、百敷に冠をならべ、袖をつらぬし花衣、今は雲井を落葉衣の袖寒く、新柳の髪はげづれども、手にもとられぬうくも髪、あどろの髭、都を去て立歸らぬ、月日も身につもる、恨をせめてはらさんと立寄り、后の人かたに打釘、蟻糞には石丁々、人我につらければ、我又人にうきふしの、腹にやどる子はうませじ、王位をくらやみ、我も戀慕の闇より迷ふ、嬉しや思ひははれたりとあどり上り飛上り、悦びいさみ立歸る。道の向ふ、平群隼人すつくと立ち、鏢元くつるげ詰かけたり。はつと驚き立歸る岩影、諸宗がとりみだち、前後をつまれ行衛をつまれ、山姥ならぬ山めぐり、通を失ふ仙人とぶ鳥の翅もかれしごとくなり。諸宗怒て大音上げ、王土に住なから安楽天皇を呪盟し女御の御産をさまたぐる似非者一寸も動かせじと、口にはいへど心にはもし雲に乗ては逃まいかと、眼をくばるつら魂、ヤアさいふ和殿は阿閉の郡領諸宗な、我こそ大草香の臣がなれの果といふ聲計りは髣髴として、憔悴枯槁の木の葉衣、諸宗ちつとも合點せず、いやさ仙人に近付は持ないと、太刀ひぬくつて油断なく、動かば切らんと詰かくる。草香の臣どうと坐し、昔にあらぬ我が姿見忘れしはとほり、空をかけるつばさ、地を走る獸、



戀慕愛執の心あらずや、まして我が人心、御邊が主人圓の息女なかしの姫に戀慕し、數通の玉章書きくれてふる涙の雨、つもつて床の海となり、身もうく計りがれしかど、かりそめの返しもなく、中立を得て親大臣にいひ入れ願ひ、忽成就し、婚禮を待つ嬉しさに、始めのつらさもわすられし、思ひよらず安康天皇后に召れんとの勅諭、にくやひきやうや圓の大臣先約をひる返し、中帯姫を天皇に奉る、本意なき、無念さ、口惜さ、恨の一太刀天皇をや姫をや、大臣にや思ひ知らせんと、いくたびか思ひはやりしを、不運の我身かへり見て人知れず都を立去り、眉輪の翁と名を改め、此の葛城の山深く仙人の跡を尋ね、長生不老を求め、姫は女御の位にいたり懐胎せしと聞よりも、昔にかへる戀衣、二たび涙しぼりかね、天皇夫婦を調伏、今日百日満願、口惜しやあのれらに見付られ、徒になさん無念やと、怒る詞の内より諸宗めくはせ、隼人心得、後よりまつ二つと切かくる。太刀影にひらりと外し、隼人をおかつはとふみふせ、ヤアおろか、五たいは枯木、念刀は行力に随つてます力を見よと、踏み付るきものたばね、きやつと計りを最後にて山路の露ときえてけり。諸宗がささずむんずとだきとめ、馬手の脇腹ゆん手の脇へ太刀先朱にくつとさす、うんどのるを抱きすくめ、エ、すさまじいどしやう骨、あのれを害すれば女御御産安穩、天皇の御足立ち、天も立つとさし通されて、のつつかへんづ身をもがき、殺さば殺

せ思ひ込んたる我一念、天皇の命をとり女御の懷妊を封じとむるはてを見よ。ヤアそのおどがひやめよと、さいてはるぐりぬいては切り、今こそ息は絶たりと、踏みこかせどもちつ共動がす立すくばり、金輪際よりはへぬきて、眼もふさがすにらむが如く、扱氣味わるい死さまやと、思へばぞく神をいろさむけ、忽ち山谷動揺し、死骸より赤色の魂顯れ出で、車輪のごとくひらめいたり。諸宗も我をはつて刀をふつても膝震ひ、歩むとすれば脚がつくり、こけつまるびつ逃出れば、猶も風荒れ木の葉をふるひ、あはれ草香が露のたまこくうにいろき音に聞く。たんごの國より飛脚到來し、泊瀬の皇子都入との使、飛鳥の宮にてむかへ、御初冠との宣旨にて、拜殿に褥をまふけ、御簾几帳立たし、天皇の御かはりには中帯の女御、掌侍典侍の上臈達、葵のおどいは引入の大臣、理髮給仕の卿相雲客、賦に列座して、今やくと待請らる。もとより皇子は古を好み、奢をにくむ御本性、位に即く迄は海邊の漁夫馬乗のものよしなしと、ごんずわらじの旅衣、綾織姫御藏之介、浦島太郎が扱つゝみ、道の荷になる小太郎を、一荷と志たる風呂敷つゝみ、おまよぼからげの女房も、田舎おぼへて殊勝なり。御藏之介鷲國皇子御入と呼ばれども、かちたしの旅躰、人々思ひかけもなく、綾織姫心付き、是こそそにて渡らせ給へと有ければ、父のおどいを始とし、百官はつと拜揖ある。皇子臆せず拜殿に入給へば、なかしの女御の御







女御を始め上臈達可笑しきこらへ給ふ程、迷惑は浦島一人、只まぬくと心をあせる、羅中よりもまぬくと皇子玉の冠禮服めされ出御有り、葵の臣扶持しまいらせ、泊瀬の皇子御位をうけ継ぎ、雄略天皇と號し奉ると披露あれば、百寮百史はつと一度に拜舞して、皆萬歳をぞとなへける。君は女御に向はせ給ひ、朝觀の御拜有り、朕は是れ假りの王位、若宮にても姫宮にても誕生の御子へ位をゆずる契約、臣體に聞き置かれよ、今御譲りを受けられたらば、兄弟は我父、女御は即母后、親子むすびの御土器給はらんと、樽をさがり禮義ある。扱感に入つたる御詞、さあらば酌には好ある、浦島が妻内侍の代女官になすぞとの給へば、ヤイなふこちの人女御様の御意で忽ちやくいんに成ました、シテ此口の二つあるかねのかいげで酌する事か、ム、是よりは眩鍋がよい物と、とつと笑ひも時の御祝義、とり廻る御かはらけ、既に女御の御つもりと、とりわけ給ふ折しもあれ、俄に吹くる飛鳥風稍を鳴らしどうたり。ひききにつれて草香の臣がさいごの亡魂一團のほのほど成て舞ひ來り、御かはらけに飛入れども、それとは更に見る人なきぞ不思議なる。めでたふ自からあさむるぞと飲みほし給ふとひとしく、御目の中は朱をさす如く、額にみだる汗の玉ほとありわなく御なやみ、各周章立騒ぎ、君も甚だ驚き給ひ、風邪の入し酒毒かと、立寄る御手をぞつとまめ、エイ飲むといふ程飲みもせぬもの何の酒毒、風邪とはよい見た

て、戀といふ風氣、此ほに抱かれて寐て、一夜の汗で風をさましてもらひたいと、引寄せくだきしめ給ふ濫行に、君は赤面詞なく、臣耻しめ、よも御本性とは見へぬとも、親子かための御盃もあらぬに、禽獸に同じき御身持と制せらる。ハアあかしの親子は戀をせぬものといつ世の誑ぞ、親でも子でもほれたが病、母親ごかしいやぞと、身を打もたるゝまどけなき。鷺國こらへず飛あがつて引はなせば、臣浦島綾織姫をかこひ奉り、神主の屋に入御なし申せば、ヤア思ひ人はなしはやらじとかけ出し給ふを、上臈達引とむれば、おのれ等がほうかひ悋氣を取つきのけ、はらひのけ、戀人返せ君返せと、瑞籬玉垣井がき拜殿廻廊幣殿かぐら殿、かけ廻りかけ戻り、すきを見て組とめんとねらひよる鷺國が目鼻の間をばた、火の出る斗りたき付け、神主にかけ込み給へば、鬼や大蛇はつかめ共、女御はつかまぬ鷺國も跡をしたらうて入にける。女房ひとりうるゝうるゝ、興をさまして、扱もきつし、こりやまア何ぞや、女御様でないありやもうこ様、つはものゝ御藏殿をばたくとたいてなげる手あい、少すもふも成るはいの、さきにから氣をもみ、峠で飲んだ酒氣はすつきりしやんと醒め果た、さらば京酒一ツ出かけましよと、引請けくつゝ五六杯。ハア、色といひ香といひ下地の水から田舎とは違ふた、ま一ツあさへて又つゝ、自身のあいであつた、面白天を慕とし地を毛氈、



花も月も是なり、手短かに盃おさめて銚子の口から瓶子かたふけ、酌めどもつきず飲めどもかはらぬくく、ハ、ハこりやどうじや、ハ、ハ目がゆくめが行くも目が行候、ハ、ハ足本はよろくくよろくくと、よりはり臥したる拜殿に、前後正躰なかりけり。女房どもくくと、夫浦島走出、ヤ草臥て休んだか、起きよく、女御も御所へ還御成り臣も御藏が御供し只今御歸り、そちも御殿へ召つれられんとて御尋、起きよくと、ゆすつてもこそぐつても、エ、じゆくし臭い、又喰ふたな、うたてやな一滴もならぬ奴、いつその程にか底抜け、目がさむると口たき寐れば三日も夢介、古郷と違ひ都ははれ、どこぞで夫にも耻與へるは必説と、ぶつ、つめつつ、踏んでも蹴ても高尉、扱丁簡もなき次第やと、咬はて、立たりしが、誰が奉納か神前に凌王の額の面、屈強の物一度の耻に一代のしつけせんと、申しをろすも恐れながら、一ツは神慮の恵みにて、酒の癖をやめさせ給へど、寝顔に打させ、紐かたく引しめ、神を拜して入にけり。日影かたふく西風の身にひやくと酔醒心鬱どりと、ヤア是は扱寝て退けた、日が暮れたか真黒な目はろくに覺めかど、顔をなで、エ、うとまじや、額も頬もこはばつて、撫てもさすつてもおぼへぬ、悲しやなんたる病ぞ、洗ふて見んと御手洗の水に移る水かみみ、ナフこはや情なや、鬼に成た、浦島殿、もとの顔にしてほしい、姫君様皇子様、わしや鬼になりました、鬼ぢやく、如何なる神

の御爵ぞと、立ては歎き居ては泣き、五躰を志らずにどうとなげ、身をもだゆれば髪ほどけ、紐もほどけて面落たり。ナア嬉しや鬼の皮取れたはと、取上見れば舞樂面。扱は酔の中なぶつて誰が志わざぞや、是をさへおぼへぬばいかなる淺ましき面目を失ひ、夫婦のあいそも盡きつらん、浦島殿にももう添はれぬ、あかぬ別れのはしと成るべき酒を知り、つねくふつくと飲むまゝ、盃も手にとらじと思ひ切ても、酒の香きけば前後を忘る、こはそもいかなる我性ぞと、二度歎きくやみしが、樓門の方より四方に目くばり来る人は丹後にて仇をなせし乾の平馬、今来るは心得ずと、拜殿の椽の下、身をかくしてぞ窺ひける程なく平馬神前をうそくとのぞき廻り、袖より小さき合圖の拍子木打ならず、數に合せてひいふう瑞籬三四をうてば御供殿、木影物影一二三人はらくと集り寄る。平馬一所に招き寄せ、我はるく丹州へくだり、主君の仰せの龜をとらず、剩手にとりし皇子さへ討もらし、まんまと今日都へ入り、何とも一分立かたし、去ながら仕合なをり女御も還御、煮てもやいてもかまれぬ驚國めは、臣が供して鳥居通りをたつた今歸る、跡にのこり骨らしいは浦島一人、長袖ばら、皇子を討つは蠅を取より易い事、方々忍び入てかり出せ、我爰に待受け、一人もあまらず。承ると三人が、三方にわかれ忍び込む。平馬志やだんの罪をひらき身をひそめ隠れ入り、内より扉さす所を、こくらがりより女房躍り出で、どつこ



いごこへと扉のかけがねてうごあるせば、内よりゑいゝゝゑいや聲して押せ共押さへて動かせず。奥より浦島三人を左右に請け、切て出れば、ナフなふこちの人せくまいゝゝ、大將平馬は此社壇に袋の鼠たゞ取こと。ヲ、でかしたと、三人を三方にほつ詰めゝ切り伏せて、平馬を討たんそのけとかけよれば、暫時ゝいふ事有り、きやつは當座の敵でなく御身の爲めには妻の敵、小太郎が母の敵、といへども浦島のみこまず。不審尤、始の妻は彼が手にかげ海に沈め水屑と消へし痛はしさ、我れ小太郎をいだきどり、かりに妻と化生じ、此子に甘露の乳をふくめ、今日までは育てしが、酒を好む本性にあらぬ姿を見られしかど、我をかたるも耻かしながら、龍の都に入千年経る龜なるぞや、御身三代に三度の命助る報恩、ちぎりは是迄、サア敵討ち給へと、きつと開く御寶殿、神通にとらはれて、よろめきゝ出る敵を取て押へ、目には名残の涙乍ら、先妻の恨一刀、親子の恨一刀、三刀、四刀、さし通し、ゝ、敵をうちしも御身の力、迎もの事に姿をかへず、子を育てそひ果てくれよ、はなちはやらじとすがり付けば、形は消へあらぬ方に又あらわれ、一たび我名を願しては此土にて人間のまじわり叶はず、小太郎が子々孫々壽命を守らんさらばやといふ聲々に綾織姫、君も驚き出給ひ、取付けばはつときへ、見へつ隠れつ御手洗の池の汀によるぞと見へし、忽ち龜の形と現し、三曲の金色四方にみちゝたり。龜も悦び、ふく

みしうしほ波の白絲吹出し、ながれみなざる瀧の水、絶ずどうたり、どうゝと、齡は萬年、保の壽命の龜のこの、ゝ、此世始り異國は老らず、日本に龍宮城と夫婦の例、此浦島と神代の彦火火出見のいにしいと、二筋かけて釣の縁、見かへるも縁、見送るも、縁は盡きせぬよるべの水に、入よと見へし、儼は、波に残してうせにけり。

第三

太舜天下を棄るを視る事敵たる蹤をぬぐが如し、唯父母に従ふて愁へを解くとかや。泊瀬の皇子即位有り、雄略天皇と申奉り、天のたくみを請け継ぎ、四海をなづる功になびきのへふす人民や、賢王聖主とあふげども、日月に蝕あるごとく、御母中帯の女御淫奔不義の御行跡、上下の嘲り、御身にせまり、南殿の御格子深かく、獄屋を立つべしとの勅によつて、圓の大臣の執權阿閉の郡領諸宗、葵の臣の御隨身玄上延尉之介鶴國、木工修理の番匠に命じ、檜の柱、鐵の貫、七尺四面の獄屋きうでんに取くみしは神代も聞ぬ珍事なり。鶴國諸宗庭上に畏り、仰をかうむり獄屋はまつらへ候へども、凡咎あるものは高官下官によらず、官位をけずり、衣冠をはぎ、大理の廳にくだし平人同様に禁獄し、罪の輕



重をたすは武士の存所、不淨穢を改らるゝ宮中に、いぶせき獄屋いか成る重罪の人をや籠置るべき、古今未曾有の勅詔と、詞を揃へ申ける。圓の大臣聞きもあへず、汝等が不審尤々、我迎も其通り、當御代に成り御前へ出るもたまさか、敵慮の程察しがたし、葵の臣は綾織姫の御ゆかり、我等には格別御前さらずの御出頭、御内々の詔、定めて御存じあるべしと、仁者をさみする詞の針、少もあぐれず、いかにも稀有の勅詔、いか成る事とうかいひしに、神明正統君子國の日本を畜生國になさんとする悪心の者朕が身近く有り、縲綹にいましめずんば、忽ち國のやぶれと成る、此悪人を退けん爲なり、殿上に囚をまつらへとの繪言、圓公さへ御存意なき咎人、愚蒙の某、存すべき様なし、定めて當今の御即位いやり、底意にたくみ有る人はさこそ心成るまじ、笑止に存ずる大臣殿と、鸚鵡返しのおてこと、耳をつぶして圓の大臣、ハ、ア咎人志れたく、近年は時ならず大かみなり、加茂明神の油斷雷の神を入るゝ爲め、殿上の獄屋嬉しや我等がぶす、お影で向後かみなりの根切り、晝中に蚊帳も釣まいと、そこらの悪を座輿になし、いひすべらする油口、廷尉之介をせ笑ひ、内外政に與る圓公の仰とも覺へず、國家を亂す咎人玉座近しとの勅詔に、何の不審、其悪人とは大臣の中帯の女御。ヤア女御を咎人とは推參やつ、我娘ながら御入内以來主君とあをぐ中帯の女御、殊に先帝安康の御種を御懷胎、當今の爲にも袋、其母を獄

屋に入れ、雄略天皇政道が立つべきか、うづ虫のぶんどい慮外を吐かば、蹴飛さんと、かさにかゝつてきめ付る。イヤ鶴國は不調法、天下の爲には女御でも大臣でも憚からぬが御奉公と一圖に覺へて詔まらず、異國には漢國の後呂太后辟陽侯に密通し、一族の奢より、漢の代のみだれと成る、其呂太后から釣をとる女御の身持、御親父の目にかゝらぬはすぐちがえくばか、但親子の相談か、牢へ入れる中帯の女御萬にひとつそれたらば、大臣どのがあぶないく、是忠臣のさすの神子、占は違ぬ事、親子の悪事九裸、大臣はつと胸に釘、口は閉て目をむき出し、にらめばひるまぜ白眼返す顔、魂、そこ氣味わるく氣もあぐれ、牢屋を見るもそい神立ち、ちりげもどからまはく、おこり病見ることくなり。阿閉の郡領ひさ立直し、舌ながし廷尉之介、我君は長袖、下郎の雜言聞捨に志緒ふとも、此諸宗は得こらへず、サアまつひら御免と手をつかずば御所とはいはずふちはたすと、反を打て詰かくる。テ、サ雜言と聞く耳には雜言、金言と聞く耳には金言、汝の親阿閉の府生諸門主人を見限り隠居せしとな、合點ゆかすば屋敷へ歸つて府生にとへ、ヤア親は親、我は我、慮外の舌の根きりさげんとつと立てば、ついで立ち、兩方ぬかんとする所葵の臣聲をかけ、玉座近し鶴國志され、諸宗ひかへと、諸卿口々制止の折節、出御なりと警蹕の聲、兩家の兩雄恐れて左右にひれ伏せば、堂上堂下皆々冠を傾くる。天皇南殿に渡御成り、誠



に繪に寫し物語に聞きしは物の數ならず、いふせき獄屋の形よな、去ながら唐の聖代にも圍圍と名づけて國をあたむるそなへとする、されば形はいまはしといへども、善を勧め悪を懲し、心のゆがみをためたす政道の實是にまさる物あらじ、いで朝廷をくつ返し天下愁の張本と成る大罪人、只今いましめ見すべしとの御諭言、すは身の上と圓の大臣色青ざめふるいゝ跡じさり、卿相雲容目引き袖引き、笑止く〜と見る所に、御裝束をかなぐり捨て、みづから囚に入御成て、内より扉を引立給へば、はつと驚き、百官有司仰天したりばかりなり。誰かある外より銃をかためよと、御聲の内、大臣ほつと胸ひらけ、諭言是非なし銃あるさんとつゝたつと、ア、率爾千萬と、葵の臣謹で涙をうかめ、普天率土の主としてかゝる淺ましき御有様、漢家本朝に例なし、君は日月獄屋は天の岩戸にて、今日より天下常闇、世界の理非もわかれず、下萬氏の歎あはれと思召れずや、總じて悪人をいましむるは罪の形外に顯るを以て是を制す、御身に見へたる罪もなし、御心ひる返され、牢を出御下されと、詞を盡し奏せらる。いやとよ我が罪には形なし、心の内の罪なれば我より外にしるものなし、日外飛鳥の宮にて即位の時、中帯の女御の御姿見物しより、淺ましや勿躰なや母たる御身に心をかけ、朝政身にします、思に迷ふ戀慕の闇はらすにはれやらす、此惡念のいやまさば、あのれが母犯せる罪、あのれが子犯せる罪、違つ曾祖の神制に

背き、天下男女の道を亂り、僻事とは知れども思を切られぬは神慮のかごにもはづれしか、一天四海の上に立つ身いかなる邪不義有てもいましむる人はなし、心に心を制する獄屋、不義不仁の悪人は天子も其咎のかれずと、身を苦しむるも民の爲め、蠶といへる虫を見よ、糸をはき糸を引き、其身を八重に引覆ひ引つゝみ、巢の中にて空しく成る、其巢を以て億兆の人の肌をあたゝむる、蠶の虫すら仁徳有り、此獄屋は蠶の巢、かゝこの虫は朕が手本、朕又萬民の手本ぞや、我非道をつゝまん爲め、母女御の御方よりの戀などいよしなき事をいひほださば、丸には不孝の名を取らせ、汝等は不忠の臣、命は獄屋の牢ぐたし、骸は爰に朽るとも、此惡念のはれざる内、囚を出るとあらじと、母女御の悪行を御身に受し御孝心、皆々退出仕れと、牢屋にどつと御座をしめ、思しきつたる龍眼に御涙をはらくと、つゝみかねさせ給ひしは、忝しども哀れとも思ひやるさへ恐れあり。人とはつと涙にくれ、何と奏せん胸の戸口も詞の銃もはつとあろす圓の大臣、鬼に瘡をとられし如くくはんく〜として入れれば、始にかはる葵主従、打ひそみたる有様、郡領いきつて、コレサ鶴國ろくな眼も持ず、けつかうな忠臣のさすの神子、まだ此上に見通し立して、盜賊なみに本詰牢を見通すなど、瀧口へ出ければ、鶴國無念の顔色、葵の臣は天皇の御孝心肝にしみ、衣紋にかゝる涙の雨、すがたに簀をきぬ斗り、まほれてこそは入給ふ。かくと



聞くより綾織姫すがたくつおれ走り出て、こは勿躰なの御有様と、獄屋にひしとすがり付き、暫し泣入り給ひしが、みづからが初戀は、はるく君を迎舟、丹後の國の浦の波、うらなき御心有がたく思ひそめ、お位の後は誰憚からず、明くれ御側をはなれまいぞと、たのみしかひもなく、下々にもある事か、御母女御のほうかいりんき、夜のおといは思ひもよらず、晝もお顔を見る事か、おなじ御殿に有りながら、千里萬里も隔てし心、今日や御側へ今宵やお寐間と、待くらしたるわけの果、淺ましい是は何事ぞ、高いもひくいも女のちからは殿御を頼み、我子にほれる母親に御孝行も程がある、なんぼ親御の悪名を御身にうけふと遊しても、御心のすいしきは天が下にかくれがない、はやく出御ましますか、さもなくばみづからもひとつ牢屋と計りにて、くどき立てぞ泣まづむ。天皇は一筋に天地諸神を御拜有り、御母女御の悪心ひる返し給へど、肝膽くだき御祈誓に、御いらへもましまさず、姫は猶しも亂るゝ心、扱は君にも捨てられし、戀の敵は御袋の徒者、殺されふが刻まれふが存分いはんと走り行くつま戸の影、御母女御面色變つて立給へば、ハア、く冷る所に、いつから其處に御坐りましたと、ひざもわなくふるひ聲。何ぞや母を敵とはおのれこそ妾か戀の敵よ、子にほれる徒とは天皇をいつ産だ、母とはかりの名、男にほれるは女の情、おのれに戀をままけふか、サア思ひきるかきらぬかと、ぞりくくとより

給へば、逃んにも逃られず、心をすへて綾織姫、エ、聞にくい見ぐるしい女御様、血をわけねども親子といふ名に恩もあり義理もある、産み落さねば子ではないほれたとはあつかはな、恐しやく、天魔の業か、狂亂か、先帝安康天皇様は御足の養生な、くりの湯へ湯治なされ、御留主の御所なれば迎、慥に御つれあいの有るは定、たどへ親子でなふてから徒でないか、なんと不義では有まいか。ヤア黙れおのれに不義の吟味たが頼む、活けておかば妾が怨、まめ殺さんと、十二ひとつへの付け紐たぐつてかけより給へば、彼方へはづじ、此方へくわいり、逃るもかよはき糸櫻、追ふも色ある梅花のかんばせ、緋の袴ふみほころばし、ふみしたき、廊下渡殿追廻し、追かくる、天皇おはやと思へども猶御聲をつししみ、不祥は見じと御目をふさぎおはします。綾織姫は身を通れんとおはしまひらりと飛おり給へば、つひひて飛び、逃る裾は右近の御垣にもつれてなやむを、すかまらず寄て首にまよへる紐もあやうし綾織姫、既にかうよと見る所に、廷尉之介鶴國一文字に駈け來り、綾織姫を引はなし、女御を取てひつふせ、大音上げ、大悪不義の母女御、戀慕の證據は此鶴國天皇に御答なし、たぞ參つて獄屋を出し奉れと呼はる聲、はつと聞より郡領かけ付け、綾織姫を弓手にとらへ、刀を胸に押當て、サア鶴國女御に刃むかひ奉らば、此姫を一刀と、人質取て動かさず。鶴國からくと笑ひ、いとほねく是姫君、お命かばへば悪人の女御



をにがす、女も男も君のため世のため、命を捨つるは臣下の道、帝を大事と覺しめさば、爰で御命捨た。テ、心得た、君が爲め殺さばこそせとびくともせぬけなげさ。それでこそ我主人、サア女御を一えぐりと、ずはと抜いたる氷の刀、天皇御聲高々と、先帝の御子胎内にまします、あやまちせば朕先づくびれ死ぬべきぞ、放せくと、志きりの勅説、さすがの鶴國思案さらに決定せず、腕先狂ふかたなかりと投げすて涙をうかめ、御身にかへての御孝心かんじ奉るも恐れのいたり候へども、二年餘り誕生なきは何しに先帝の御子、血塊龜腹などの病、宮中に置いて後の禍、此鶴國が預り、命は助くる、君は牢より出御あり、諸人の歎をばらさせ給へど、思ひ入て奏すれば、いやとよ、汝等が心には今牢屋にくるしむ此身を雄略天皇と見る故に、母女御をにくむそや、朕が身に於て牢に入べき非道なし、母の非道を制せん爲め親子は一昧、母に代る此獄屋、朕が身をすぐに母女御に見よ、母の悪念やまぬ内、此母が牢屋を出、其母の濫行いやまさは、不孝の上の不孝ぞと身をこらす我心、天神地祇もあはれみをたれ給へ、母善心に立歸り、御産の紐とけ、世は萬歳と聞くならば、其時こそ囚を出ん、鶴國が望に任せ、あづかる母は母ならず、丸と思ふてみやづかへよ、諸宗には又綾織姫を預くるぞ、互の主を取りかへて預る所に心を留め、等閑なくいたはれと、肝にこたゆる詔、古今に秀でし賢主なり。二人あつと領掌し、ユリ

ヤ鶴國、御懐胎の大事の御身、屹度預た、獄屋の御母女御其雄略天皇をいたわれとの論言、魂にわすれなよ。ヤア御邊が講釋に及はぬ勅説にいはぬはない、此方の姫君まつかど預れ。テ、預つた。預けたと、今迄互の諍ひは雀の千聲、鶴國も一聲の論言に、別れてこそは。春の雁花をすつれば燕見に来る。志ほらしや、つばくらも夫ゆへこがるにそなたはなんとならの葉の、露よりうすき御情や、引すさみ、秘曲をつくす琴の音の、もれて隣牡丹園、花の主の諸老らが、阿閉の府生諸門が、手燭にわくる籬の露、夫婦立聞く夜あらしに、つれて来るべもどたへける。祖母も聞きやれ、あの爪音は隣屋敷立上廷尉之介が奥書院、生れ付て堅侍、常に物讀の聲弓の弦音さなへ打の音などは聞ゆれど、遊藝とては聞へぬに、毎日毎夜の琴琵琶、疑もなふ預りの中帯の女御を慰めの爲め、奇特な武士ではないかいの、あの女御は誰ぞぬしが主人葵の臣と中のわるい此方の旦那の娘分、へだてもなふいたはる心底、又一ツはもてなしの聲が聞へては、手前に預る綾織姫をも馳走してもらひたいと耻入らす心も有ふ、然れば主人の奉公といひ、侍の手本、是には似ぬ世伴諸宗、預りの綾織姫何と様にわたるやら、覺束ない、隠居といひ主人に鼻ついたる此諸門、親ながら身をひげしかまねばかまはせず、屋敷は堀一重、心は千里萬里の違ひ、鶴國への聞へも面目ない、我をさみせん耻かしやと、任せざる世を老のくり言。ア、もうよこざるは



いの、年寄た親二人、口さきで成りとも小優しう物いへばたんのうするどまりなから、犬猫を飼ふ様に思ひ居る不孝者、いふて返る事かいの、よしなの氣病、こなたの好の花ばたけ、夜の間もあだに見捨んより、いざとて夫婦打つれて見廻す花の雨あほひ、さながら雛の殿づくり、手燭にてらす色々は、枝々爛々として咲く中にも、是なふちばい、是は去年の取木にて、名もたかきやに、あどらね色をそめい山、こなたの花壇は三どく一、ふじや淺間と花のすがほはくらぶれど、あろきつかさは此の雛鶴、二葉の松葉姫松紅、花も春夏をへたて、咲くや、きよみが關霞が關もひらきそめ、とちしろくどみかの原、わきて流るゝ布引や、落ねど餘所にひときなのだ、空の星さへ此花に、めでゝむかふか北斗紅、なごりのやそじやよの霜夜はだいて男の袖の内、夕日見かへりたつの市、うつし繪たみの天が下、紅白みめを争ひて、富貴の名取るふかみ草、見れば心の富貴ぞと、花に齡ものばへけり。宿かる蝶の夢さまし、立騒ぐ葉がくれ、なふ府生殿、あれく何やらうごめくは、誠にのら猫かのら犬か、につくひ奴めとかこひ引のけ引ずり出せば、こはいかに輝媚たる上臈の口ねじ込む手綱のはし、後手にまばられ、千行の涙めもあかず、かたぶく顔の白ぼたん、雨にうたれし如くにて、夫婦はつとめを見合せ、あきれて詞もなかりしが、御面躰は見知らねど諸宗が預りし綾織姫よの、隣の鶴國が女御のもてなし耳へは入ら

ぬか、義理も情もわきまへぬ世忤め、ナフあいとし様やと、老女の手に、ほどく手綱の引むすび、漸ゆるむ手を合せ、いはんとすれどせぐり来る涙は聲に先立て、はつとひれふし給ひけり。見るめに堪兼ね、なふ府生殿、無法者があの仕方ではお命かあぶない、どぶぞ思案はあるまいかと、いへば姫君顔を上げ、いつそまねば一思ひ、殺さるゝよりつらひ事親御に對しいひにくけれど、そもある事かみづからに心をかけ、こがれ死ぬるの戀ひ死ぬるのと、たは言のたらく、一夜ならずばかり寝の情と夜なく聞へ通ひ、いざりせりて夜の目もろくに寝させず、敷ならねども葵か臣が娘、雄略天皇の玉躰に添ふ此身をぞ、思へば口惜しく、様々に悪口せし其にくしみとて、此の有様、慈悲と思ひ夫婦の衆、預りの内は此隠居にかくまい置て下されかし、身一生の御恩をやと、又さめくど泣給ふ。エ、人法に背し世忤が噂聞く耳もけがるゝ、せいもんのため全く教ず指圖は致さぬ、隣は御家來廷尉の介鶴國、何の垣一重なふちばい、越へ兼ねまいのゝようになりや思はるゝ、なふちばい、無法者が歸らぬさきはやう越たらよかりさふなもの様のありや思はるゝ、なふちばい、ちばいゝをよせ言に顔で教ゆる目に氣をつけ、ア、忤やどうなづきく、小襦引上げかひ挟み、走り寄ても垣は高し手がゝりなし、足も心も越かねて立さまよひしうろく顔、あれちばい、あの松の木垣打越してとなりへさいた一の枝、天の輿の天の浮橋



教ゆるてはなけれど越されさふなものの様にありや思はるゝ、なふおばい、おばいゝの  
 目つかひは我手引ぞと小枝力に取付き、のぼれば松のふしたかく、木はだはいばらふみ付る  
 足は白雪おは雪のさはらば消へん危ぶなさも、こらへて顔に蛛の巢や、松葉の針が目をつ  
 けど、痛さつらさも思はれず、漸梢に攀ち上り飛ありんとせし所に、鶴國が用心に飼置  
 犬、木の下影にかけあつまり、たけりいがんで吼かゝれば、かみころさるゝ心地して、  
 命限りと取付く松も、ゆるゝ斗りに身ふしのふるひ、あやうさは恐ろしさ、たどへん  
 方はなかりけり。鶴國が妻の聲、たゞ事ならじと枕鎗提走り出で、犬を志るべに梢をきつ  
 ど見上げ、扱こそゝ、何者なれば不敵千萬、立上廷尉之介鶴國が奥書院、家來の若黨中  
 間迄男氣のない所と志つて忍ぶか曲者、盜賊ならば世の情命をたすけ物をくれてかへさふ  
 づ、屋敷に大事の預り人、いひはけがくられればすぐに其松に際、是を見よと突出す鎗の  
 ほさき、ナフそふいふは鶴國のかもじ聲か、苦うないみづから玄や。ヤア姫君様か、エ  
 、御ひきやうな、たどへ細ばり一重でも隔てを越へ、預り人の難義は思召やられぬか。イ  
 ヤゝ人目を忍びにぐるでない、府生夫婦の深い情、はやうありたい頼むゝとせきたま  
 へば、ヤア猶ならぬならぬゝ、さきの人に情あれば又此方に預る女御さま、渡さぬば夫  
 鶴國が義理たゞず、時には互の主と主とを引わけて御預りの勅詔も反古になす、隣同志の

義理よりも、上を背く恐れ、夫の武士か立つ物か、これ申あいとしなから姫御前は志んば  
 うか第一と、教訓すれば、府生聞付け、是ればゝお身年寄ても女はぐちな、中帯の女御御  
 産の紐さへ解くれば、天皇牢より御出なさるゝ、一天の君の牢屋のくげんをたすけ奉れば  
 此上の忠義もなく、外の義理も瓢箪も入らぬ、針程な事も男に知らするによつてやかまし  
 い、少々な事は女の心一ツですましたら濟そうな物の様にありや思はるゝ、なふおばい。イ  
 ヤゝこちも女、覺へが有る、垣越にも他人へは見せとむもない聞せとむでもない事か有  
 る、こちも此陣引たらばよかりそうなもの、襟にこちや思はるゝ、なふ親仁殿。ヲ、それ  
 もそふぢや、なふおばい。なふ親仁殿。なふおばい、と、簀戸押開き入れれば、鞆聞どり、  
 アゝそうぢや、我身ながら氣がせばい、夫にさへ知らせぬば何國なりともかくします、サ  
 ア爰へとさしむくる、肩をふまへて漸ありしも、庭は月代の影まろゝと、白壁つたひ  
 化粧の間にぞかくしける。阿閉の郡領諸宗、主君大臣家の夜詰を引き宿所に歸り、すぐに  
 隠居の花ばたけ、牡丹より芍薬より我戀草の花の紐、とくか解ぬか今宵手詰めと獨言、覆  
 の影をのぞひてもさがしても、こりやどうぞや何處へうせた、まんまと手綱も解てある、  
 ひとり手にならぬ事、かたうどが有る合點玄や、此諸宗がぬからうか、なふ府生殿、母者  
 人、親仁殿と、家内にひどく大音聲。ハテ何をやかましい、少々の用ならば年寄た親を起



さいでも能い事、チ、ねむたい事やとそらとぼけの大欠。おさめ顔見たふない、牡丹はたけにまばり置たお預りの綾織姫とごへにがされた、かりそめながら一大事、まつすぐにおいやれ。イヤ綾織姫をあつかりしとやら、耳には聞けどももより隠居萬事を知らず見へぬはおぬしが油断、身は知らぬと入らんとすれば、引とめ、此花壇へ外の者は入込まぬ、知らぬとはエ、まさしくしい、此姫か見へぬば此諸宗が腹を切るもかまはぬか。かまはぬ。ム、我子にかまはぬからはそなたが今頓死してくたばらふがかまはぬぞ。チ、かもふな、こちもかまはぬ、めんくさばきと取り付く島なくいひはなされ、ム、よい、證據は松の木行所知れた、踏込んで綾織姫を出さずば其の代りに女御を此方へ奪ひ取ると、いひ捨て、棘まきりの合の高垣くはらりと切やぶりと、めつたむしんに踏みひろげ、押やぶつてつ、とくれば、又吠へかゝる犬打ち切り蹴散し飛て入にけり。分別なしの狂人め、きやつが口にも腕にも負てゐる鶴國ならず、エ、笑止千萬と、見やる隣の障子の内、騒く人聲、詞たゝかひ、火影俄にきらめき出で、切合ひ打合ふ太刀音鏗音、竹椽板椽くはたりひつまやり、ばつと散る血は障子に給かく村紅葉、手負はいづれと見る内に、諸宗の額口三寸斗り切込まれ、女御を弓手にかひ込み、鶴國がうつ太刀をうけつ拂ひつ裡手をさしておとり出で、切やぶつたる高垣より、牡丹はたけの小庭迄、互の切先雷火

をちらしてたゝかふたり。母走り出で、なふあぶなやと白刃をくもり、女御をもぎとり駆け入れども、府生はさはがす悠然ときせるのどかに吹くけぶり、おもしるや牡丹花下の睡猫は其心蝶にあり、我は心牡丹にありとくりかへし打吟し、間近くひらめく太刀かけも闇の錦とめもやらず。女房 鞞刀ぼつこみ鏗元ぬきかけ、鶴國殿女房がひかへた、引包んで打てると、切掛んとする所を、エ、こまやくなそのけ女、見苦い助太刀と、まかられて抜きもやらず、心斗りは鞭うつ馬詞の手綱にひかへられ、すゝみかねて身をのせる。諸宗大音上げ、エ、つれない親仁かまはぬといふ我を我に立て、目前我子の討るゝも見捨るか女に劣つた腰抜け祖父と、いへとも耳の餘所吹く風、親をたのむはあくれたかど聲かけられて、諸宗花壇につまつきかつはと臥すを、たゝみかけて左の肩口齧迄すつはと切る。切られ乍らなる太刀、鶴國が太股五六寸きりこまれ、膝をつひてたゆみなく、すきをあらせず花壇のおほひ廻廻し追もどし、血煙飛んで白ぼたん皆くれないとぞいとみしが、もとより鶴國手利の達者、深手の諸宗大刀うち落され、かつばと臥をたゝみかけ、ついになんなく切殺し、死骸にどうとのつかり、胸に刀を押しあつる。なふく鶴國止めの刀今誓く御ひかへ頼存すると、府生が始めてかくる聲、奥には老母の聲高く、府生殿諸門殿日ごろのねがひ、ばゝが手ぎわでたつた今産せたと、呼はる聲、鶴國夫婦大きに悦び、なふ綾織様



御誕生、姫君様こゝへ御出と、呼く駈け寄り、さつと開たる障子の内、老母鉢巻たまだすき、兩手はまつかい血にそまりたる左鎌、御子と思しく小袖につゝみだき出れば、女御苦しき御有様、姫君、助け出し参らすれば、左の乳の下掻き切られ、御息もたへくにさしもの鶴國、途方に暮れあきれて詞もなかりける。府生つゝ立ち牡丹一枝押折り、小脇にはさみ、つかくゝと寄り、ヤイ玄上廷尉之介、主君の敵真劔に擬する一枝請とれとまつかうをはたくゝ、打て色香もさんらんたる牡丹なげ捨て、主君の死骸の前にて本望とげたりと、餘所にはしらぬ涙心も見へて眼もうるみけり。鶴國一圓心得ず、ヤア御預の女御を害し、我武士を捨さする老耄か狂亂か、所存を聞かん、セアいへと、大きにせいたる顔色。ヲ、御不審は至極く、此仔細知つたる者天地の間我等夫婦只二人、一生人に語らじと存せしに、今日只今死を極たる此府生、何をつゝみ申さん、主人圓の大臣殿、四十一歳の春北の方御懷姫、四十二の二ツ子、女子なれば其家さかへ、又男子なれば親にたり命を失ひ、家を滅ぼすといふ俗説に迷ひ、生るゝ子が男子ならば日のめも見せず害するに定るものゆへ、北の方の物思ひ、家來我々の氣遣、女子を生せ給へと神々の祈誓大願、心をくだく其かひなく、屈強の男子誕生、ハアツと力も落はてしに、大願祈願のしるしにヤアノ女房同時に女御を誕生す、是神力の與ふる所と、下女めのとにも知らせず取換へし姫

君はあの中帯の女御も我娘、我子と成りし郡領諸宗はもと主人の子、コレ此の花壇を見られよ、あまたの接木とり木をして、花を咲するに、たどへば白牡丹の臺に紅ぼたんの穂をつぐに、其穂穂をそだてしやしなひ親木の白牡丹は咲かず、もとの親木の紅牡丹色香をたがわず咲出る、人間の養子と花の接木とをなし事、我は接木、諸宗は接穂、養ひめぐみそだてしも眞實の親木の花の色にかわらねば、子といふは名斗りにて、其礎元の主人ぞと一筋に思ひ込しより、うへには親子のふるまひ、心に主人とたつとめば、斯程の悪人ながら我手にはかけられぬ、幸と御邊に討せ死骸へ手向くる心ばせの主の敵、大事の武士の面を草花を以て討たる無禮、さぞ無念に思されん、町人同然の隠居の身、接穂に心亂れし花物狂の老ぼれめと、おもひちらして御免あれ、なふ鶴國殿、女御は我子いやしき娘、もと藪に吹く紫牡丹の索性顯れ、不義放埒の根性ゆへ、十善天子みづから獄屋の苦みも彼が業、につくしく、折をうかひ忍び入り、腹をさき、御子さへ安全なれば娘めはづたくと思へども、きやつを切つては綾織姫を諸宗が安隠には置まじと、あだに日敷を過す所、思はず今日姫君を御邊に渡し、娘を我手へ入る事、天の與へど、かねく夫婦は願成就、ば、出かした、御子は皇子か姫宮か、左鎌の切先御身に怪我はなかつたかと、問ひ詰められて母の親、たしなむ涙目にあまり、四十年餘女夫の中、跡にも先にも子といふ者は此娘



一人産落すより人手にかけ、一生親ともしらせずついに我子と呼ねども現在親の手にかゝる、是も何ゆへ胎内の子を取出し、天皇様を獄屋より出し奉り、天下の歎をとめんと、此比夫婦いひ合せ、娘が命のかゝの腹の子が、まんぞくな子である事か、是見給へど小袖開けばひさこの大きき、色赤きかゝの形、各一度にはツと計り、なふ府生殿、此袋子は何のむくひ、思ひ廻せば娘が敵、殺す母も又敵、かたきと敵の寄合せと、明らかれば可愛も不便にも悲しうもなければ、どんな涙がこぼるゝと、轉び伏して泣き沈む。歎きの聲も親と子の今はの肝にやこたへけん、女御苦しき目に涙、扱は御二人は産のどゝさまかゝさまかゝの、どふにまらせて下されぬ、いつぞや飛鳥の宮にて雄略天皇様と親子の儀式天酌の御盃の時、恐しげなる老人、影の如く目にちらちらと口に入ると覺へしより、氣もうつかりと夢のごとく覺へしが、其淺ましい見苦しき袋子の胎内を出るや否や、心さらりとばれやかに、霞のはれるごとくぞや、耻かしきは綾織様、恐れながら天皇様へ申わけ、獄屋を出御なる様に、奏問してたへ鶴國殿、輦殿、ア、思へば、此年月、親とはまらざ輿車の供に連れ、頭をさげさせ手をつかせ、どうせいこうせいと娘の口から不孝のどが、赦して下されどゝさまなふかゝさまと、本性正しき今はの詞、恨も仇も引かへて、鶴國夫婦綾織姫共に袖をぞまぼらるゝ。母は女御にすがり付き、扱は今迄の不義放埒、心には

覺ぬとや、それなれば咎でない不孝でない、アレ府生殿聞いてか、にくいと斗りまからずとも、せめて息の有る内にかはいやと一言聞せて死なせて下されど、悔み歎けば、齒をくひまばり、エ、侍たる身のかりそめにも嗜むべきは偽り表裏、四十二の二ツ子迎なまなかの忠臣だて、主人へ偽り子を取かへて今の悔、下女まづの女の懐妊にも産は女の命のさかい、産後産前の妙薬よ名方よと、他人さへかけ廻る、腹をさかれて産落す、其の割く刃物は刀でなく、鎌でもなく、我一言の偽りにやき刃がついた淺ましやと、覺へずわつと泣入れば、いやもう悔んで下さるな、いふて返らぬ事斗り、いつかゝ産落し乳を上げ、愛らしい顔を見んものと、待ちこがれしもあだ事か、せめて目鼻斗りでも人の形有るならばなんぼう嬉しかるべきに、いとしやとゝさまかゝさま、さぞかなしからふ、口惜からふと、せき上へ涙をまぼり、氣をもみ上げ、血ふるい頻りに息よわり、今一生の名残の曉、くらむ命の燈火は消てはかなくなりける。老母是はと取付くと、府生引のけ、ヤアは、忘れしか、日比いひしは愛の事。ム、合點と夫婦立寄り、差し違へんとすつとぬいたる刀の柄、鶴國あはて駈け寄て刀もぎとりからりと投げ、ム、心底推量、至極せり、去ながら御誕生迄と勅命にて預りし女御をころされ、其身夫婦も自害せしと、侍の生づらさげて何と奏問なるべきぞ、御邊も又武士の情け、有無の宣旨下る迄我に命を預よといひければ、



ム、尤々、聞届けた、サア鶴國寄て細かけられよと、夫婦一所に手を廻す、イヤ〜命を預る迄の事、忠といひ勇といひ義有る諸門夫婦の細のかけ様知らぬ〜。ホ、ウ愚かなり延尉之介、娘ながら女御の命をとりたる咎人、細をかけねば此場で自害、うろたへたるかどねめ付る。ハ、アそウ老や誤れど、くわい中の用意の細、夫婦が夫婦からむる細、かゝるもかくるも弓取の義理の細にからめられ、詞はなくて泣きつむ。見捨てたつも立場なき鶴國夫婦が思はぬ歎、卵生の御子を綾織姫に抱かせて、なく〜別れ立出る。名残の袖を呼かへし、命助けの御慈悲はかへつて老の身の、あだなりと、いふ聲よはる、吹きよはる嵐にむせぶ腰折松、いく霜雪は凌げども、た、一時の涙の雨に、かれてかいななき花鳥、宵迄めでし牡丹花も、あかつき花の名をかへて、うき身上の朝がほど、日影待つ間ぞあはれるなる。

#### 第四

阿閉夫婦が忠節敵感の餘り、雄略天皇獄屋より出御有り、賞罰正しき府生諸門、舊職に立歸れば、圓が悪逆一身にせまり、帝都をにげ矢せ、ふた、びすめる雲井の空、昨日と移り

今日も暮れ、あしたの原の御狩の御遊、嶺にはま、かき谷には勢子細、狩人の聲、鐘太鼓太平の代にかねて武備を教るいさをしなり。御痛ましや、先帝安康天皇御足のための御湯治も廻りかねたる足弱車、小石さ、原轟す、せこの鼓を跡になして引なやむ、一筋細きそはづたひ、仕丁共詞をそろへ、けふの御遊は當今様より御つれ〜を慰の御狩なるに、諸官人の供奉もなく、狩屋を忍び出給ひ、人倫たへし深山の奥、何ゆへの御行駕、敵慮いか〜と奏すれば、安康涙にくれさせ給ひ、さればこそ汝等も知ることく、さりし頃中帯の女御あへなき最期の折柄、取わけし我か種、淺ましき袋子迎大内へも入れず、此葛城山に捨たるとや、たどへ鬼畜の形にもせよ、血をわけし恩にて子ゆへの關にひかれくる、せめては捨てし跡なりとも見まほしく、今日の狩場を此山と望みしも親心、捨たる所は何國ぞやど、問給へば、さん候捨まいらせしは此谷なりと答ゆれば、扱は日敷ふりし故畜類鳥類の餌ども成りしか不便やと、猶御心も亂るゝ糸のはら〜と、御落涙ぞ道理なる。時に山風さつと吹落し、梢木の間をさら〜、ちりまくもみち葉まき立て〜、赤色一團の玉の袋子、谷をくたりにころ〜、嵐につまれば木の葉につつまれ顯れ出て袋に風を入るが如く、ふは〜ひやう〜、ふは〜、見るま程なく二かさ餘りに成つたるは、怪しくもまた凄まじし。安康いぶせく思せども、猶恩愛のすてがたく、あれ見よいまた生



あればこそ玉に呼吸の働き有り、仕丁參て袋をひらけとの給へば、アイといへど恐ろしく、そなたいけ、我いけど、先へは進まず去りてみし、ぬらひくらひの矢先にもれて、爰に落來る猪あらし熊、たにをくだりに一文字、かくる拍子行く拍子、雄鹿の角に袋を引かけ、くわらりとさけば、此世の風を五躰に請け、ぐつとのひたる男子の姿、産髪左右へみだれちりふんばる足は鳥居の柱、總身は朱ぬりちんぼ迄唐からしともいひつべし。各あつと驚く所に、岩を飛越へ木の根をはねこへ、かけ來る荒熊、むんづとつかみ、七八間どつと投げれば、起なほりたれ一裂きと飛かゝる。抜けつくつてがはと踏みのけ、枯木を引折り一ひしぎと打かくれば、熊は手をのべ爪を立て梢をしつかとからみ付き、引き寄せれば引戻し、互に引はる力足岩をふみかき、小石を蹴立て、がら／＼と／＼と／＼と／＼と、谷を吹まく土烟り、仕丁共心は空、還御／＼と勸むれども、玉躰さはず、誓／＼との給へば、さすが捨ても歸られず、怖いは十分見たいは半分、サア鬼子と熊との棒撿ぢや、前代未聞たつた今、今ぢや／＼とふるい聲、谷には異類のをめく聲、馬手へねじれば弓手へ撿ぢ、争ふ枯木きり／＼と、中よりきり／＼と撿ぢり捨て、四つ手からみにしつかと組しめ、もぢつつかしつすもふの手あひ、熊のさまたへ片足かけ、どうと引伏せのつかれば、四足をはつてはね返し、上に成り下に成り、ぐるり／＼と／＼と／＼と／＼とつれしは、赤と

黒糸となひませの、大綱よつたるごとくなり、さしもの猛獸よりはりたれよふ、月の輪うんと踏み付け、四足をどつてぐいと引抜き、からだを指上げ御座をめかけ投付る。供奉のしもべ御車捨て、四方へはつと逃げちれば、玉躰に飛かゝり取て引伏せふみ付しは、勿躰なくもいたはしし。安康天皇御聲たへ／＼と、いかなる悪縁悪念にて恐ろしき出生なから我子と思へばいとあしく、つれ歸らんと思しに、親に敵たふ天爵神はつ、外道變化のわざならずば、善心に立歸れど、苦しき中にも子を思ふ御涙せきあへず。鬼子破鐘の様なる大音聲、から／＼と笑ひ、ヤア安康のあんどう顔、我こそ先年中帯の女御に心をかけし前の名は大草香、仙術外道を行ひ眉輪の翁といひし者、戀慕の恨に女御の腹を封じ、いざりしたるも我がなす業、本望どげしと思ひしに、又候や勅説とて諸宗が刃にかゝりし最期の一念女御が胎内の子の體をかり、ふた／＼びむくふ恨の出生、眉輪の翁の名をかたどり、我名をすぐに眉輪王、汝を始め雄略天皇日本の人民つかみころし、神道の根をたやし、異國の儒道佛道も悉く打やぶり、三國どもに魔界となさん手始め、汝が首第六天の犠牲と、えいやつと撿切り、あへなき最後ぞ是非もなき。仕丁の知らせに鶴國鷲國浦島太郎一さんに駆け來り、尊骸を見るよりはつと抜き連れ切かくる。鷲國押へて、天狗にもあれ鬼にもあれこそがれ一人、三人かゝるは成人けなし、摺み殺してくれんずと、飛でかゝれば、眉輪



王引はつし、よは腰摺んで目より高くくるく〜とふり廻し、手鞠のごとく打付たり。鶴國  
 すかさず打つ太刀、きりりと廻りかばと蹴落し、首筋つかんではぬかへせば、二三遍ちうに  
 てかへりうと落ち、つゝと入て又打つ太刀、ひらりと身をかへ、太郎を谷へ蹴おとす間だ  
 に、鶴國鶴國左右の足をまつかど取て指上れば、両手に二人かてつべいおさへ、ぐつぐ  
 ぐつと押付られ、骸は土へにえ込む斗り、岸をつたふて駆け來る浦島二人が上に取て打付  
 け、三人重ねし背骨の上、おだんだふんで立たりけり。雄略天皇弓と矢つがひ、肩輪王か  
 まつたいなか目當たがわすひやうと放せばはつしとあたる。神力應護の矢先に苦しみ、よ  
 ろめく所を三人すかさず起上り、三刀六刀、九かたなや九重の、朝敵外道も御退治ある、御  
 弓矢の威徳を仰ぎ、初こそ雄略天皇と君か名高き。

浦島太郎 入部の 纜

亂れ小柳亂れを柳、共に心も亂るゝに、そもじ戀にはのエイソリヤおなゆきて、エイ〜  
 よしなのえい〜おれを、濱千鳥が寄せくる〜小浪にゆられて、もまれて、ちどろ  
 もどろ、たどろもん、ちりはになりてき〜な〜ようどり、夜な〜まいかまたのえいよほ  
 ん、ほ〜ほん〜とあり〜はん〜えい〜ア、えいけいの海つらを、ながめにわかぬ  
 浦島は、入部の舟の蘭の楫、故郷へ歸るから衣、錦の袂綾の幕、引志ほ時に誘はれて、よ

そになにはの三ツの濱、いさみ出るぞたぐひなき。げに世の中の言の葉に浮いつ沈みは、  
 七度の入つおきにして打出の濱、夜つりの舟の浮き沈み、是や詞のはねとなる、浪のうね  
 く〜ちあまげり、藤江の里の朝なごに、やくやもしほのあこの浦、今日よりは空によこそ  
 れて、風に宿かるあなみ野の、尾花かたしき女郎花、逢ふ夜の床に志き浪の、せきをも跡  
 に志かま路や、かち路せねども、なかむれば、白浪染むる夕つく日、ゆきかふ舟のきぬ  
 く〜を、よせて纏ふてふ播磨瀧、須磨も明石も浦々のあふせわびしき戀の濱、見渡す内に  
 こぎつれて、はや備前路の影うつす。袖はうきぬの我からに、月ぞ藻にすむ虫明の、瀬戸  
 の松風さんさらめけば、磯の小波もつれて立つとよ都迄、ひいき通へるからとは、浪の緒  
 すけて風や弾くらん、ことごとに落る雁金の、影は見れども我が思ふ人しなれば玉章を、か  
 けてつたへんあてもなし、都に残すうみの子の、それさへ君にみやつかへ、心にかくる事  
 としては、今行く船の向ふ風、ほかには何も浪の上、所をどへば大島の、沖に御舟を漕きど  
 いめ、錨ををらす山風の、かへしを待ておはします。おりふし爰にこかれ來る渡世めをせ  
 るあみ舟の、綱手く〜つてと〜めても、いきたけしれたる繼師一人、腰まき簀に竹の笠、  
 志める松明ふり上〜、夜食の肴めさないか、鯛ぞ鱧も有るめば〜と船の内、我  
 めをはつて見渡せば、船頭水手を始めとし、近侍外様の侍迄、追風待つ間の高いびき、胴



の間にはどのゐの武士、一人か二人かさゝやきの、咄ひそめく斗なり。志てやつたりと心に悦び、舟をもちてに乗廻し、簀笠ぬぎ捨て舟やかたに踊入る。や油断なり浦島、圓大臣か  
 なるの果よく見よ、都を退出され海賊半分のりやうしふせいになつたるも、雄略天皇を始  
 め、あのれが世に有る故、此の海上通るとどつくに聞て、つけ廻しつたる今日の今宵、  
 日比の恨み思ひ知れど、呼はつたり。浦島太郎ちつとも騒がず、女御のゆかりを思召し助  
 けられたる命、ぬぐさつて死に來たかと、抜くより早く切て掛る。ひつはづして刀もき捨  
 てつかみつけば、志つかど組み、こけつ轉んづ繋ぬ舟、汐に誘はれ遙の沖に流れ流る、  
 汗まみづく、やかたの高欄踏みはなし、海にかつはと落入りながら、兩方はなさずはなし  
 もせず、浦島運や強かりけん、差添引ぬき、圓がた中さいてはるぐり、ぬいてはさし、  
 疵の口より入汐に、うんどさけぶも聲水こもり、命の果は白波の、死骸は流れて失せにけ  
 り。浦島一人今更に、手に取る楫も櫂もたへ、人氣たへたる波のそこ、あがらんと思ふ  
 氣もあだ波、ふんばる足のそことなく、沈まじ浮かんと心になぐる、思ひは千尋底深くぞ  
 入にける。あやしき水路閃々たり。底と白波打ち過れば、靈光かやく闕々、浦島夢ども  
 わきまへす、見上げれば金字を以て大龍王宮と書きたること、龍宮城とは知られたり。時に  
 頭に鯛螺蝦章魚赤貝無量の鱗族いただき連れたる官人に圍繞せられ、しやかつら龍王、通

天の冠絳紗の袍碧玉の圭を正ふして、白玉の床に着き、善哉、浦島太郎、我がひささ  
 の乙姫三度命を助けし厚恩、報じても猶餘り有り、人間と龍城と境隔たり、通路絶へたれ  
 ども、御身は仁愛の心ざし深き故、横死の難を救ひ、遙々爰に迎へ、丸が響がね、客人の疑  
 をはらすため、契りし日本の姿にて見へよや乙姫、どの給へば、かみかたちもなじみ有る  
 飛鳥で別れし妻の姿、我れこそは乙姫よ、なふ懐かしの都人、縁あればこそ今爰に、又め  
 ぐり逢ふ嬉しやと、互に手に手を取りかわし、嬉し涙に附そふ侍女共、扱は日本の本の御君  
 様よと、琅玕の臺をもうけ、天の醬やかうがい杯、とりくめぐる盃も、和國に例菊の  
 酒、彭祖がたもつ七百歳、それは仙家の菊の滴、是は所も龍宮城、たぐひも波の底深き、  
 むすぶ契ぞ不思議なる。浦島龍王を揖し、きたいの御もてなし、蓬萊瀛洲の樂しみ極りな  
 しと申せども、故郷に残せし一子小太郎、海に入りたりと承らば、歎き悲しまんも不便の  
 至り、哀れ御恵を以て日の本へ御かへしたび給へど、思ひこふてぞ望みける。龍王龍顔う  
 るはしく、愚なりく、龍宮城の一時は人がいの五十年、爰に來り給ひてより、僅かの内  
 とはあほせども、日本の年月四十餘年過さり、御身の子孫榮る躰、日本の有様此所に寫し  
 見る、龍宮第一の寶明王鏡といふ鏡、是を開いて見すべしと、の給へば、乙姫は浦島の歸  
 國をといむる嬉しさに、開く鏡も下紐もどけてわりなく。



## 龍宮七世の鏡

かくて浦島、しやかつら龍王の勅に任せ、乙姫にいざなはれ、莊嚴微妙の廊下を歩み、三重の樓門打過れば、地に白銀を敷島や、我故里にありそとも、いざしら浪の其中に、七寶七重の宮殿豊をみがき、瑠璃のやうらく、さんごのけまん、天仙さいしよくの錦のどばりさつと開けば、黄金の大床波忽ちの臺の上、ゆぢゆんの鏡据られたり。是こそ人間世界を映す龍宮第一の明王鏡を見て疑をはれ給へど、教の如く立寄れば、めい〜と有る鏡の内、物こそ映り見へけらし、其さま日本の家作、立出る主の其骨柄たゝの人にはあらざりけり。能く見れば我子の顔、稚姿の花すゝき、いつの間にかはほに出で、招けと呼べと鏡の影、あふとはすれど、ものいはず、詞なく〜ゆかしさを、心にとめ目をとめ、行末いかにどながめけり。親のほまれを子が世迄、吹きつたへたる風折烏帽子、花摺衣ひる返す。浦島が子の小太郎久ゆき、雄略天皇のおぼへめでたく、つゞきて清寧顯宗仁賢四代の天皇にみやつかへ、我身につもる年月も、六十年餘りて春秋を、丹後の國主とほのめきて、妻も子も有るさきくさの、三葉四ツ葉の殿作、みがく鏡の其面、きへて雪間の梅の花、つぼみひらけば四方の春、是浦島が孫の世と、簷端に來啼く鶯のひとく〜のさ〜つりを、一夜〜と夢なして、ねやの戸出る小娘の、白齒の雪や振袖に、梅の香包む年ばいも、此秋

風を身にいらぬ、人目の關や小柴籬、打はれ〜の庭の面、空にはさむき春風を肌の艶の温かに、だいてねざかり戀ざかり、比翼の鳥の思ひ羽、すけてまんくの糸引まめてつくばぬの、峯より落る瀧の白王、ひいふうみやうまう小ばね、よそへきるゝな、それ行くな、はねさへも、心があればつく手になびく、夏やせもせず蚊も食はぬ、あつき情のはご板に、書いたるにしのまらまほし、嫁入比のおみなへし、いつしかいもが手枕に、添寐の露の子もち月、大人くれたる年の矢の、あるが如くも立つ月日、武烈繼體安閑天皇宣化の帝、四代を過ぎ、鏡にうつるおさな子は、浦島太郎が孫の子の、ひ孫の血筋あひらしく、おまろのや〜、ちよん〜女郎志ゆがお手にいちやあけいちや様を、ちやうち〜あは〜、はまりこきり〜や、足の冷たい草履買ふてたもれ、雪やこん〜、あられやこん〜、まい〜こまめくるりくるりとおさな子の、めぐる月日もよとみなく、鏡の面清朗たり。乙姫教へて、いやなふ申、此土に來たり給ひてより、日本の年月は百八十四とせをへて、欽明、敏達、用明天皇、崇峻、推古、舒明、孝極天皇の御代に始めて大化と申す年號起り、七の帝の代も去りて、斯くいふ内にも移る月日、今顯はるゝは君の子孫、四代を過ぎし鶴の孫、あれ御覽せと有ければ、浦島太郎はつと思付き、見れば鏡の其内に、秋吹き送る風の音、稻葉そよ〜人音そよぎ、田地持とてのつまりと、身にそなはりしはうろく頭巾、野邊の



千草を見るふりも、人をつかへば銀のはの、足らぬをせめる鬼あざみ、あふぎふり上げ、打つかまねくかはつ尾花、はつと下部の女夫づれ、小田の早苗の穂に出で、中手をく手のこぼれ咲き、まづが手はぎの暇なく、刈り乾す稻こく、又妻はもみする、よい世の中の米俵、心やすくだかへて、御藏へえい〜〜な、何をいふて運ぶよる、だいだらまめたらさ、猶よかろ、重る月日、年暮れて、かゝみの面も又あらたまる。わが世こそ浦島がためひ、孫の、家にうつれば世もすでに、孝徳、齊明、天智天皇、天武、持統、文武、元明、元正、聖武の世とかけり、かゝみにうつる秋の山、もみちの錦、木の間に〜、幕引き渡す野遊の躰、こひにいさぢをたてかみや、くはんくはつさいた長刀、ついの小せうがふれ〜もみぢ、散つた景色はやれさて、外にたぐひもない、〜〜さげに亂れの、打あさまれる、日の本や、やまどの國の名物、お名は何と申ぞ、だいらわたりのはたのおと、高麗唐土もちよばし、京はふたへの御所染、みす屋針で縫箔、さし櫛の蒔繪に亂れ亂る、色上戸、きみのさかつきひやでもかんでも、さあつげ、さあ飲み、彼方へはよろ〜、此方へはよろ〜、色に出たよもみぢがり、太山おろしは吹けども〜更に身には寒むからむ、民にうれひの色もなく、治まり靡く御世ぞ目出たき。浦島見やる氣もそいろに、目環一瞬の其内にかばかりかはる人の浮世、今日の本の御主は、何と申す

天皇やらん聞まほしとひければ、去れば孝謙天皇、淡路廢帝、稱徳、光仁、四代の天子崩御有り、今の世は桓武天皇、神武より御代五十代、年號は延暦にあらたまり、君の子孫もや、孫の世、鏡の影を見給へど、の給ふ聲もむねたかき、いづれの神の社ぞや、海原近くわくざしの、鳥居は波に影見へて、朱の廻廊ま〜と、神さび渡る折からに、翁姿のいざり松、身によるまはや磯の波、港々を出る舟や、又入る舟の海の上、是此嚴島の大男神、神か應護の御願ぞと、百度千度くりかへし、七度うつるかゝみの影、七世の孫の影きへて、鏡の面しろ〜と、浦島太郎茫然とあきれ果てたる計りなり。乙姫かさねて、今の翁は君の七世の孫、嚴島の神主なりしが、下の禰宜長谷部の國長といふ者、浦島の系圖をぬすみ、朝廷をかすめ、神職となる、然るに今天下大きにひでりし、民は山野に歎き伏し、當今淳和天皇うれひ給ひ、嚴島に行幸、あわれ君か七世の翁、昔の神職を勤め給はひ、忽ち四海をうるほし、天下の歎きはあるまじと、の給ふ詞の内より、浦島、扱は日本帝王の愁、立歸りて其國長とやらんが非道譏言申しわけ、我子孫を本の神職に返し、天下の歎き救ひたし、立歸るべき道あらば日本へ戻してたべと望みける。愚かなり、君龍宮へ來り給ひ七世うつりし鏡の影、暫しか内とちほすとも、雄略天皇の御代よりは帝王三十二代を過ぎ三百五十五年の月日、なまなか古郷へ歸らせ給ひ、浦島太郎との給ふとも、七世の孫子を



始とし、たれか誠と思ふべき、とゞまり給へど有りければ、龍王遙に敵覽有り、歸らんと  
いふ浦島は日本のため子孫の爲、とゞむるともとゞまらじ、力なし、此上は日本の家づと  
せんと、下女に仰せて一ツの箱浦島か前に据へさせ、そも此箱は玉手箱と名付け、内に入  
千歳の壽命をこめたり、必ず開く事勿れ、名残り惜くは思へども、早や立歸れど、龍王も  
共に志ほるゝ御涙、重き仰せに乙姫も、力なくゝ立別れ、又逢ふ事はかたを波、箱をい  
だきて浦島は、日本に歸る雲の波、霞の波をへだてつゝ、海まんゝと立ち出て、直下と  
見れども底もなく、ほどりも知らぬ海中に、行きしも通力、歸るも自在、藻に住む虫の我ど  
我が心ひかるゝ後がみ、乙姫の顔ばせを、みるめわかめをかき分けゝ、歩む共なく行く  
どもなく、落付く方を何國ども、白波よするせきかくる、涙のうしほひつたりと、身もぬ  
れ鳥の聲計り、昔聞いたるおぼへにて日本の地にぞかへりける。

## 第五

天の五漠に火帝入れは、天下大にひでりすといへり。當今淳和天皇明君なりと申せども、  
天地氣候の不平にや、一天なべと雨ふらず、萬民の歎き御身にせまり、安藝の國嚴島大明

神に行幸あり、聖主自ら雨乞の勅願力ぞ頼もしき。神主權の祝浦島の久富幣帛を捧げ、肝  
膽碎き祈る折節、白髪のお翁御垣のもとに首をさげ、我等浦島太郎が末孫權の祝久富と申  
て當社の神主、今久富と名乗るは、長谷部の國長と申て、我等の下禰宜、先年我が浦島が  
系圖を盗み取て參内し、朝廷をいひかすめ、神職を押領し、當社明神の神祕をも知らず、  
妄りに神につかふ、此旨奏問請ひ願ひ奉ると述べれば、久富ぎよつとし、ヤア此久富がは  
なのさき、久富と名乗て出るは曲者、つかへ奉る神の神祕を志らひで神主が勤まるものか、  
悉くも當社明神は、まやかつら龍王第三の姫宮そのかみ推古天皇の御宇に佐伯のくらまき  
と云ふ人此の浦にゆうらうの折ふし、紅の帆を上げたる船西方より流れ來り、内に一人の  
美女有て、の給はく、我王法を守るべし、此所に百八十間の廻廊寶殿を營み、嚴島大神を  
おがめよとの神勅、推古天皇の御建立、此外に何のまんひがあると、摺みつかん類魂、老  
人からゝと打笑ひ、チ、それは竹馬のわらんべも知つたる事、御正體悉も天照大神の第  
三の姫宮、而はまやかつら龍王の姫宮と立ること神祕が中の神祕なれど、いひもあへぬに  
久富打消し、ヤアひみつといへば何いはふとまゝ、大かたりのいきまいます、あれちつ拂  
へひつくゝれど、せりあふ所へ、浦邊の方より浦島太郎、まばしゝと聲をかけて走り付  
き、ヤア珍しゝ久富、我こそ汝が七世の祖父浦島太郎久壽よと、老人にすがり付く、ちいと



名乗るは三十計の若男、七世の孫は七十餘りのしは親仁、若い者酒に酔たかど、一度にどつと笑わる。浦島太郎は玉座にむかひ、我はそのかみ雄略天皇の御宇に不思議に龍宮に入しかど、一天かんばつのうれひをもすくひ、七世の孫が虚名をも申し開かん其ために、立歸て候と、申上れど、帝を始め一座の公卿顔をながむる計にて、返答する人もなし。浦島太郎いひぞらけ、何を證據にいひわけんと、見れどもく、日本の草木も見忘れて、疑ひ開く便もなく、暫し涙にむせびしが、アツア思ひ付たり、なふかたぐ、此箱は龍王より授かりし玉手箱、八千歳の壽命を封ず、必ず開く事なかれど、教の詞は重けれども、さし當る證據、詮方なく、只今箱を開くべし、一ツの不思議有るならば我は浦島、此老人は七世の孫、當社の神職、御疑ひをはれたまへ、八大龍王、大海神、別してはまやかつら龍王、一ツの老るしを見せたまへど、蓋を開けばこはいかに、不思議や紫雲柵引き出で、浦島が身にかゝると見へし、今まで若き色つやも忽ち形衰へて、身はもどせの老木の柳、おのものはつと驚き給ひ、奇異の思をなす所に、神職久富俄に顛倒、狂ひ出て、なふをそろしや浦島の系圖を盗み我れ久富よと上をわざむき、神をいつはり、人をくるしむ神罰、なふ苦しやたへがたやと、目口より血を流がし、忽ち空しくなるよと見へし、あま雲柵引き降雨は山野をうるほす。玉手箱あけて喜ぶ浦島が壽命は石より金より堅きくすの木の、大

鳥居出現し、かへりもうしの神樂のいさめ、音も澄みわたり、一天四海皆喜びのたねとなり、つゞいて五穀成就し、國民豊かに治まる御代、千代に八千代を八千歳、浦島太郎が壽命の袖、身にきぬ人こそなかりけれ。

## 浦島年代記 終



# 弘徽殿鵜羽産家

## 第一

佳人盡く晨粧をかざり、魏宮鐘うごひて遊子猶殘月に行く。九重五舎の后町、關々を相和ぎ、羽をならぶる水鳥は君子のよきたぐひ、爰にたくへて我國の天津日嗣六十五代、花山院の御在位の都ぞ花のみやこ成る、君立坊の始より、後宮佳麗多き中に、正二位爲光の娘を弘徽殿に召入て、芙蓉帳の内に比翼の衾をかさね給ひ、又官務忠平が娘を藤壺に据置て珠箔、銀屏の影に連理の枕を駢べ給へば、弘徽殿も藤壺も、まし劣りなき御寵愛、御情に隔なく、月日も同じ合孕み、帯の祝に青梅も、ともに熟の六月板、此神事の序を以て二人の女御の御懐胎、男女の間を考、殊には變成男子の懇祈をいたすべしと、弘徽殿の祈の師は當時天文に名を得たる若屋の道満、無官なれ共内縁の沙汰によつて相勤む。扱藤壺の祈は陰陽の頭安倍の晴明、火水を改め、齋して鳴の河瀬に荒和の禊、二人の女御の御車、岸を隔て、やりつゞけ、女中斗りの忍びの御供、あはれ此方を若宮、此方が王子であれかしと

聲もそよ／＼風そよ／＼、榎の小川の夕暮は御祓ぞ夏の来るし成る。兩博士は兩壇にまゆ引廻し、五十串たて、道満は冥道供一字金輪の法を修す、晴明は大元三種の大禊、北斗七星元亨利貞四徳の法、行者は無双、修法は無上、勝負更に無し時、道満幣申を逆手に取り瀬見の小川を一文字、横におて、切ければ、川水二ツにちつと別れ、上と下とへ流れしは、絹を断たる如くなり。道満いかめしげに御覽候へ、祈の来るし川水左右へ流るは、弘徽殿の御懐胎、王子誕生疑なし、いかに晴明、御邊が祈何の驗も見へざるは、藤壺の懐胎は姫宮に極つたり、壇を退れと云ひければ、晴明ちつとも臆せず。イ、ヤさは云はれず、御分が祈る川水中切れて兩方へ分るは、是れ坤の卦の形、晴明が祈る川水直に離れず流るは、乾の卦の形、所謂乾道は男と成り、坤道は女と成る、天地未分の一大極の妙理、誰か是を争はん、然れば御分が祈る弘徽殿は姫宮御懐胎、我祈る藤壺は體に王子御懐胎、正しき印と幣追ッ取り、投れば幣申川瀬に立ち、くる／＼とまつはれて、幣帛變じて玉の冠あり／＼と南面して王子の相をぞ現しける。負まじ物と満道つゞいて投る幣申の、同じく川瀬に立ながら、幣帛長く打恭へ、水のみどりの振分髪、女の髪と現したり。すは弘徽殿の懐胎は姫宮なりと密話けば、道満焦つていらたる數珠七鬼神の索に懸けて、責伏せ／＼祈りのられ、二本の幣帛はつしと打ては、さつと散り、揉合ひ打合ひたがひに怒り、



大ぬさの波の白ゆふ打亂れ、流るゝ幣に道満は、猶引添ふて祈り行く。晴明聲をあげ、乾に乾を累ねるは、亢龍悔ある藤壺の御身過失あらん、危うし、慎み給へと云捨て、幣帛したふて走り行く。げに禍は下をんな兩方共にさしみ合ひ、ヤアあれは誰が車、只今時めく弘徽殿の御車に、立ならべしは慮外なり、あれ引除けよと、浮氣盛りの中居腰元牛も車も云いばせこそ、えいやと押やつたり。藤壺の乳兄弟清瀧と云ふ男まさり、負ていやるな女房達、あの車押わつて、お車やれと下女はした牛追立て、轟かす。弘徽殿のお腰元因幡といふがむしや者、飛かいつて牛の鼻づら靦を掴んで押戻す。やれば押へ、戻せばやる、牛の鳴き聲えいや聲、因幡は汗に手の内すべり、足を墮き、横なげに、どうと臥たる腰骨にやり掛たる車の靦、胴中さつと敷ちぎられ、血煙たつてつわと斗り、即時に空しく成てけり。弘徽殿の伯父按察使の大將早岑、いづくにか忍びけん、大きに怒つて駈付け、王子腰姫の弘徽殿の御車、上へ慮外も同前、其女逃すなど清瀧を擽させ、車打わり藤壺を引ずり出せと擽く所へ、糺の森より放免雑色供したる勇士つツと出、ヤア疎忽なり早岑公、某は源の頼光が家臣渡邊の綱、是程の大禮には、武家に警固仰付らるゝ前例を背き、各斗りの御許らひは、お公家方の私、主人頼光帝都守護の當職ゆへ、密かに某を遣されし所、案に違はず此騒動、兩方御腰姫の女御は同じ御位、藤壺に慮外あれば弘徽殿にも慮外

ある、いづれ理非は付かたし、但し清瀧を擽られしは因幡が死したる下手人な、然らば先づ彼が母、則藤壺の御乳の人治部卿に乾度預け置き、重ねて公家武家詮議の上の御沙汰たるべし、サア此上にも御批難あらば承らんと云ければ、大將不興げに、ム、然らば公家武家立合の番をせさすべし、扱兩方をなむ懐胎の女御、大内一所の御住居は、下女めち迄が嫉み合、禁中騒動の基、誕生迄は藤壺是も乳人に預け置く、必々参内無用、なんと渡邊、大内の掟、いふ事あらばさし出て見ぬかと、睨付くれば、渡邊老さつて、侍風情の我が上を計ふには候はず、主人の命を蒙るからは、綱が詞は頼光が詞、總じて文を守る公家方は風儀優しく詩歌管絃の御嗜が肝要、是に違ふ無道人は、如何なる高位高官も、乾度警しめ制するは武家の役に候と、前後をさへて立歸る。文武兩輪の小車もめぐる日影や。西の京壬生は木立も物ふりて、何にか、らん藤壺の、父母の形見の吉屋形、左大將が計ひにて参内叶はぬ里住の、乳兄弟の清瀧は、庭の枯木に猿纏り、壬生寺の入相も、妾の花や散すもん。藤壺堪兼ね走り寄り、なふいま、しい此の有様、よし自らが過りにて女御の位を追おろされ、憂目に遇は、あふ迄、綱を解かんと寄り給へば、ア、氣弱な上臈様、其美しい御心ゆへ弘徽殿が我儘、殊に伯父の左大將我姪ひとり女御に立て、己れが威勢を振はんと、ちらやさんの道満迄くるになつて爲すわざ、御一門とても無く、お力になる母治部



卿は云ひ甲斐なき年寄、かく有らふと知るならば、疾にも夫持ふもの、お身になる物がな  
い、これ賢女だても事になる、弘徽殿に負まいと、お心に我を持って、科を私ひとりには負せ、  
斬れうが打れうが振捨て参内なされ、お位は王様でも、明ていへばお前の男、悋氣嫉妬に  
法度はなし、生ながら蛇に成て、鬮體に角のはへた習もある、角こそはへずと、せめて瘡  
でもはやさふと思召せ、エ、齒痒ひ上臈やと、身を顔はして泣ければ、いや／＼見掛こそ  
ぐつしやり、人こそ知らぬ心の隣、玉体に纏ひ付き、弘徽殿に喰ついても、悋氣づくに負  
ぬ／＼と、思はず高聲もれ聞へてや番所より、あれ／＼人かど藤壺は隠れて奥に入り給ふ。  
公家方の當番平次兵衛盛重聲を怒らし、不敵なり召人、公家武家立合の番をも恐れず、高  
聲に上の御噂、所詮物をいはするゆへと、袖引ちきり清瀧が口ぬち込／＼、も／＼立紐にて  
くる／＼巻て猿轡、繩を枝に釣あけられ、畏に嬰りし狩場の鳥、忍び音になく如く也。武  
家方の番つツと出で、是々盛重殿とやら、今日合番ながら親々御意得ず、我らは源氏の被  
官相摸の國の住人、小餘綾新左衛門の尉景春と申共、四五日以前に参勤の所、主人頼光此  
番を申付らる、長道中の疲勞と申、上方無案内の我等、大事の御番と辭退せしに、女中  
といひ輕き科、嚴しく參るに及ばず、捨身など無き様に勞はり勤よとの事なるに、拷問同  
前の苛責心得かたく候といふ。げに尤の御不審、公家方武家方立合の番、御分は頼光の下

知を受られよ、此平次兵衛は公家方の仰に任せ候と、いへば、小餘綾東武士、大内の作法  
さもこそと打連れ番所に入にけり。清瀧は爪先もつかぬ計りに釣上られ、息も通はぬ苛責  
は、左大將奴が計ひ、藤壺様へのあたりよな、たどへ手足をもがれても、お身代と思へば  
厭はぬ、エ、凡夫の目に見へぬ逆、佛神ないと思ふかや、心の底まで見透しの天に目も有  
り耳もある世の中の善悪を見分け聞分け給はぬかと、見上る月も山の端に、早や入果て  
と更にけり。燈火細き、お寝間の内、お側には我母の、八十にあまる治部卿、何を力にお  
いとしやと、涙もともにはら／＼と、桐の葉落て飛ふ螢、思ひ悄然たる深更に、廊下の障  
手に影映り、忍びの者と覺しき二人、ぬき足して藤壺の寝所をさして窺ひ寄る。追つひ  
て直衣の袖高結び、抜刀提げそろり／＼と忍び込、影はあれ／＼南無三寶、すは事こそ、  
まい／＼此清瀧が見付し物、おのれ活けて置ふかと、心は先へ我身を忘れ駈出ん／＼と  
身を揉んで、ハアそうじや、身は縛られて居る物をのふ御番衆／＼、と叫んでも聲立ず。  
忍は寝所に早や入たり、エ、お枕長刀ある物を母上は寝入てか、何んの事縛り繩引ちぎら  
んとぬちつ、しやつ、我力、我腕くびに喰入て、心斗りにつなぎ犬、柱を廻るに異なら  
ず。寝間に太刀音はた／＼、血は飛んでさつ／＼と、紅葉を畫が如くなる。障子押明  
母治部卿、何者か忍び入り藤壺様を切殺し、妾も深手と斗りにてかつばと臥て絶息れば、



狼藉者も逃散るかけ、屋形には下女計り、有に甲斐なき牛童、あはて騒いで番所を叩き、狼藉者が忍び入、藤壺様とお乳の人治部卿殿を殺した、先此通り頼光様へ注進といひ捨て駈出す。小餘綾は旅づかれ、寝耳にはつと枕を上、見れば相番盛重も前後も知らず高野、是平次殿兵衛殿、狼藉者が藤壺とお乳の人を切たるとや、起合給へどゆり起され、心得たりと枕の刀追ッ取て奥を指て走り入る。小餘綾も刀取て脇狭み、股立かき上げ駈出んと我身を見ればこは如何に、差たる刀は鞘より、弓矢八幡こりやどうじや若相番と換りしかと見れ共、磯千鳥の、毛彫の金物さし料の鞘に極つたり。ハッしなじたり、狼藉者の仕業か、遠國武士に耻與へんと意地悪る者の嫉みかど、胸も騒ぎ前後を忙し、天をあぶぎ地を走り、奥の二間に駈込んで藤壺の死骸を見れば、指捨たるといめの刀、白銀づくりの三枚鏢、ワアは是が身が刃と、脱かんとせじが否や、檢使も待すぬき取て、血刀詮義にいひ分も卑怯甚極、此ま置て切手我に極つて、罪科逃れず命を喪ふ、又某が云ひ譯立ち、切手外にある時は、武士の魂たる枕の刀盗るをも知らぬ痴呆者と、小餘綾新左衛門の尉景春が武名長く朽果る、命を捨ふか名を捨ふか、二世の不覺一期の浮沈、とやせんかくやと心も昏み、我身を見へぬ我身の了簡、情ある武士の、了簡あらは借たい、キ、武運に盡きし口惜やと、拳を握り牙を咬み、無念泣きだぞ泣居たる。門外に八馬の聲御檢使と呼は

つて、坂田の公時最先に、碓井の貞光、下部の末武、高挑灯とし上させ、つまり、目に配り、三木立寄り死骸を見届、末武と、めを脱ぎ、公時貞光は見られよ、刃の光切日天晴将録の物と見え、目貫金物備に武士の指料、是程の刃差す者がとよめを刺し捨、刃を置て逃たるは狼藉者、察するに人の刀を竊んで切たるに紛れなし、然れば切手は腰抜け被殺者、御本一の御果待と見え申と、云へば貞光打領、是れ御番衆、堀を乗たる跡もある、儲程にたる迄知らぬとは、油断、といひければ、平次兵衛つッ出、いや我々は細付清瀧番は承る、藤壺の番は仕ら、なふ小餘綾殿、御分の腰に鞘より見へたるが、刃の身は何とせられしぞ。キ、あのどよめと身が刀よ、切は御邊が切たよな。ハッ斬る斬らぬ詮議は檢使の御役、刀の主は此小餘綾景春といふ所を、公時飛か、りて取てひッ伏せ高手小手に懸つくる。兩人取付き實否も匡さず大事の侍、例の暴氣か無分別と制すれば、いや無分別か上分別か仕上げを見よ、こりや小餘綾、御邊が斬つたも極れば罪科逃れず命が捨る、刀は我刀で、切らぬとの云ひ譯たては命は助かり名が朽る、命を捨るか名を棄るか、命が惜くは解てやる、名が惜くは細にか、れ、心次第と云ひければ、小餘綾大聲上て、ハッ、天晴れ公時、情ある詮議の仕様過分、如何にも、仔細あつて藤壺治部卿は此小餘綾が害したり、如何なる罪にも行はれよ、腰刀竊まる、狼藉武士でない、本國



に一子もある、世倅が名をも降さぬは、公時のお情と楚爾と笑へば、公時いきつて、チ、  
 氣味の好い白狀、武士はそうじや、出來したく、なんと末武貞光、白狀させた公時が分  
 別が分つたが、まだ能分別見せふかど、清瀧が縛ねじ切く、心のまゝに死骸を葬ふり、  
 後世帯へど引たつる、清瀧悦び、ヤイ抜刀の影法師は汝ぞあつたな、爰に平次兵衛に猿轡  
 掛られて、聲はたゞち主と母とを聞々と切らせた、拳を一ツと飛かゝる。公時押へて其  
 恨は私、もう是からは天下の召人、ならぬく、ぢたい遺奴が猿轡かけた故、眞拳で彼奴  
 が顔くらはせいと、いへば平次大きに怒り、ヤア公時添くも左大將早岑公の仰を受たる、  
 平次兵衛盛重知らぬかとそりを打つ。ヤアいたいげなとよふするなぬ、公時にそり打て何と  
 せうと思ふ、ちのれ武家の侍なれば仕様もある奴、ヤア清瀧にぶたるか、其が否なら公  
 時が此拳を頂ぐか、たつた一ツで素頭はり砕いて呉れんと、睨付られて顔ひく、顔さし  
 上れば、清瀧、よふ猿轡かけあつた、覺へくされく、と握拳二三十、また所望、ま一ツか  
 是で二ツ、また所望、三つ肩間に四つ横顔、五ツ息筒、六つむしやうな大黒舞、七ツ細付引  
 立て御籠をさしてぞ。立初る世は秋風は、時ならぬ、弘徹殿の軒端の松、かゝれる藤の一  
 夜が中に、花咲みだれ春にも勝る小紫、白妙色をあらさへば、雲かと思ゆる雲の上、殿上人  
 上臈達、是には歌の會もがな、管絃の御遊もあれかしと勸めさしめ給ひしが、如何はし

けん弘徹殿とつと寒氣の瘧、膚熱して苦み給へば、御脈をうかへ御典藥、君も行幸まし  
 まして、繪言汗のじ加減、中を補ふ人參も醫者も心を刻みけり。左大將早岑は藤壺の最期  
 の次第、わざと包んで奏聞せし、疑ひもなき藤壺の怨念なりと恐ろしく、御瘧氣の跡残る  
 曇の御痛とは見へ候へ共、世に優れし御寵愛人の妬、此時の邪氣虚に乗ずると承る、芦屋  
 の道滿を召て護身の加持申付候はんと、御前をこそ立にけれ。其時帝も御心に覺しめしたる  
 三思ひ、彼方を思へば此方の恨、此方を思へば藤壺がうら紫に嘆く藤の、名の花色も懐し  
 と、立寄給へば弘徹殿、自らとても隔なく共に慣れたる雲の上、君がゆかりは紫の草の袂  
 も、我袖も露ふれ初て立寄れば、此花恨みたる景色にて、風も吹かぬに藤退き、立寄れば  
 又元の如し、爰を以て遍照も、餘所に見て歸らん人に藤の花はひまつはれよ、まどへと讀  
 しの葉も、人の姿も懐じや。いや懐しとは偽りの、人の心の裏ももて、裏葉を見せて藤  
 壺が恨はれんと來りたり、忘れもやらす水無月の、加茂の御坂の車諱ひ、御身も思ひ白露  
 の、所へだて、立ならぶる物見車を如何なれば、君が情を弘徹殿の御車とて人を拂ひ、侮ら  
 れたる自らが、身は小車のやる方もなしと答へて立置きたる、車の前後にばつと寄て、人  
 人轡に取付つゝ人たまたみの奥に押やられて、物見車の力もなき身の程を思ひ知らすべし。  
 あら心得ずや物見車の下簾、下と下との諱ひは、夢にも我は白糸の筋なき事な恨み給ひ







夜よるは我も焦れて入懸る。衛士の又五郎義長と云ふ者あり、下郎には似ぬ心さま。清瀧に思ひを懸け、大内のお暇申し、母治部卿に奉公も、戀の爲に尻軽に、立居に一寸手をしめゆ。身振で知らせ目知らず、心のちくて穂に願れて、慮外者として退出され奉公もかまはれ、浮世を忍ぶ菅笠や、近江のたりを彷彿ひしが、故主治部卿、主の主なる藤壺、敢なき最期と隠れなく、さぞ清瀧の歎きの程、痛はしく床しく、戀といふは愛らと都に歸り、便の風も懐しく毎日浴中浴外を、一脱ぎにする又五郎が心の中ぞやるせ無き。折しも左大臣早岑公には庭普請、もしや清瀧の行衛開出するべもと、數多入込む人足と共に居れ今日も又、屋形に來れば、雜掌黒壁權の太夫鼻を擧り、ヤア〜昨日も今日も晝から來て取る實は一日分、急ぎの御普請人が足らぬ、早や〜お庭へ廻れ〜と叱られ、御尤では御坐れ共、夜の商賣が過ぎまして、どうでも朝寐致します。何じや夜の商賣とは、吞込まぬ〜いや〜夜の商賣とて御氣遣は無いもの、私は女房も持たず裏長屋の獨住、お聞なされ、東隣に此頃若い女房よぶ、西隣には餘所の煙が男持て宿道入、壁一重後は奉公人の出合宿、

まア向ひは後家のお針、相屋の息子が泊りに來る、すは夜中の鐘がごとく鳴り、世間の人には静まりて此方の近所は商賣最中、三方四方から賣かけては、五戒を保つ長老でも、朝寝せねば叶はぬと、笑はれてこそ入にけれ。時に芦屋の道滿參上し、取次かくと披露すれば、左大将殿に立出て、是〜と塵きけり。道滿膝元にすり寄て、扱も弘徽殿の御産なさるる、白川のお茶屋へ参りお目にかゝり、尤御養生の爲とは申ながら、京距れたる山際朝夕の御淋しさ、結句御養生にも成まじと、伯父君様にも御案じ、殊に個櫛の所には、藤壺の怨念又來る事も候べし、ひらに左大将公の御館へ移り給へど、いろ〜御異見申せども、いや〜伯父様一所に居て、窮屈候へる程なれば、内裏に於て養生する、藤壺の怨念も我身に疊りなき故、晴明が祈りの験、其後は見へ給はず、帝様も夜な〜御見廻として忍びの行幸、別に淋しいとも無し、伯父御の方はいや〜と御承引候はず、夫故某才覺にて、清所の瓜蒬子の類、魂を入れ能く加持し歸りしが、今宵夜更て色々の形願れば、夜の明るを待兼て、明日此處へ御移りは目前、御案堵あれとぞ申ける。先以太義、さり乍ら夫迄もなく、屈竟の相談ありと近く寄て小聲になり、尤弘徽殿御寵愛と雖、色好の帝、如何なる者にも御心移り、もし脇腹に皇子誕生杯ある時は、我本望は達し難し、屈竟とは愛のと、弘徽殿見廻の爲に夜更て白川へ行幸あるとは、誠に天の與へを取らされは反て其罪を受け



時至るを行はざれば反て其殃を受ると云ふ、途中に待伏せ密かに害し奉らば、脇腹の障もなく、弘徽殿の誕生、皇子ならば勿論姫宮ならば女帝と仰ぎ、女御は國母我外戚の權を執り、萬機の政務心の儘、日本を掌にまはさんと思ふは如何と嗚けは、道滿席を打て、ハア、思案も有ればおるもの、仍此上の候べき、三百六十四交の占、時の一字に縮めたり、時刻移さず今宵思しめし立給へ、扱討手は誰どか思召す。ア、それも思案がをちらせり、それ、今來たる人足、是、召せと呼出せば、又五郎、日用の鉢巻も公家の冠、御免なれと搦手をして機先に匍匐せば、死すた近う寄れ、おのれは能見知つた面、先年節會拜賀杯に、陣の小庭で箒を焼し衛士の又五郎よな、藤壺の乳兄第清瀧に心を懸け、お暇つて清瀧母に奉公し、主に懸する慮外者と追出されしといふと仔細あつて聞たるが、此頃此邊身を驚して徘徊するは、主の敵を討んと思ふ面、頼母は、緊と胸を据えたらば、左大將が加勢人して討せんぞ、討つか。思ひ掛なき又五郎とほは顔して、我ら生れて此かた、一文二文さへ打た覺へなければ共、相手に來て打ても見まじよ、先藤壺の敵とは何者がな切ましたぞ。されば、汝に語るも恨めしい、昔帝の御心より起りし事、去女中を御寵愛その嫉妬によつて、小餘綾新左衛門といふ武士に勅詔あつて治部卿共に害せらる、それさへ有るに我姪弘徽殿、彼女中の嫉妬にて散々煩ひ、白川の館に隠れる、帝忍んで

行幸成る、是も害せんとの御巧、我が爲には姪の敵汝が爲には主の敵、心を懸けし清瀧には親の敵主の敵、彼といひ是といひ、帝を討たずば男では有まじ、某もかゝる大事を云ひ聞せ討まいと云ふからは汝を又此左大將か遣されぬと、太刀引寄すれば道滿も同じく柄に手を掛け、家來の難掌青侍、氣色立つたる有様、又五郎吃驚せしが、いや、爰は上手の入る所と、ハア、御意までも無い事、主の敵と見るからは、帝でも王様でも討かねば致さず、去ながら勝負ははなの物、運つきて死たれば、又五郎は一月が百づゝの輕い命、お前のお名は千萬貫に易へられず、まそのと御思案は有まいか。ホ、よい念、それをこそ秘密あれ、則ち汝之源の頼光が郎等、渡邊でも金時でも孰れになり共出立せ、頼光よりの宿直の番を宵より白川の館に入れ置べし、帝行幸と見るならば、頼光が郎等四天王の難と名乗て打かけよ、時には假令仕損じても、頼光が答に落ち、此方に思なし、加之我家來、黒壁權の太夫に、腕こきの侍共相添へ館の周圍に置からは、仕損ずるとも有まじ、胸を据て討つ所存かど、退引させぬあつたりの氣色、是非に及ばぬ一寸通れと思ひ定め、エ、天晴一段の御分別、然らば拙者坂田の公時に成ません。いや、四天王の中にも公時は強力のあら者、第一其生白い面では公時にはうつるまい。ア、魯な御意、夜目遠目で云ふ事あり、紅粉でも丹でも塗り散らし、澁面作つて目を見出し、臂を張つて握拳、歩き様は先つ此通、



のつさく、のつさくと踏んばちかりの又五郎、畢竟公時は仁王じやと合點すれば、仕損ひは御坐らぬ、呑込ましたと云ひたれば、ア、神妙く、それく烏帽子装束太刀刀取らせよと、廣蓋に盛ならせさせ、こりや汝が身にも隠目付數多付け置ぞ、我前で間に合せ、道より外したて杯するならば、汝を直に討捨と覺悟せい、扱別しての心得、今宵夜更て様様の變化の形顯はるべし、必々恐るゝな、皆道滿が咒咀にて正躰は瓜茄子、一々に打切り打切り手並を見せ、弘徽殿女子共に至る迄誠の公時と思はせ、必ず色を覺られな、罷歸つて用意せよ、急げくと有ければ、是非に叶はず又五郎装束とつて押頂き、ア、誠身代に連れる心と世話にいふも理り、此太刀刀烏帽子装束給はつて、今迄日履の又五郎も公時の氣に成つた、いかな王でも帝でも狙ふ敵は只一人、たつた一討根笹に敷、あり合ふ奴原胸切、堅割振首貫ぬき人間は朝腹、變化でも化物でも、鬼神と組んで手柄が仕たい、エ、鬼神と組たいくと、力足をどうくと、どうと踏んだる其勢ひ、頼母しく、口計りは坂田の公時、心は鬼みそ鬼より畏はき左大將、瘡の落たる心地にて一さん駈てぞ歸りける。宮にはあられ里の名の、白川の山よせに弘徽殿の下屋敷、庭に草花やり水に、かけ桶仕掛けて煮よろく流れ、君が忍びの御幸道打渡したる岩橋も、夜の契りの便かや。上臈がしら大炊の局あまへに出で、二三日は御藥も相應御心も輕るそう也、勿躰なや御門さま夜な

く玉躰をやつされ、御徒歩で行幸なる事御身の眞加も恐ろしく、是へお出なさるゝは何時易い事、一先大内へお歸り敷慮を安め給へば、又一ツの御奉公と様々諒め参らす。女御はや、御涙、自らも思は思、共、痛はしや腰壺の自らお仕業と、最期に思ひ込給ふ恨の恥しや、いとしらし氣立にて互に隔てず語りし中、怨靈に成る程疑はれ未來遠迷はする、女は互の身の上と、無味氣も痛はしく、今しも涙に暮らすや、世間では我嫉妬ゆへと鬼の様に思ふべし、よじ人は鬼もいへ自らお身を立て、胎内の宮御誕生なる迄は内裏へ迎は歸るまじ、今日も道滿が伯父様の方へ参れと云ふ、憂さやつらや伯父様の、あの御心ゆへ我迄人に歌はるゝ、生甲斐もなき我身やと、御涙に暮れ給へば、大炊の局腰元中、げにち道理とはりど、夕悲しき秋の日も入て程なく暮れにけり。又五郎義長はわうぞやうすくめの坂田の公時、後下りの掛烏帽子、垂衣のそば高く、顔にぬつたるあか月の、夢にも見ぬ伏たち刀に腰が撃れて、歩めば煮ちかり又五郎、もし正身の公時に出逢は、ぬち殺さるるは走の物、はづしてくれんと思へども、左大將のかくし目附いつくに有る白川と、三途の川と身も震やう、門にのきけるが、手を敲いては公時らしき有まいと、石を拾い門の扉はたたく、打敲き、爰あけ給へと呼はつたり。女御を始女房連是はなれじやと身をすくめ、誰ぞといひ手もなき所に、以前より猶荒くはたたく、とんく、とんく、とんく、あ



けよ、開ずばぶつてぶちくづす、とんがく、と敵きける。大炊の局は、ながらあつと出で、女中の御殿夜る夜中おはたし、名を聞かぬば開ぬ、サ、何者ぞと答められ、是は源頼光の御内四天王の隨一坂田の公時、此御殿には藤壺の怨靈に餘ひは、物手づたふで、弘徽殿をなやまも奉る由、宿直申て變化退治仕れど、主君頼光の仰を蒙り、坂田の公時、公時、正身の公時なるとぞ申ける。人々悦び、サ、鎌の櫛が来た、御門を開て通しませ、是へ、と請すれば、ゆらり、と大またぎ、下にうつたら響きまよ、女中方御膳つぶされな、とつかと坐はりけれ。女御を始め女房達、おど聞たる公時と目もはなさず見給へば、扱珍らしさふに御覽有る、山姥の子なりとて鬼の様に思召す、山姥も本は人間、産所もうぶやも山なれば、取揚婆に事をかき、氣分加減こそない、ゆで殺さふとまたげな、其ゆでられたいはれに面も五臓も此通に異赤いな、其代りこの腕に千人力、此腕にも千人力、ちいさの時から山に住み、朝晩のまゝとまも取り熊と腕をし仕る、其間の慰み大木を引ぬいたり、大磐石でつぶて打ち、友達は素狗共、羽がいと打ある、毛をむさる、鼻を捻つてなかする、七歳の時近郷の國かうかは山の鬼神を手捕らまひにして、殺す様にひねり殺した此公時、怨靈を變化でもあはれ出て見よかし、さはると微塵にする事、今宵計りは氣遣ひなしに、御酒宴でも遊ばし、ゆるりと御

寝なりませ、ア、久しう變化に出合ぬ、一二疋ぶち殺し、慰たふ存ずると、口に出るまゝ力ばなし、手柄ばなしに、女房達、聞及ぶだよりひがへすな弱そうな風俗で、扱もいかひ兵ど、皆々興をさまさる。夜もまんく、と更渡たれば、道満が封じ置くまじないの其まゝるし、家鳴まきりにとるく、ゆさく、と鳴渡れば、女御ははつと消魂給ひ、女房達は氣を喪なひ、なふ坂田殿公時殿と逃まどふ。又五郎も恐じさ、身は震るへども齒ざしみて、大事ない、皆寄つて公時にきつと取り付いていさつまやれど、いふを誠と女房達はいだきまむるを力にて、こらへても震ひは止まず、是れ公時殿をなたはいかふ震ふぞや。いやこれは武者ぶるひ、兵に有る事、なんぼ身はふるふても變化が出たらば微塵こはいにしてやると、詞も未だおはらぬに化したる女の影もなくなつてぼろに立たる面影に、女御は猶々消へ入る計り、此公時は何處にぞ、公時、と尋廻れば、妻戸のかげ身を縮めてぞ居たりける。なんの爲めのものおぞ、口程もない公時と、耻しめられて氣をとり直し、アツア思ひ付たり道満がまじない是なりと、思ひ定めて見廻せば、また顯はる、變化の形、右左にすくくと、三幅對の如くなり。ヤア正體は能知つたり、いで、坂田の公時が姿を顯はし見せんずと、大音上、中に立たるうりぞね顔、まくはの精と見付たり、姫瓜にてもあらばこそ、面は青瓜、もふりの粉ふき化粧見たくない、こいつが口のおはぐるを、面



まで逢つて初なりの、茄子の帯の舞ひぞこないと見たは僻目か、違はせじ、きやつは姿もぬら／＼と、垣には這はず島に這ふ、不便や種をくろめても、身は切賣の西瓜面、蓮花割りか輪切りか、太刀刀にも及ばこそ、薄刃小刀かつふるひ、但又皮むかず、まるかぶりに逢ひたいか、立されやとつとぞねめ付る。行術に賣らし一理一氣五行の精、人の面消へ／＼と、ふり茄子の形を現じ、一度にけら／＼とつと笑ふ聲計り、姿は失せてなかりけり。女御漸御額を上げ、給へば女房達も息出で、扱も公時と手柄／＼、先九献でも夜食でもと皆撫でさする計りなり。いや是しきの化物いつものと、怖い／＼と思召す心からふり茄子にも性根あつてあの通、今の浮世にないものは化物と正直者、兎角人が恐ろしい、何事も此公時に御任せ、御心やすく御休息と、申上れば、弘徽殿、恨めしや憂思ひ有る我身なれば、弱みのりやうけと様々の、まやうげのあるも理りぞや、ついでに夜な／＼帝襟忍びて是へ行幸成る、玉躰御怪我もないやうに、彌々頼むと入給へば、女房達もとり／＼に、ほんにいかひ兵や、こなたを町屋においたらば押入の案じはない、ちつとやすんで下されと、皆々奥にぞ入にける。又五郎は我身ながら我身がとんと合點いかず、左大將が恐ろしき公時に成は成つたれど、一天の君を討ち奉れといふ左大將、萬々利でも大悪人の朝敵、一日百づゝの又五郎が命、十善帝王に奉れば本望、隠し目附が見るなら見よ、跡より大勢來ふ

ば來い、御味方は又五郎と、胸をすへ待つ所に、山よりつゞく透垣のすき間をくゞつて怪しき人影、是ぞ帝の忍の御衣にすがつて奏問し、直に落し奉らんと、ためらふ中に、御劔に手をかけ、奥をねらふてそろり／＼と忍びの足元、やゝ心得ずと又五郎跡につゞいて援足し、鼻息もせずかゝひ寄る。危ふかりける有様なり。己に一間に飛入らんと志給ふをまつかどきとめ、御聲はし立て給ふな、十善天子の御身にて劔戟を帶しはしたなき御有様、いかなる敵慮に候と、能々見れば戀し床しの清瀧、なふ清瀧様か。御身は誰そ。有にもあらぬ此様、御見忘れは御尤、お耻しやいにしへの又五郎めと計にて、さしうつふけば、なふ又五郎かいの、どうに妻夫になつたれば此辛らいめはせぬものを、いかに母様の御機嫌にちがひしとて、よふふいと出ていんで、そしてそれで濟む事か、いふた事は皆うそかと、戀に先だつ涙なり。なふ日本國に知れた事、藤壺様と母上とひとつ刀の御最後、其敵弘徽殿を一太刀と思ひ此有様、介太刀も討つべきそなたが、顔真赤いにぬりまはつて、抱きとめて今の詞のすへ心得難しと有ければ、是れにこそ長物語、ひとつまんで申すに弘徽殿の女御には露塵も答はなく、伯父左大將が悪心に道満が手傳ひ、剩へ帝様此所へ忍の行幸、此又五郎に坂田の公時と名乗つて害し參らせ、又其罪を頼光にゆづらんと巧み、我等わざとかどうとして帝も女御もたすけ參らせ、時節をうかゝひ左大將を討取り、お主の



敵天下の敵を亡さんと、一心を堅めたり、あまへも我等とあ心を合せられよといひければ、エ何いやる、心計り合せた連、もう女房持てゐやらふもの。いや、我等は女房持ませぬが、お前は男持てか。エ、勿躰ない、男一人持なから、なんの二人持ものぞ。其一人の男はどれどこに。是れ爰に有と抱きついて、けはしきなかの逢ふ瀬こそ、いと身にしむ戀路なれ。はや無動寺の夜半の鐘、聲吹きあろす小笹原、播分け、主上御徒歩躰足にてあはたしげに逃入給ひ、誰ぞよふ誰ぞよふと宣言有る。御聲聞知り、あら氣遣はしと女御走出で給ひ、何とて義懐惟成は御供には見へざるぞ、此山中の夜の道、犬狼のどがめもやと兎角勞はり奉れば、帝御息つがせ給ひ、いや、虎狼よりも恐ろしき源頼光が謀叛にて、貞光末武綱保昌と名乗り、多勢にて取巻し、三種の神器氣遣はしく、義懐惟成兩人は一先内裏に返したり、追付是へ寄せ來らん、今は遁れん方もなし、武士の手にかかり輕びたる名を流さんより、是迄なりと、御懐の御劔に御手をかけ給へば、清瀧又五郎飛で出で、ア、直奏恐れに候へども、みだりに玉躰をわやめさせたまはんは却て後代の御耻辱、是全く頼光が謀叛に候はず、左大將早岑が逆心、我等は先年の御垣守衛士の又五郎と申者、早岑我等をかたらひ込み、坂田の金時と成て害し奉れど、是非なく頼まれては候へども、天命を恐れ、朝恩を重んじ、此趣を奏問せんと存する折節、此女は夫婦の契

約仕りし藤壺の乳兄弟清瀧、参りかゝつて一天の君に命をさげん事かばねの上の悦び、爰は夫婦に御任せ、山路にかゝつてはやく還幸成べしと、奏しおゝぬに、早岑が雜掌黒壁權の太夫を先として、平次兵衛盛重、爰はの士卒百騎計り、門さきにとつと取かけ、いかに金時正しく帝は只今これへ入り給ふ、手にあまつて討ちかぬるか、渡邊の綱平井の保昌加勢なり、なんとくと罵りける。又五郎駈け出、いやさはしきに加勢頼む金時にはあられども、帝は最期に伊勢太神宮へ御暇乞の御拜あり、暫しといひ捨て立歸て、サア、事急にぞんずる、仔細候へば御衣を脱いで清瀧に下され、主上は女御の小袖を召し、各打連れ落させたまへと、兎角老つらひ奉れば、萬事は汝に任ずると、女御諸共山路にかり落たもふ、御有様ぞ勿躰なき。其隙に又五郎椽の御衣取て清瀧に打着せうなずけば合點し、合聲して待かくる。こりやく、綱保昌討奉るこれ見よと、太刀打あげてはうんどのり、振り上げてはうんどのり、二三度四五度ふりわけ、うんといふてのり返り、やれ、玉位はこわいもの、眼がくらんで討れぬ、罰を受けてむだ死し、主君の忠になら事、其陣ひげと呼ばれば、平次兵衛、いや、近く寄つて影を踏めば討も有る、遺矢に射とれ、弓よ矢よどひしめけば、清瀧も是迄なり今は遁れぬ所ぞと、口に念佛目に涙、又五郎は氣を碎き、天子に命奉るといひし詞はもだされず、こらへるたけはこらへませぬ。



かすり矢でも當つたらそれからそれ迄、あのればら一人も通ざじと、汗を握つて立たる所に、盛重弓矢追取て雨のごとくに射かけけり。誠に月日山陵を織付たる天子の御衣、當ても射付ても、やからくたけて飛返る、岩に射つくる如くなり。黒壁壁をなげ、心得ぬ所あり、装束はづして頭を射よ。心得たりとひつくはへよつ引ひやうと放なす矢が、清瀧が右の髪さき射削て、髪のわけにぞとまりける。扱こそく、装束にあたらぬが頭にあたるは帝にあらぬ似せ者、又五郎が二心、込入て討とれど、どつどか、れば、何處へく、左大將などにぞだてられ、あどり狂ふ又五郎と思ふが不覺、馬鹿者共、かりに公時をまねたれば心もずんと公時、女共は刀でせいと、築山に飛んであり、山姥の息子に似合た櫛に山めやり、春は梢に咲かど待ちし花の梢をえいやつとねち折つて山廻り、秋は清瀧てきを捜して首してやろと山廻り、夫婦が眼に遮る奴原小鬘をちよつとて山廻り、めぐりくして輪會を離れぬもうぜいの雑兵、切拂つて山姥か世性、我等か爲にはまうとめ山姥手並を見よとを笑ひけり。彼等夫婦に切り立てられ皆散りく、にぞ逃げ失せけり。中にも黒壁剛力者、庭の石橋兩手に取つて打付る、むかふ櫛に待かけ、直に取てあす程に、石橋を抱き乍ら、あをのけにつゝこかさされ、起んとするを乗り掛り、えいやくど人のすし、板の如くに成でけり。サア夫婦出世の眞始め、十善天子に忠節は、草の蔭なる藤壺様母治部卿も御喜び、

先大内へや参らん、頼光へや訴たへん、それも出来すぎですぎたり、過ずあどらすぎよ比ころ、年もよい頃似合ひころ、頃しも秋の眞中頃、月の桂の男持つ、こつちは女房もち月の、影も心も曇りなき、縁と縁との結び合ひ、手を引き合ひて行くときは、これも男に縁深きかつらの里にぞ忍びける。

### 第三

治る花の都とて、く、風も音せぬはるべかな。源の頼光四海の安危掌の中にてらし、百玉の理亂を心の内にかげ給ひ、二條大宮に評説所を建てさせ、棘の殿と名付け、式目を極め、四天王の面々此所に會合し、政事を糺し、吟味の上にて言上すべしと、平井の保昌大目附の別當、末武貞光相談役、綱公時は批判の役、各心を一致して隔てぬ中のまつりごと、頼もしや諸ろ共に近く居寄て語るべし。保昌則ち月番にて、なふ旁、浴中はしく不思議の取沙汰致たす由、組下の横目聞き付ての注進、彼去々年藤壺の女御を害したる咎によつて首を刎ね獄門にさらされし小餘綾新左衛門事な、是は頼光の不吟味ゆへ、成敗の仕損ない、正しく切手は外に有り、不詮議にて咎なき小餘綾を罪に沈め、本領取上げ、妻子迄流



涙する、頼光一代の鹿忽の仕置と、京中（みやこ）は沙汰と承はる、聞捨（ききすて）に致さんか、但言上せられ  
 うや、評説あれといひければ、公時居丈高（たけたか）に成り、何物かさうかうす、其時の檢使は貞光  
 末武加勢の役、此公時が當番（とうばん）にてまつすに白狀させ、君の御前へ引出し、重々（しんじゆん）詮議の  
 上罪科（うゑい）まされなく、獄門（ごくもん）に切り懸けた、其時分はあしだまつて、有て過（あやま）た今に成りいや不  
 詮議（せんぎ）な仕置の、成敗の仕損ないのど、風説するは、我君か此金時に遺恨ある奴、そいつが  
 首引（くびひき）抜いて又獄門（ごくもん）に懸けてくれう、言ひ手は誰ぞや其名をいへ、サア保昌と詰めかくる。  
 扱は某評説所（つうせつじよ）にて偽りを申すと思はるか、大目附（おほめづ）の役なれば粗子の横目の申す通り、洛中  
 洛外（らくがい）聞傳へ言傳へ、沙汰をする程の者かたはし首も抜かれまじ、心を静めてとつくど評説  
 せられよといへば、ム、扱は此公時そいつらの首（くび）抜きかねふと思ふか、京中（みやこ）を廻廻り、風  
 説（せつ）をする奴かたつばし捨首（すてくび）にしてくれんと、あごり出れば、末武貞光、又持病の虫が起つ  
 たか、先待て〜と制すれば、ヲ、如何にも持病か大起りした、首二三引抜かねば本復  
 せぬと駈け出る。渡邊（わたなべ）を荒らげ、狂氣（きやうき）したか公時、御邊（ごへん）が様にするならば、又洛中（らくちゆう）にい  
 ひ廻らし、頼光の眼の取沙汰をいやがると、悪名の上塗り、君の御爲を知らぬか、御爲め  
 くと渡邊が御爲（ごゑ）づくめのひねり針、漸虫（しんちゆう）を静めける。や、有て渡邊、方々如何に思召す、  
 閻（えん）巷の風説とて聞捨（ききすて）になり難し、御存の通り一歳東寺羅生門（らせいもん）に鬼神棲むとの風説（ふうせつ）誠しから

ず、只今公時の諱（なづ）ひの如く、保昌と某御前（ごぜん）にて諱（なづ）ひしに、風説（ふうせつ）にたかはず、是等を以て考  
 がふれば、世に逆心（さかこころ）有る奴原我君をけぶたがり、所詮（しよせん）頼光の威勢を落とし、世のそしりた  
 まられず、遠國へ身を引かせん計畧（けいりやく）に、いひ始めたる風説（ふうせつ）とおもふはいかに、といひけれ  
 ば、満座（まんざ）の人々一等に、是は黒星、よき推量、疑なく左大將が謀、葦屋の道満平次兵衛盛  
 重等がいひはやらすに極（ごく）つたり、下の詮議（せんぎ）か、言上かど、とり〜評議（へいぎ）まぢりなり。時  
 に渡邊つ〜と出で、其者共はいふに及ばず知れた事、爰に一人のうさん者方々心は着かざる  
 か、北面の武士羽倉伊賀の介久國が事よ、去歲迄僅かなる何功もなき青侍、左大將かどり  
 なしにて敵愾（たいてい）にかなひ上北面の武士と經わがり、千石の領地を食む、殊に此比親里（おきな）しれぬ  
 女房を呼入れたと傳へ聞く、きやつめ一味の張本（ちやうほん）と覺へたり、のび〜に捨置きはびこつ  
 ては事やかまし、先彼等か家内へ犬を入れうかいひ見ばやど、いふよりはやく公時、いや  
 犬も猫も要らばこそ、踏ん込んで詮議（せんぎ）せんと、飛で出るを、又起つたか公時、證據をにぎ  
 つた上の事、此渡邊か思案（しあん）には、世間へは我々評説所（つうせつじよ）にある跡（あと）にて、保昌一人こゝにどい  
 め、残る四人が火消（ひけし）のすがたに立出て、供をも連れず一騎打、火の廻りの役人は禁中公家  
 の門内へも、案内なしに出入る掟（おきて）、人の風俗詞のはし、つまり〜に目をつけば證據を取  
 らぬ事有るまじ。ヲ、げに究竟の思案、延引して外へもれ裏をかゝればあしかりなん、時



刻うつさず今日すぐに。尤と許証所の御用長櫃をし開け、急用仕立の早装束、また、  
 く間にこそ立出たれ。肌は腰巻滑熊の野袴、十王頭に筋金入れたる脚絆、もみ踏皮、武者  
 鞋、から柿のうら打たる薄絹子の革羽織、くさりくみの上帯ゆりまめ、破綻の甲づ  
 きんぼつとこみ、目斗り光るつら魂、夕立露る雲間より星のきらめくごとくなり。いで  
 是より手分けをして、貞光は左大將が館のめぐり、夕闇の烏丸の門より入れ、末武は平次  
 兵衛が塀のめぐり、四方八方六角通をうかふべし、公時は道満が頭の鉢に味噌つけて、  
 ぶりくどかみくたく鹽の小路を行べきぞ、此渡邊は北面の羽倉伊賀の介久國が女房ひろ  
 めの振舞、客來つくと聞く、能折から御さんなれ、あやしめられな、不覺を取るな、出  
 會ふ所は羽倉が館、合點か、合點と、約束かため身をかため、四方にわる、四天王、須彌  
 の四州をどうと踏んで、耳を飲て閉まむる、世間の弦音梓弓、引きは返さじもの、ふの、  
 八十島ぞ頼み有る。浮世といふは女の身北面の武士羽倉伊賀の介久國が水師の下女、下臺  
 所の釜の下、竹とよばれて半季居の、去年の秋のぬれわらち、露もまだひね前垂姿、たす  
 きも縁と結ばれて、伊賀の介がつれ、の、寐覺くの夜ばい星、いく夜を重ね、伊賀の介  
 本妻に引あげて、奥様成の御祝儀や、氏神祇園の禮参り、どのさまつけて膳すへし、腰元  
 侍召具して、乗物つらせのし、と、被衣に位そなはりて、にくい程なる腰付を、つめ

りたいでやた、きたい、それはむかしの火吹竹、今はやさしき糸竹の、あたけ様とかしづ  
 かれ、若葉がさきばしり、奥様の御歸りと、いふ聲にお迎ひのまかなひ、腰元是は、お  
 乗物に召もせず、よふ御ひろいなされたと、被衣どりくもてはやす。のふ餘り俄か慇懃で  
 うそ恥かしう迷惑な、昨日今日迄傍輩の下の下に立た身が、假令女子のならひ奥様といわる  
 へ、迎、身持あげする氣はなけれど、一ツは殿の御外聞と、あとなしやかの物とし、中居の玉  
 が手をついて奥様へち直に申すは恐れおほい事ながら、部屋の棹にびらついて有る、お前  
 のふる前垂ありや何といたしままよ、といへば、あたりがまめく、家のあとな磁太  
 夫、きんか頭をふり立、ヤイふんばりめ、慮外なそれ何ぬかす、あのれも女子の内玄やと  
 思ふか、先其ほうげたの温飩の粉がおかせたい、ぬか、御前へ出あるなど、叱り散らし  
 て入れれば、いわたまやるなと殿、私もお家に季を重ねいひたひ事をいふ故に、めつ  
 ばうふたいの玉と名をとつた女子玄や、いかな奥様でもこちとでもかわらぬ事が一つ有る、  
 雨われ雪や氷とへだつれど、とくればおなじ谷川の水、いかな逢坂の關の清水でも、谷  
 水のあんばいなら負はせまいと、わめきける。伊賀之介久國祝儀の上下引つくるひ、座敷  
 に出れば、銚子島臺、松に鶴龜、竹も打かけよそほひて、萬代とめし三々九度、伊賀の介  
 盃ひかへ、家來の男女能く聞け、此度此者本妻にたてし事無念と思ふ傍輩も有べきが、



天子大臣の御母方斯様の例敷まらず、それに付け物とりかたりのたぐひ、知らぬ他國の伯父で候甥で候などと出て来るは此時節、伊賀の介か妻女の名の出ぬやうにと氣を付けよ、いひ渡す事は是迄、女共と主臣の盃くんと、又酌かわす竹の葉の、千秋萬歳の千箱の玉を奉る。憂き事は世に小餘綾の磯千鳥、千鳥足なるきれわらぢ、破れ笠きて十六七の、ひたいのすみもかざくんと、つか糸切れし小脇指、さすが貧人の躰とも見へず、臺所口さしのぞき、此御内の食焼ち竹と申す女子殿に逢ましたいといひ入る。玉附付て走り出で、お竹様の仕合を早かき出したか、ム、よい鼻の定てお竹さまの甥で有ふ、但弟か、是かたりいふもきてんが有る、羽倉伊賀の介様といふ武士の御家、お竹さまにあひだてして棒に逢うふが笑止など、つき出されよらくんと、なふかたりとは情ない、其人のいひ付か、名は小文五と申者、此聲が聞へぬかど、恨みかこちてさげふ聲、奥へほのくんと聞ゆれば、腰元は笑止がり、もし奥様に覺へが有か、覗て御覽なされませと、いふを力に飛立つ斗り、物の影よりさしのぞけば、國に残せし我子の小文五、野山に寝たか身もしほたれ、こもをかぶらぬ計りなり。あれが小餘綾新左衛門が總領の成れの果、扱も無慘や可愛やな、母ぞといひて駆け出て、顔が見せたい抱き付きたい、心は關の目もくらみ、胸に涙をたもちかね、のふいかにも甥にまきれない、父母に離れて頼みにするは此伯母一人、逢たいも理り

と餘所にいひなす壁訴訟、伊賀の介聞分て、尤もく、他人にはさぞ遠慮、是へ通して女子ども皆脇へちれ、我も奥へど立ければ、是々お竹様の御對面、あれへくといひ捨て、皆々部屋にぞ入にける。覺束ながら小文五は、母に逢たさわらんじもぬぐやぬかずにつくと入り、どれ母様は、マ、是爰に抱き付き、顔を見合せむつと泣き、見上てはむつと泣き、つもる親子のため涙互ひに詞もなかりしが、ア、心もどなや、何としてのほりしぞ、本國をわかる、時のひ聞せしを忘れしか、父こそ誤ましい罪科に沈み給ふとも、筋目ある小餘綾の家、母が都で下主奉公してなり共そもじをもとの武士にせう、それ迄は家名をかしくし、奉公の志んぼう志やと、氷川の社の神主へ奉公させ、母が身の上こまくの文も定て届つらん、此暮か來春は美々しい迎ひもやらる、首尾、十の梯子を七つめから、とんと落たかうたどやと、又ざめくんと泣ければ、いや苗字の爲め身の爲め、お詞は忘れぬどもつゝむとすれど悪事千里、あれこそ藤壺の女御を害し、獄門にさらされし小餘綾か世倅とかくれなく、神主き、付け、後のたゝりを恐れてや、其事となく追出され、するがの町にてすみを入れ、道中とても志るべはなし、人の軒下辻堂の雨にうたれ露に濡れ、きのうの夜は勢多の橋のらんかんの影に夜を明し、物憂き事とは存せしが、母様水師奉公の御苦勞をさへなざるものおいとしやと、案じくのほりしに、おふみにちがひし此おすまゐ、



嬉しいながら一筆知らせ下されば、これ程には案じまい、親は子を思へ共子は親を思はぬと、一筋に思召す、つれない心の母御やと、ひざにすがつてかこち泣き、母も涙に堪へ兼て、なふ身に小袖着かざれば、心の中に苦はないと、餘所目に見ゆるは情ない、耻かしや此事を親子顔をさしあて、かたるも胸がいたけれど、去年の秋此家へ奉公に出しより、そもじを世にだす便にもと、主人はあるか傍輩迄とかく人に愛を取り、氣に入りたいと勤し餘り、主人伊賀の介袖褌引てくどかるゝ、ア、うるさい事とはおもひながら、何も我子の出世の爲めと、あひそちらしうあしらひ、私は身に過てだいそれた望ある者、それさへかなへ下されば、といふてみづくにいひかけしに、侍真利如何様の望でもちがへはせまいと加たぐの誓文、サア嬉しやと思ふてみつ、如何に子が可愛ひ逆、夫に離れ尼法師にこそならずとも、惜い女の道は背くまいと、思へば相手はかたい武士、誓文まるる心から約束反古にせぬ氣なり、エ、誓文のぞむまい物と、悔んでも返らず、思案する程氣かうらたへぞがいせんと刃物を手に取つたれども、のふ浮名の耻辱も身の耻も子のいとしさにかへられず、なじみを重ねそもじの事を頼まんため、涙まじや口惜や、君傾城も同前に母が名を捨て身をけがし、二たび夫をかさねた、悲しいともつらい共起臥に付けともすれば、伽に成るも涙にて、病と成るも又涙、今日は本妻ひろめとて、着飾りし此小袖、模様のおかいや

紫の色々に染わけしも、母の身の因果の花、見るもうたてや淺ましや、語るも口がもとあらぬと、かつはと臥て泣き給へば、小文五もわつと斗り母にひつしといたき付き、涙の瀧の糸筋も、もつれすがりてなげきけり。やゝ有て涙をさへ、かく迄の御厚恩何と報じ参らせん、去ながら率爾に申さば御歎と今迄はひかへしが、年月の御苦勞も皆仇事、此小文五は今をもまらぬ命と成るその仔細は、母は聞給はずや、本國をはじめ關東筋道中迄の取汰沙、夜前より都方を開合すれば、是もかはらず藤壺はまつたく小餘綾は殺さぬを、頼光の不吟味にて獄門にかけられしと、人毎の囀紛れなし、痛はしや無實の罪に沈み給ふ父の最期の心入れ、思ひ分くに所なく、かの切手をさがし討て手向けんとは存ずれ共、天下の武將頼光か詮議にさへ志れがたし、近道の敵は頼光、蟻螂か奔なれども、門内に切入り一太刀ふれば本望、母の御顔見奉り此うへの思ひ出なし、御身の上を猶々かくし父や我等が菩提を頼み奉る、是今生の御暇と、涙の目元につこりと、笑ふて立つを引どがめ、やれ思ひがけなき事を聞く、世には虚説も有るならひ、頼光の御内へ切込んでむだ死がしたいか、先志づまれ爰な子よ。いやゝもれ聞へて反をくひ、擲られては無念の無念と、振きればすがり付き、とめかねたる親子のさま、主人伊賀の介障子押開飛んで出で、親子を共に引寄せて、チ、チ音高し、さては汝等は小餘綾が妻や子にて有けるかと、つく



づくと打まかり、涙をはら／＼と流せしが、世間風説にたがわす、藤壺の女御を害せしは汝等が父小餘綾にてはなし、引入の相圖に任せ忍び入り、長旅につかれ臥たる小餘綾が刀を奪ひ、賊藤壺を害せしは此羽倉伊賀の介よ、といふよりはつと飛しさり、母をかこふて身がまへし、心は夢の如くなり。チ、驚くは尤も、賊や深山に茂る諸木の中ゆがまらずに立たる木は、杣人先是を切て板柱とし、ゆがみすぐりし節木をきり残すといふ古人のたとへ、小餘綾が心まつすぐにて、刀を取られし耻を思ひ、咎を身に受け誅罰せらる、此羽倉はゆがみ木の切残されしと思へども、今汝等が手にかゝり、侍の名をやきこがす薪どわられ砕かる、報の根ざしぞ淺ましき、我等はもと一僕つれぬ小身者、一人の老母大病におかされ、異國の藥種買調ん力なき所、彼大事をたのまれなんなく仕あふせ過分の禮金、思ひのまゝに高直の藥を求めはもとめしが、我母計りの命ををしみ、人の命をかへりみぬくちよこしまの天罰にや、母は泄れ聞き、はつと斗りに氣を喪ひ、すぐにおはり給ひし御臨終のあへなさま、道にたがふ孝行は却て不孝の罪と成る、况んや我手にて藤壺を殺し、我心にて小餘綾を殺し、我因果にて母を殺す、此重罪一百三十六地獄萬々切めぐつても、惡業盡くる期あるべきかと、又さめ／＼と泣けるか、所詮我本人と名乗て出で、小餘綾がかゝつたる獵門の木のその跡に同じくさらされんとは思ひしが、いや／＼時には頼光不詮議

にて小餘綾新左衛門非法の成敗せられしと、六孫王此かた満仲公に相ついき古今の名將よと呼はるる頼光、源氏に疵を付け、末代に御名を下さん事天下の鏡を打割る道理、勿躰なしとありと、すぐる月日に立身し、正北面の武士と成り、今の榮花は極れども、心に忘れぬ身の罪業、今日やむくふ、明日やむくふと、浮べる雲に乗るととし、刺小餘綾が後家共知らず夫婦と成る、罪とやいはん、耻とやいはん、今ぞ約束の誓言をたがへぬぞ、いかなる望もあらばあれ、夫の敵をうつといふ是にうへこそ望はあらじ、母からでも子からでも、サア寄て討て、やれ討てと、腰刀投出し、思ひきつたる駄座のかんばせ、小文五も前後にくれ、父には寇母には情、是非の道理を脇指に、手をかけながら親子の人、目と目を見合せわつとばかり、むせぶ涙ぞ道理なる。いつの間に忍び入たりけん、火の番目附裏表より二人づゝ案内もなく伊賀の介が兩手をしかど取り、武將の御召サア参れとひつ立る。ム、伊賀の介も召とならば、威儀を改め、追付け伺候致すべし、町人跡の御召の如く見苦しといはせもはてず、四天王ばら／＼と頭布ぬぎ捨て、公時大音上げ、コリヤ振廻の御召とはちがふた、ちつと怖いこはめしと、袴腰ひつつかむ。家内の上下、すは狼藉と立騒げば、御意ぢや／＼と、威光の風に散る木の葉、猿を提たる如くにて、追取まはし引立て行く。小文五齒がみをなし、大事の敵を頼光に討てもらふて本望ならず、詮ずる敵



は頼光と、駈出れば母上、こりや是れを見よせめての形見と、盗み置たる獄門の高札、是を證據に無成敗せし頼光に腹切らせて見物せん、いざ來い小文五。ヲ、四天王に追腹切らせんいざとされ母上と、高札小脇にかひ狭み、跡を慕ふて急ぎ行く。記帳所の御白洲に伊賀の介をひつすへ、四天王御前に出で始終委細に言上し、直に尋問るべしと、武將御出ある所に、親子御門に走り込み、椽ばなに手をかけ、せきにせいたる息ざしにて、我々は小餘綾新左衛門が妻これは子小文五と申者、藤壺の女御を切たるは此羽倉伊賀の介に極り只今召捕給ひ、又是此高札相摸の國の住人小餘綾新左衛門尉景春藤壺の女御ならびに乳母治部卿を害したる咎によつて首を刎ねかくの如く行なふものなりと、墨くろくんと書まらし、獄門にさらされしは何と、エ、くらい大將軍、恨めしや、身上輕き小餘綾とて、命も輕しめ給ふかや、天下の武將の御命も同じ事、サア新左衛門を返してたべ、我夫をかへしてたべ、さなくば大將の御誤とて御切腹を見る迄は、親子が首はめさるゝともいつかな爰は立まじと、白洲をつかみ大聲あげ、恨み歎くぞ哀れなる。雜式隼人口々に、だまりませ静まりませふと制すれども、頼光親子は見やり給はず、ヤア伊賀の介おのれ藤壺を討たるが必定ならば、小餘綾仕置に行なふ時分武士の身としてなぞ名乗て出さるぞ、小餘綾が切たる藤壺そも二人有べきか、虚言を構へ女わらべをたぶらかし、頼光が政道を弄物と

する言語同斷のまれもの、底意を殘さずまつすぐに申せ、聞かんと御説有る。伊賀の介のただけだかに成り、當座に此方より名乗て出る程ならば、別に大將の御詮議迄も候はず、咎なき小餘綾を非法の罪科に行はれし政道暗き大將と末代のそしりをかばひ、沙汰なしに彼等にうたれんと存せしに、無用の四天王がお爲めだて、いはれざれ御詮議にて御耻を觸れ給ふ、近比御笑止くと、そら笑ふてぞ申しける。大將御氣色損じ、頼光が末代のそしりを、かばふなんど、は、分に過ぎたる慮外者、おのれ等頼んでそしりを防ぎ耻を包む頼光ならず、すでに小餘綾は當座の白狀と、いめの刀は其身の指料、是を以て證據とす、おのれが藤壺を切つたる證據はいかに、との給へば、ハ、アといめの刀を證據とは御智惠の程あらはれて淺はかの御詮議、小餘綾が枕の刀をぬすみどり、罪を彼等におはせんため、わざとといめをさし捨しを、うまくと聞しめされしな、我等が討たる誠の證據彼藤壺は安部の晴明が封じたる刃除の守身をはなさずと承り、枕にありしを奪ひ取り、扱こそやすやす害したる證據是に過ぐべからずと、麴葵の守袋御前にさし出す。大將能々御覽有り、御手をうつて、ハ、ア、是ぞ覺ある守、此證據を詮議せんと三年此かた心神を碎いたり、頼光が一世の本望是に過じ、藤壺を害せし伊賀の介罪科は決定、それからめよと、御説の下より雜式取てひつふせ、高手小手にまめつける。小文五親子は泣きこがれ、サア咎の本人極



るからは小餘綾を請取らふ、大將がくられければまたがふ人も嘗めくら、ヤイ公時の赤面見事な檢使の仕様、オ、結構な四天王、夫を返せ父返せと、御前もわかず泣きさげれば、四天王もふしめに成り、公時が赤い顔青ざめてぞ見えにける。其時大將保昌を召され、故に預けし不老不死の名酒藏を開き彼等にすゝめ、心をなだめよとの給へば、ヤア人の大事の命を取り、酒を飲せてなだめよとはあんまりの御詞、只小餘綾を返されよ、サア返されよとたける中、保昌小姓衆酒瓶昇て出たりけり。公時渡邊それ打われ、畏て握こぶし四つ五つ、かんくど當ければ、瓶二つにさつとわれ、色なままらけ骨瘦て、髪はまやくまの弱法師、誠の人か幽霊かと、見れば小餘綾新左衛門。ヤア景春殿か。女房か。あれは我子か。父上かど、走寄ていただき付き、顔を見てはわつと泣き、ほんに誠の小餘綾殿、夢でないかまぼろしかど、人目も御前も打忘れ、たちつちどつ、嬉し泣き、御慈悲深き大將軍、恨み申せし冥加の程、御罰を受ん勿躰なや、とても御慈悲の上からは、兎角御免とばかりにて、御白洲にかつばと伏し、手を合せて泣きければ、小餘綾は茫然と、三年こもりしつぼを出で、天より落ちたる如くにて、前後の事は忘れども、妻子の歎をきよろしく見て、共に泣くこそ哀れなれ。母はやうく涙をといめ、なふ小文五そなたを世に立んため、女のまゝる道を背き、伊賀之介に枕をならべ、母が身はすたつたり、父御此世におはすれば母が望

みは是迄、此上にながらつて親子三人ともに耻辱、跡をたのみさらばやと、立より柄に手をかくる。貞光末武おしといめ、御前を知らぬか推參者、御門の外では死なれぬか、まかり立てと制せられ、誠にこゝは懼りどさしうつむいてぞ居たりける。頼光重ねて小餘綾が藤壺をうたぬとは是ほどの事を知らずして天下の仕置なるべきか、此守りの證據を以て本人を捜し出さんため、保昌一人に心を合せ、牢番に蓄紙をさせ、切らでかなはぬ盜賊の首を切つらよとよし小餘綾新左衛門と高札に記し、獄門にさらし、一旦事を静めし故案の如く伊賀の介が本人のつゝみあはられたり、是頼光が思慮にあらす、善惡ついに明かなる天の道、伊賀の介が魂に入て心の中の罪科をかり出し給ふと知れ、きやつはきつと籠屋へひけ、小餘綾は身を清め目見の時分本領申付べしぞと、御座を立て入給へば、小文五すゝみ出で、重々もそれ多き事ながら、母たる者思はず女の道を背き耻にたへかね自害と思ひさだめし躰、なんばう悲しく候へば、とても御慈悲罪をなだめ給はれかしと、涙にくれて言上す。頼光はつたとにらませ給ひ、かなふまじく、武士の妻として貞節の道に背きし女、なだめ置ては總じて天下の法たはず、中々思もよらぬ事、召人伊賀の介が家財關所女房はあがりもの此方へ召取たり、扱あがりもの、女房は小餘綾が妻女にとらすぞ、召連れ立てとの給へば、ハアツと計りに親子の人、またさめやらぬ夢の中、又夢見たる心地に



て、天を仰ぎ地を拜し、君を禮して諸袖に、悦びの色めくみの色、錦を古郷にひるがへす、  
上一人の仁徳より命もつきぬ泉の霊、命のせとをこゆるぎの家を二たびあこしける。

第四

春の花秋の紅葉の情だに、いつ迄うき世にとまる色かはなき物を、主上は弘徽殿に一向の  
御契り、愛着戀慕の思ひにほだされ、生老病死のことはりも忘れ給ふぞ詮方なき。され共  
御懷妊あつてより三十餘ヶ月に及べども御誕生ましまさねば、佛神の咎めか人の妬のつも  
りかど、女御も世の中捨ぶちに、すまぬ駒の行く月日、里がちに暮し給ひければ、君も  
よろづあぢきなく敬慮をなやまし給ふ折柄、御局の上臈達あわたりしく、なふ悲しや弘徽  
殿の女御様臈方より御局に見へ給はず、東西の對の屋、庭のくまへ尋ねても行方なく、  
長とひとしきあぐしをふつと切り、書置の一通と、形見斗りのからくしげ、涙と共に  
さし上げば、帝是はと計りにて、御魂もきへくと、御志とねを轉びあり、形見のかづ  
ら御身にそへ、龍顔におしめて、涙の玉の冠もかたぶき、ひたる、御歎、伺侯の公卿  
殿上人も悉もんの袖をぞまぼらる。中にも中納言義懷左大辨惟成詞を捕へ、御歎はさる

ぞながら、此世にだにましまさば尋出さで候べきか、先書置をと奏すれば、ひらいてつく  
づく敬覧あり、是見よや、方々北面伊賀の介が藤壺を失ひしは伯父左大將に頼まれしと拷問  
の上の白状とや、伯父の悪事も自ら故、夢にも知らぬ事ながら、冥途の恨も世のそまりも  
罪は我身一人に負ふ、濁らぬ心を願はして世の疑をばらさん爲め、深き淵に身を沈め空  
しくなるとの筆の跡、見るもはかなやうらめしや、二世三世と契りしに、千尋の淵の底迄  
もなとか伴ない行かざるぞ、朕が身一ツながらへて、たどへ天輪淨王の位もよしや何せん  
と、玉躰をなげ打ちて、焦がれ歎かせ給ひけり。義懷惟成さまへ、慰參らせ、折節阿部  
の晴明大學寮御番なる、占はせ候はんと、やがて御前に召されける。晴明暫く考へ、あら  
笑止や、弘徽殿の御身の上、前に喰しき幽後に高き山有り進まずしてと、いまると申す易の  
面、生死の間に迷ひおはします、蹇は東北に利あらず西南に利有り、西南に出給は、御命  
つゝがなし、もし北東へ出給は、はや御命有まじと、一々考へ奏すれば、いやまし御歎、  
ながらへてだに有ならばいかならん山の奥、海は艦櫓のたつかぎり、普天の下は尋ねべし、  
なき身とならば冥途の便いつかは開いつ聞かせんと、又繰返す御涙、亂る、絲の如くなり。  
兩人御力を付け、ア、御心弱し、天が下のあるじにて何か敬慮にかなはぬとや候べき、唐  
の帝は楊貴妃を慕ひ方士といつし道士に仰せて、楊貴妃の魂の在家を尋ねられしに、方士



則ち蓬萊宮に入るとて日本熱田の社に到り、死したる貴妃に詞をかはし、形見の釧を取て歸りし例、もろこし人の魂さへ來り住む日本蓬萊宮、况して弘徽殿の魂魄日本は離れ給ふまじ、いかに晴明汝が行力にて女御の魂の有り家を尋ね、獻慮を慰さめ奉れ、とくどくどのたまへば、晴明辭するに及ばず、仙術を得し方士程こそあらず共、宣旨とならば亡き魂も顯れま見へ給ふべし、上は碧落下黄泉の底迄も、女御の魂のあり家を尋ね、御返り事奏せんと、御請を申し立ちければ、頼ありげの御景氣にて、おほどのこもる御涙、上日の月卿雲客も、皆々退出せられけり。中にも義懷惟成うへふしまておはせしが、はや漏刻も夜半過、貞觀殿の小門より、忍ぶ足音更行く月に衣かつぎの女妾、ヤア心得ずと走寄りから衣引のけ見れば、主上は御涙にまはれ侘させ給ふ躰、こは御狂氣が淺ましやどあきればはてたる計りなり。いや妾は狂氣に似たれども、心は物に狂はぬそよ、たどへ晴明が亡き魂の便は告ぐる共、妾を見る世のあるべきか、されば會者定離哀別離苦の旋は十善天子ものがれ得ず、終には生者必滅とをしへて先立つ女御は佛、朕は迷ひのあら凡夫、此度生死の火宅を出で、菩提の門に入らん爲め、花山寺にてかざりをあらし、出家と思ひさだめたり、汝等といむる物ならば、七生迄の恨みぞやと、宣ひ捨て出給へば、兩人も力なく、御跡慕ひ諸共に、大内山の名残の月、雲かくれてやくもり行く。

花山院道行

げにやたかきもいやしきも恩愛妹背の別れ程、世に哀れなる事はなし。勿躰なくも主上は十善帝位を振り捨て、めしもならはぬ草鞋に、御足を痛ましめ、義懷惟成御供にて、戀路に迷ふ泡沫のかへらぬ水の泡とのみ、消へにし人の面影は、夢にだに見へされば、なれし昔の手枕に、語り盡くせしむつことの、耳にとまり懐かしや、忘れもやらぬ戀草の、露も思ひも亂れつゝ、我が身はもとの身なれども、契りし人のなきゆへに、月やあらぬとかこちしは、げに理りと思召し、御心細き折からに、やもめ鳥のうかれ聲、我を訪ふかと思はれて、哀れを催ほす道の邊に、夜すがらとぼす螢火の、おのが思ひのあればこそ、虫だに胸をや焦すらん、げに在原の業平が鞆中の眺めに、飛ぶ螢雲の上までいぬべくば、秋風吹くと歎きしも、涙くらべて哀れ也。いとさへ、身を志る雨の霽る、間もなき半天に、小田の蛙の鳴きそへて、道もさだかに見へざれば、涙をみちの老るべにて、やうやうはこばせ給ひければ、横雲渡る東雲に、今日と散り行く花の山、御寺にこそは着き給ふ。賤が茅屋の軒の下、御もすその露を志ぼり、御足などすゝき参らせ、暫しやすめ奉る。悉達太子は十九にて王宮を出で給ふ、今此君も十九歳、檀特山と戀の山、麓の道はかはれども、未は一つの法の門、月も入るさやたづね行く、まぼろしもがなつてにても、



魂のありかはそこしも、若ら露分けて初尾花、ほのかに見へし遠山の、草の假寝の昔蔭、石清水にぞ着きにける。陰陽の頭晴明、もろこしの詔蘭夫婦が中立の昔を引き、紙を以て燕をつくり、秘文を封じ放せば、此の鳥生けるがごとく翱翔どかけりさへずり、道志るべするつばくらに、誘はれ行くや男山、八幡宮の寶殿の、東の御殿の玉簾の、たまは爰にといふ計り、とまりさいづるつばくらの、形はあなじ紫の、御簾の房にぞかくれける。扱は弘徽殿未だながらへ爰にこそおはしけれど、寶殿に向ひ聲を上げ、和國の天子の勅の使晴明是迄参りたり、女御は内にましますか。何我帝の御使とて何とて爰迄來られるぞと、九華の帳を押のけて、玉のすだれをかへげつゝ、立出で給ふ御姿、雲のびんづらあたら物、きつて捨たる柳髪、昔の花の色はなけれど、匂残りし御かほばせ、寂莫たる目の中に、涙をうかめ給ひしは、何にたどへん梨花一枝、春の雨をさび、風にまたがふ海棠のねぶれる花の如くにて、あらめづらしの晴明や、君に名残は盡きせねど、身のうき草にとぢられて、洲に身を投げ死なんとせしに、寇を情の人心、清瀧夫婦に見付られ、たすけて爰にかくし置き、湯水をはこびはとくむも、露の間の我命、とてもながらへはてぬ身を、とふにつらさのまさりぐさ、枯れて此世になき身ぞと、奏問してたべ晴明と、只さめたくぞ泣給ふ。こは勿躰なき御詞、誓しの別れさへ以ての外の御歎、今はなき身と奏問せば、聖主御命有

るべきか晴明一朝にえらばれ御使に立ちながら、すこくとたち歸り、何の志るじか候と、はいかりなくぞ申ける。その志るしとは形見の事か、残り置たる黒髪にまさる形見はなけれども、使の志るしとあるからは、思ひぞ出る君と我、天にあらばどちかひてし比翼の鳥のかんざしを、是ぞ志るしと奉れ、驪山の花も一度は散り、華清の池水も終にはかるる世のあきて、必ずなげかせ給ふなど、よくく奏し給へやと、涙乍らに入給ふ、御袂を引どめて、御一門の悪心を身一つに引き受け命を捨て給はんとはことたりとは申せ共、人間の種ならぬ皇子を御身にやどしなから、ともに失ひ給ふべきか。いやとよ恐ろしや三十餘か月生れぬ子が何しに君の種ならん、人の恨の月つもり、産落して君の敵、母に寇どもなさんより、共にまづむはふかき淵、未來の淺瀬に浮べてたべ。いやく昔もさるためしあり、唐堯と申す帝は母の胎に十四月やどり給ひ、黃帝は廿五か月、老子は八十年白髮にて生れ給ひし上は、怪むべき道ならず、先御歸りとすむれば、それは聖人明徳の明かなりし不思議とかや、是は戀慕の種まき初て、二葉にそだつ戀草や、色をあらそふ藤壺の根にからまる、其恨、過去遠々の昔を思へば、いつを衆生の始と知らず、未來永々の流轉さらに生死のちはりもなし、天上の五衰より北州の千年も皆まぼろしのたはむれど、知らで重ねし戀衣、君どかはせしむつこと、比翼連理のさめ言、さくの一夜の手枕に、



かゝるかづらを切りし身は、有といへどもなき身ぞや、悲しき昔の物語り、く、つくさば人目もあもてふせの、形見のかんざしまるしに持て、名残は盡きず、いざさらばとて、勅使は都へ歸らば歸れ、さるにてもく、君には此世逢見ん事もよもきが島津島、浮世なれども戀しやむかし、はかなやわかれのどこよは爰ぞと、伏し轉びてぞ入給ふ、御有様ぞ力なき。衛士の又五郎清瀧夫婦、先にまよ帯をもち月の、かつらの里に住せしが、弘徽殿の捨身をたすけ、八幡の寶殿にかくし置き、裏の手作の鳥物、清瀧が煮焼して、夫がはこぶ世は情、心ぞあはれ粟の餅、菜の葉の飯を重箱の、つゝみものさへにくからぬ、十八ささげ煎のあつものとのへて、まやだんの擔にヤアゑいとな、あいとしゃさどあさびしからふと女共の世話やき、追付け跡から参る筈先ちつと上ままよと、包みとく手に晴明をきつと見付け、ハアこなたは爰の社人殿か、御番でがなごさるかと、なんとなふ問ふ顔色、四聰をささる晴明、是ぞ彼又五郎、是ももと藤壺方油断ならずとさあらぬ、いやく我等は鹿島のことふれ、上方皆々めでたき御詫宜ふれ仕廻、當社に参籠いたした、少休息致そふと、足をくつるげゆるくしき躰を見て、又五郎志んき顔、是ことふれも社人の内爰で休むは慮外ぞや、胸へいたがよいわいの。如何にもく、伏見に泊る合點なれども是からまだ二里の道、足もよほど疲れた、その重箱の物振廻に預りたいと、ねぢよれば興さめ

顔、ア、ふといことふれ、終に一度も見ず知らず、中になにが有も知らず、めつたむまやうになるまへか、こりや喰物ぞやごさらぬ、少爰に用がある餘所へ行てもらひたいと、せく顔を見て猶ゆるく、ハテさもしいうそを吐く人ぞや、中に有る物一重く名をさいていふて見まよ。や爰なわらは如何にとふれとて見通しでは有まじ、食物といふても百色もある物、サア上の重からいふて見や、いひ當たら振まはふ、徹座でもちがへば鳥帽子装束ひつばいで裸にするが合點か。如何にもく、鹿島明神も御照覽、此誓文でちがへたら剣でもとれ、面白い八幡大菩薩いひ當たら振まはふぞ。サア何ぞやいふて見や。晴明粟の餅ぞとはとつく占まつたれ共、轉じがへて興さまさせ、御籠越に弘徽殿の物思をいさめんと、誓し案じて、ア、知れたく色は黄な物、黄色な物でなんで有ふ、みかん柑子九年母、ム、うへな重は柑子ぞや、ちがいはせまい蓋を取れ。又五郎にこく笑ひ、今時分の柑子とはあんまりの推量、ちがふとはいはせぬまかと柑子ぞやの、どりや真裸にしてやる帯といて待て居や、こりや粟餅といふ柑子を見よと、蓋をとれば大柑子。何とく、先志てやつたどひつたくられ、又五郎なげ首して、南無三寶體に女共が粟餅ちぎつて入れたが忽ち柑子にならふとは、正八幡も御存じ有まい、いつその事破れかぶれま、一度來い、サア此二重めで勝負まやう、いふて見よと肘を張る。いやもうさうくは御免あれ。なら



ぬならぬ、ことふれ殿、はがねばあかぬ、何ぞや〜と顔あかめ頼に大汗大筋はり、おそい〜と責かくる。晴明わざと迷惑顔、今のは不思議のいひ當り、此度ちがふは定、刺るるは志れた事と、いふ内に轉じかへ、てんぼのかはいふて見よふ、此重は喰物でも何でもない、生た鼠が三疋ある。又五郎頭をたいて悦び、何じや鼠ぢや、エ、あほうなことふれ、重箱に鼠入れて何の用になる物ぞ、但人をなぶるのか、まやれにはさせぬひつばぐぞや、詞をつめた合點か、さらば菜飯といふ鼠、是見よと蓋をとれば、黒白の鼠三疋顯れ出て、重箱のめぐりを立さらず、手がひになつきしごとくにて、又五郎も我をおつて、こりやどうじや扱もなれば成る物か、てうらい柑子と鼠に成ると、あきれ果て居たりしが、不思議そうに打まもり、ム、合點〜、是程の奇瑞顯はすは安部の晴明にてあはするな。中なかの事。我らは藤壺の乳兄弟清瀧が夫衛士の又五郎と申者、昨日の曉弘徽殿の女御桂川の深みに身を沈めんとなされしを参りか、つて引とめ、御身の上を尋れば、伯父左大將がはからひにて藤壺を失ひしと、頼光の御前にて伊賀の介が白狀、殊には君をおかさんとたくむ惡逆、皆自より起りし事、ながらへ憂き事聞かせんより、死なせてくれとの御歎、様々なだめ此寶殿の東の間にかくし忍ばせ申せども、日影の吾々奏問すべき便もなし、一つは朝家の御爲御執奏願み参らすと、心底他事なく見へければ、晴明横手をうつて、神妙

神妙、某も宣旨を蒙り弘徽殿にあひ参らせ、御邊の噂聞きつれ共、藤壺の御ゆかり二心もあるべきかどためして見たる面目なやと、所存をおかせば、又五郎、いかな〜斯う申す詞にかげとも入子も候はず、ヤ入子の次手に此重箱の柑子鼠、いつ迄これで居る事か、どうぞほんぶく成るまいか。晴明可笑しく、やすい事〜と轉じ返せば、忽に柑子は蒸せる粟の餅、鼠も所の男山をみなめしとぞ成りにける。斯る所に地下侍二三十兵具とり〜むらがり來り、は方々參詣の旅人か、最前より此所に内裏上臈とおぼしき女中は見へざるか、聞も及ばん弘徽殿の女御大内を忍び出で此御山にましますよし、蘆屋の道滿占ひ考へ、左大將早岑公より御身にあやまちなき様に尋ね申せとの仰せ、さもありげなる上臈あらば早速當山別當の御宅へ注進せよ、いざ先高根明神の廻廊近所をさがして見ん、皆々ぬかるな油断すなど、籠をさしてぞさがりける。晴明東西遙に見渡し、あれ〜又五郎猪の鼻坂女塚入大勢みち〜たり、此所にあんかんと置き申さん事井の元のわらんべより猶危し、某女御の御供して木かげをく〜り身をかくし大内へ入れ奉らん、わどのは敵を切拂へ、エ、相口同前の小脇指、鑓長刀にはかなふまじ、何どかせん、ヤあの繪馬白銀作りの大太刀、願主相摸國の住人小餘綾新左衛門の尉景春百日參詣うやまつて申とまるせしは、今度小餘綾が無實をのがれし願ほどきと覺えたり、まかれは眞劍とさんなれ、あの太刀取て脇ばさみ、相



手をきらずば切捨よ。任せとちけといふ所へ、女房清瀧息を切て走付き、のふ又五郎、ヤ珍らしい晴明様も是にか、嬉しや〜一人でも味方が多ふ成つたぞ、なんじやは知らぬが平次兵衛と道満が大勢連れてあれこ〜、女御様奪ひ取られては何しても詮がないと、御籠引のくればおほ〜と、人々の心ざし無にするに似たれども、敵といふは我伯父君、其罪の申わけ、死ぬる覺悟に髪も切り何面目に歸らふぞ、死なせてたべ又五郎と、歎き給へば、ア、申其爲の晴明殿、粟餅を柑子にし菜飯を鼠にする人が、おぐしの五尺や一丈はお氣遣ひない事と、夫婦御手を引く處へ、蘆屋の道満平次兵衛盛重地下侍百騎計り、谷々より押のぼり、ヤア扱こそ〜、某がうらごどにたがはず、弘徽殿は當山にましませし、又五郎清瀧晴明もかたうどな、懐胎の皇子をもち立て、左大將早岑公天下の執政となり給はん御企と、いはせもはてず又五郎、ア、おけ〜企とは何の企、其くはだてがどうばらへ針立にしてくれんど、い〜共相口小脇差、からりとぬき捨て、卒爾ながら晴明殿借用申とするりと抜き、多勢を左右に引受て、うん共すんども石清水、坂をくだりに追さげたり。平次兵衛只一人取てかへし、清瀧めがけ切りかくる。待うけたりと夫の相口ひろひ取り、暫しさへへてた〜かひしが、女方の小脇指大力に切立られ、すでにかうよと見えたりけり。晴明女御をかこひながら、ユ、危し〜、あの繪馬の主がな來れかしと心に念ずる其まる

し、願主の文字さつと消え、形は小餘綾新左衛門、太刀抜きかざし、清瀧をあしへだて、ぞつゝ立たる。ハアウ枕の刀ぬすまれたぬぼれ侍、どこから小ゆるぎ出たるぞ、寐言でないか目をさませと、雜言すれども事共せず渡合せて切りむすぶ、かげらふいなづま飛鳥のかけり、うてどもつけどもかなは〜こそ、いかきみづかき玉垣をくるり〜と追廻す。折しも小餘綾日參の神前に騒動心得ず、何事やらんと立たる所に、平治兵衛追まくられ、行かかつて、ハアウはや先へまはつてか、こりやならぬとかけもどれば、跡にも小餘綾、前にも小ゆるぎ、エツエ口惜い、晴明が行方よな、道満はあはせぬか、きやつらかたはしかなしぱりにしてくれん、道満〜とさけぶ所を、はつたと蹴倒しのつかれば、有りし姿は消失て、繪馬の移る願主の家名、文字は本のごとくなり。新左衛門まつぼに入てにこ〜笑ひ、嬉し〜あのれを〜と思ひしに、正八幡の御利生、あのれよふ引手をして旅づかれの某が枕の刀盗取り、藤壺を殺させ、無實の罪にあとしたなあ、伊賀の介が白狀にて悪人殘らずあらはれたり、是ぞあのれが盗みし刀、近付のやきばのかげん覺へたかと指通し首かき切つてつゝ立つ所に、又五郎は道満が首きつさきに貫ぬき、大聲上て、取つたぞ〜首を取つたぞ、こつちも取たぞ、首をとつた、名をとつた、ほまれとり〜とりはやし、都にうつす弘徽殿、晴明が加持の徳、清瀧夫婦が誠の徳、扱こそ小餘綾も、のふの一分立



てし男山、悪を亡す殺生も、義によつて放生門、とろくど踏みならず、そりはしの、なり、弓の形、源氏の氏神弓矢の威徳、天地にひつばる桑の弓、八幡を拜して歸りけり。

## 第五

山に登らざれば天の高きを知らず、谿に入らざれば地の厚きを知らず、聖賢の語を聞されば、道の大成を知らずとは、宜なるかな。清明がいさめにて女御不思議の生命をまねがれ、人々にいざなはれすぐに花山に入り給へば、主上敷感かぎりなく、急ぎ還幸なるべしと、弘徽殿も同車にて、小餘綾親子御先をはらひ、義懐惟成扈從にて、御車をどいろかせば、山路も野邊も秋の色、今日の行幸を待ち顔に、女房達の花すり衣、花一時も今まばし、眞葛が原に着き給ふ。草葉にすだく色々の、虫の聲々穂に出初し、すゝきにとまる蝶々や、やんまはた〜飛びつれて、祇園林も近ければ、ねぎ殿といふ虫も有り、秋の野遊の珍しやと、帝も女御も御車の見物がちなる女房達、暫し見とれて立ち給ふ。根笹まぢりの茅原の、風もふかぬにさら〜、さはめき立たる其中に、三尺斗りの蟻螂の、鎌をふり立て御車にさしむかつて羽を廣げ、頭をふつてぬらひしは、げに蟻螂が斧を以て流車に

向ふどはいひつべし。始の程は女房達、扱も大きなかまきりと、めで笑ひ給ひしが、後には人こはけ立ち、女御も驚きましませば、誰か有るそれ追のけよと宣言に任せ、小文五扇追取のべ〜、はたどうてばひらりと飛び、追はらへばはつと立ち、鎌とせり合ふ扇の風、飛さり飛のき飛廻り、飛歸つて御車の屋形にとまりやすらひて、四方に頭をふつたりし、眼は鈴の如くなり。小餘綾御車の前につゝ喜んで、わづか昆虫の障碍とるにたらず候へども、小敵を見ては畏るといへり、察する所我君に寇をふくむ凶賊きそひ起るべきまゐし、野の神草の神つげ教へ給ふ所、今日の還幸覺束なし、一先花山へ御車をかへし、重ねての御沙汰もやと奏しもあへぬに、菊が谷の岨かけより、覆面の男數十人あめき叫んで御車の前後左右を追取巻き、帝を渡せ、女御を渡せとひしめきける。小餘綾ちつともおくせず、扱こそ思ひまうけし所、疑もなく左大將早岑が群黨な、めつたに渡せ〜とは商人の賣りがけかいがけと思ふか、悪逆超過の左大將にまたがひ、朝敵と成つてあつたら命をすてんより、神國神孫の天子に従がひ奉り、百年の命をつげ、但し腕だてしたくばせよ、ちつと手荒ひ關東武士小餘綾親子がうで膾、鹽かげん見そこない、咽かほかさん笑止など、から〜とぞ笑ひける。悪黨ども聲々に、事をまらぬ思人め、日本三つの御寶、神聖寶劔内侍所是をもつて天子のまゐりし、忝なくも主君左大將早岑公今大内に入り代り、三種の神器をた



づさへ給へば、王様共天子共草木もなびく早岑公にそむくはあのれが朝敵よ、渡せ〜と罵つたり。ヲ、渡す、是を渡すといふまゝに、親子一度にするりとぬき、菊か谷をまつくだりになだれをつかせて追下る。中にも宗徒とあはしきもの、取てかへし車の轅に取付く所を、有つる螳螂飛であり、劔のかまをとぎたて〜、すねをかいてなきたをし、腕くびひざぶしきらひなく、なき伏せ〜追廻れば、あへてより付く便なし。小餘縁親子引返し、はさみ立て切り伏せ〜、終に首をぞかいてけり。今迄爰に有明の螳螂きえてうらむらさきの藤壺の俤茫然と願れ出で、ア、耻かしや我姿、君と契りしかさゝぎの、渡せる橋も中絶て、身はもみぢばの血刀にかゝりしを、左大将のわざともおぼえず、とがなき弘徽殿恨をなせし耻しさを、罪をゆるささせたび給へ、懐妊の御身を三とせ三月封じ止め、なやみをかけしも我がなすわざ、今胎内に持給ふは姫宮にてましませども、みづからが持こもりし若宮の御魂と、變成男子に轉じかへ奉る、只今誕生なるべきぞや、我螳螂の虫と成て御車の上に羽をやすめしは、神のみことの御うぶ屋鴉の羽を茅にふき合せずの尊の嘉例をまいらせ天龍八部も圍繞して、八百萬の御神の守まします御誕生、只今なりや、いざさらば、我は日影の露の玉、君が光りに照されて、御代を守りの靈神と、名残は盡きず、夕露につれて形は消へにけり。不思議や女御は忽に御産の氣づき給ひければ、女房達はつど

ひより、車を鴉の羽の産屋にて、端嚴美麗の御相好、皇子やす〜御誕生、初聲目出度く聞ゆれば、供奉の上下一同に、悦の聲うぶ聲に、車の音も千歳樂、萬代すめる清水や、車やどりに入御なりし。左大将早岑は止むるをえぬ悪逆、そのがやかたを打こぼたせ、禁中に押入て、攝籙三公の上に着き、隨がはざる公卿大臣、死罪流罪に隙もなく、頼光かやするともやど、四門かたくとぢさせ、口々に警固をすへ、籠城なんどの如くなり。衛士の又五郎義長妻の清瀧夫婦の者、頼光に訴認し、主の敵母の敵羽倉伊賀之介を申うけ、高手小手にいましめ、細引立て南門の前にひつすへ、ある、計りに戸をたゝき、いかに朝敵の棟梁左大将よつくきけ、あのれ一身の榮華の爲に若宮御懐妊の藤壺剩へめのと治部卿を害したれば、此又五郎が爲には主の敵此清瀧か爲には親の敵と主の敵、胎内の宮様を失ふ上は天下萬民のためには國王の敵、四方八方のもち合ひ敵、それはともあれ夫婦が爲め主親の敵討たい切たい心計りのはやれども、運に乗たる左大将、夫婦が力にかなはず、さるによつてきやつ伊賀之介さま〜願ひ、頼光より申受け、是迄引立て汝を切ると觀念し、一分だめしのなぶり殺し、つらの皮を踏んで〜ふみにじると、全く伊賀之介をふむにあらず左大将がつらをふむ、いふにかひなき又五郎に面をふまる、左大将、末世に耻をさらせやど、夫婦門を打たゝきどつと笑ふて立たりけり。左大将怒りをなし、築地の上に突つ立



ち上り、龍虎のいどむ眼の光り、くはつと見ひらきぬめ付れば、血筋いらつてらんくくと、七つ目がねの水晶輪左右に懸けたる如くなり。左大將大音上げ、ヤイ日雇め、うぬは見かけより肝さきに肉の有る下郎め、よくもくいつぞや此左大將をたらし白川にて帝をたすけしより事顯れ、思ふつぼをはづさせたり、然れば早岑が爲には身上の敵さがし出し土礫にかけんくと思ひしに、何ぞや此左大將がつらになぞらへ伊賀之介がつらをふまんとは推參千萬、舌の根がかび過たり、おのれにのめくふませて見物すべきか、誰か有るあれ奪ひとれど、いふよりはやく門押開き、數多の士卒むらがつて、夫婦を左右へ引のけく、伊賀之介を引立て内にかけ入り、扉を走め貫の木はたと指たるは、無念といふも餘り有り、左大將大音上げて打笑ひ、なんといなごども、見たかく、猫の子が親猫の取たる鼠をちやうらかしてにがすがごとく、伊賀の介を取はなし、二たび頼光につらはむけられまじ、夫婦それでさしちがへ自滅せよ、左大將が情に二人が死骸をさかばつけにしてくれんど、いひはて飛ちり入にけり。二人はあきれて詞もなく、まんこが玉をとられし心地、築地をにらんで立たる所に、貞光末武綱公時保昌を先として、我もくと駈付け、伊賀の介は討つたるか、何とく問はれて、夫婦は詞なく、討つ事は扱置き、やすくと奪はれ結局我らが討たれさうなといひければ、五人一度に、ハアウ大事の召人奪はれ敵に三步の強み

付く、いふてかへらずくやむが損、時節を待て何かせん、一寸ものばされず、築地を越へてや入べきと、門をにらみ、築地をたき、五人怒りの物狂ひ、いかれる虎、怒れる獅子、きやつを二度どり返さでは全く爰は出たらしと、南門の真砂の上、一度にどうとすはりしは大地もゆるぐ計りなり。中にも公時つ、立ち上り、口計りくやんでは百日いふても同じ事、此門一つ蹴やぶるは薄紙さくよりやすい事、公時が押やぶり、手ついでに左大將どもにひつ立來らんと、金剛力士の勢にて、母のゆづりの力こぶ、拳をかため、門柱をいやくと押かくる。四人の人々すがり付き、先待て公時、此門一つ蹴やぶるは面々もがてんたり、はやまつて左大將すは是迄と見るならば、三種の神器に火をかけ、内侍所老しの御箱失せ給へば、此日本は魔界となる、上一人の御誤下萬民の歎の種、かりそめならぬ一大事、まづめて事をうかへと、いへども公時がてんせず、又例の御異見か、今度はいかなる御異見でも持病の虫が背筋へ廻り、針でも灸でも堪忍ならぬ、はなせく。いやはなさぬと、公時が押す機、四人かどいむる其響、門内に人音して海老鏡はづし貫の木引き扉さつとよし開き、出るを見れば伊賀之介、サア時分よし何れも御入候へ、是又五郎武士の契約金石より猶かたし、伊賀之介が一言に偽なきを見給へと、いひ捨て刀に手をかけ、すでに自害と見へければ、渡邊押といめ、神妙の御働、此度の計略は主君頼光某に相談に



て、又五郎と御ぶんに申し合めし所、謀の手合味方の勝利、聖運開かるべき時節到来、珍重く、さりながら何をふそくの志がいやらん、心底聞かんといひければ、伊賀之介涙をばら／＼と流し、何故とは情なや、左大將に頼まれ藤壺を害し、今又左大將をあざむき、門をひらき敵を引込むかへり忠、かく迄心さだまらぬ、娑婆に益なき伊賀之介、情には御介錯願入ると計りにて、ふりはなさんとする所を、人々取つき、愚かなり、十惡五逆の左大將を二度三度僞て、十善の君を御代に立て、天下太平の功有る伊賀之介、娑婆に益なき武士と笑ふ者こそ娑婆ふたげ、それ連も而との心すまう思はずば、死時まだはやい、討死する程、働いて頼光の評判受、死でよくばそこで死ぬ、何と／＼伊賀之介。アツアそうじやあやまつた、身の上は後日の沙汰、天下の大事は鼻のさき、時分はよきぞはや入れと、伊賀之介が先陣にて、清瀧夫婦四天王門外門内手分をして、おめき叫んで攻めかくる。四方八町の大内に數千こもりし賊黨ども、只八人に切立られ、爰におい込み、かしこに切り伏せ、或は落失せ逃げ失せて、残りすくなに成てけり。左大將かなはじと築地に上り、すさまを見て落行かん／＼とをりをうかひかけ廻る。又五郎清瀧さしへたて、兩の足くびまつかもと取り、引あろさんと引け共／＼大力の、鞆をけるより猶やすく、はつた／＼と蹴落され、弓手馬手へぞまろびける。いつのまにかは細保昌築地にあがり、左右にぬつと兩手を

摺んでゑいやつとはぬかへせば、下にて公時得たりやあふと取てをさへ、胴ぼぬふまへ首ふつ／＼と引ぬいて、朝敵滅亡御代萬歳と、よば／＼る聲、二たび遷幸ましまして、治る國の名將の民をあはれむ源氏の元祖、文にさかへ武にさかへ、上に道有り下禮あり、ありがたき、君が代の、御子孫繁昌、國繁昌五穀豊かの時にあふ、ながれの末こそ樂しけれ。

## 弘徽殿鶉羽産家

終



## 娥歌加留多

夫婦は大倫也。關雎は樂んで淫せずといへり。敷島の我御神天の浮橋に立ち、天の御柱をめぐり、とび來る鶴鶴の鳥にならひしむせの道、人にをしへて人の種八百萬代もつきしなき、人王八十代高倉の院の御宇、太政大臣清盛公の嫡男小松の内大臣平の朝臣重盛公の賢徳、四海にかへやけり。武藝文學に長じ給へば、源平の武士重く敬まひ申うへ、御妹の姫君中宮の宣旨をかうふり、女御に立せ給ひ、安徳天皇の國母として建禮門院と號し奉る。公家のもてなし世に越へ、家門さか行くときは木の、蔭になびくや都人、賢人と、あふぎ奉る。頃は養和元年九月九日中宮の御方より、御祝儀の御使となせの局が折にあふ、菊のきせわたをきわたに、白髪まじりの下髪も、千代をふかめて匂ひけり。重盛公座をたつて、御口上承はらんと給へば、先今日のおめでたさ、千歳の秋を重ねぎく、さかりに付て、山々の紅葉もさぞと御覽せられ度き思召さふらへば、毎年の如く北山の茸狩御催あれか

しどの御使也、とぞ述べにける。重盛公開給ひ、是より申上んと存せし所、來る十三夜名残の月を北山にて御覽有り、二三日も御逗留有る様はからひ申上られよと、御返答有ければ、局悦び、御嬉しやく、中宮様にもさぞ御機嫌、あそばつきくの若い女中達なま年よりし我々迄、春の花秋のもみぢ一年に二たびのまれのみゆきの事なれば、此御遊を待かねしに、はやくも返事申す爲め暇申し參らす、木々の錦、野邊の虫、打續き日和はよし、月も一入御きげんと、下が下迄のお嬉しさ、お侍衆其日は何れも御苦勞すもじ致せしと、挨拶辯舌ながる、瀧の、となせは御所にぞ歸らる。重盛公主馬の判官盛久、越中の二兵衛盛次を召され、秋に一度のたけがりの御遊、路次の警固、山の掃除、御假屋に至る迄、例年の如く随分疎略なき様にまかなふべし、扱中宮は花鳥に御心をよせ給へば、假屋の前に庭籠をくませ、四季の小鳥の品々を放ちて御覽に入るべきぞ、將又此頃門脇殿より賜はりし山雀、輪をくわり水を汲み、人の手にまたがひ様々の藝有よし、重盛是を愛せんもあどなげなし、中宮の御慰に參らせん、いかに齋藤瀧口、使者の用意仕れ、委細は女中迄披露の文を認め、猶口上も有べしと、書院の一間に入り給ふ。瀧口はきのふけふ前髪とつて十九歳、お小姓立の使者男、えもんつくろふ出立の、きりやう見に來る姫ぐるみ、山がらの御使、御所をさしてぞあがりける。上臈御所の控にて、男とあれば侍より中間仕



丁に至る迄、六十以後の隠居頃、きんかあたまにてる月の、秋の御遊の日も極り、女中仲間はさばくと、山のもみぢは付けたりに、若い男を見る樂み、早ふ日も暮れ明日になれ、其あくる日にはやなれど、宮づかへさへ手につかず。中にも横笛かるもどて二人は美女の名をとりて、心利發に情有りきりようも人にこへければ、中宮のお氣に入り、傍聴つきもむつまじく、今日横笛は奏者番、ひろびさしに詰めければ、非番女中ばら〜とあつまり、是れ横笛殿、茸狩の御遊が十二日に極つた、腹一ぱい男見よふぞや有まいか、なんと御供は誰である、平家の御一門はどなた〜がお出で有ふ、あはれかしよい男すつても供なざるれば、どつといふた祭まやが、もし能登殿の様なすさまじい、女子といは七八間、取てなげそふな衆が見へたらば、どふもあかしう有るまいといへば、かるも聞もあへず、いや〜がいはいはれぬ、盲千人めあき千人、兎角縁次第、平家一番の若衆と云ふ經正殿もこまきやくれて、十四の春から聲がはり、せ〜こましようてこちはいや、敦盛様はぼつとりと抱いて寝たい風なれど、はやあく様が有からはとどがひの取かなはぬうき世、越中の二郎兵衛盛次殿の弟、左京の進義次は見す〜情も有りそふに、いとらしい男なれど、かたい兄このけむく有り、吟味づよふて是もかなはぬ浮世也、兎角天道のあてがひ次第と云ければ、八雲尾花詞をそろへ、天道任せにして置いて、悪七兵衛景清上總の五郎兵衛

と云様なつはもの取あつたら面白ふも有まい、主馬の判官盛久は去年北山の茸狩に、一曲一かなでは出来たれ共、ぬらりとしてはりが無い、上にも下にもすく風俗、男の上々きつすいと、齋藤瀧口頼方、なふ横笛殿そふじやないかと口むしられ、エ、皆物ずきが至らぬの、瀧口計が男か、尤きれいな生れ付き悪いとは云れぬが、あの風は必ずきりやう自慢してこんじうが悪いもの、此横笛は身ふした〜いやじや〜と有ければ、残りの女中〜どうに、こりやにくい〜、かるもの様に打明けて、左京の進義次はいとらしい男じやといへば、一そふ手がつかぬ、此横笛は身ふした〜、いやまや〜が猶いやじや、それ程いやな瀧口を、いつぞや小松様のおまりの時、葛袴のほころびぬふてやるとて、袴のまぢをいたいきやつたを皆見付た、まだそれ計りか瀧口の口のとやつた汗手のとひをむまそふにぬぶりやつた、それでも身ふした〜ていやか、すりめ、ぬかせ〜、いざ此くはたいに帯といて裸にせん。おがむ〜ゆるしてたもこそぐれつめれと高笑ひ、女中なかまはかりそめのまやれも男の噂なり。斯る所に瀧口は山がらの籠持せ、小松殿よりの御使者齋藤瀧口、お取次の女中頼みませんと案内す。そりや彼の君よと氣を上げて、今日の奏者は横笛殿、仕合なあやかりもの、横笛迄は及びがない、せめて尺八になつてあの瀧口で吹かれたい、お茶でももつていきたいと、をしあひ〜しあひのぞきあひ、あの愛敬あるほうさき〜



ほつかりと食ひつきたい、むつと抱かれて定められて定めころしてもらひたいと、身もだへそゝる折から局の聲にて、女中衆召まする、さつきにからち手がなる、おそばに一人もあらず、かげばいりせまいぞと、わめかれて、なむ三寶雷婆がちこつてきた、臍つかまれなどちりく、昔々奥にぞ入りたまふ。横笛は日比の思ひ胸もだくく聲ふるひ、御使者是へと立出る。瀧口もつる戀、顔を見合せうつかりと、思ひと戀の山がらも、中にうかる、へうたんの、氣もぬけがらと成りけるが、先御口上申あげんと手をつきて、主人小松のちと申上らる、は、北山の御遊彌明後日、早天より御車を出さるべし、此方は曉迄とほんと思もあかしては、ぬられぬまゝに夢にも見ず、晝はひるとてやるせなく、御姿が目さきへぶらりくぶらついで、御奉公も身につかず、夕ぐれがたの戀しと、武士の涙は一代に一度こぼすかこぼさぬもの、ほんに男のあるとか、朝から晩迄此様にまぐくまぐくと泣いてく泣きつめる、誰が泣かずと思召す、ヤハア何を申やら、先以此山雀は人の手を振る手さきにつき、輪をくぐり水をくみ、様々の藝鳥、それ故都の手ふりと名付け候、中宮様花鳥に御心をよせらるゝと承り、小松の内府献上いたされ候、いで御奏者の御馳走に一曲と手をあげてひらり、くるり、ひらくくく、くるくく、はつとうつたる中がへり、ま一つ返れとんぼう返り、一二のわぬけ三の輪くぐり、四も五もくはぬ戀の

さどりのわをぬけて、かはいややさし、情つるべのつんくつるべのまどん志とん、まどん志とんつんくつるべの、水をくむこそまほらしや、是に付き瀧口が一首つらぬ候、山がらも、戀志たふ袖になつきくる、人よ人めのわをくれかし、お奏者の御返歌聞かま欲しとほのめかす。横笛は魂もぬけて心もどきくと、山がらも目につかず御口上も耳にとまらず、嬉し耻づかし氣はもやつく、ぬち寄りすり寄り身をもがき、おもしろき御歌、返歌はかふるもごさんまよう、山がらや、山のもみぢばこがれなば、谷のくるみと我もまづまん、此御返歌は明後日もみぢの御遊覽の北山の谷かげにて、忍びあはんとのお詞か、ハヲもみぢより茸狩にそもじ様と只二人、こちや谷の松茸をど抱きつけば、ぞつとして、かんまへてそふじやでや。こつちはたがへぬ。忝いと、抱きつくやらすひ付くやら、山がらかごを打こかし餌も水も打明て、わもちりくくづれたり。南無三寶とあはてふためきかごの戸を開け、両手を入れ、こゝをなをせばあちらがはなれ、さか様にしつ横にしつ、鳥はばたつく氣はむまやつく、エ、まんきやとあたまをかく、其ひまに鳥は籠を飛んで出て庭の梢御殿の軒、枝うつりして飛めぐる。二人は狂氣の如くにて、あれくそこへそれそこへと、飛あがり追廻し、来いくくくと手を振れば、さすがなれたる曲鳥の、ちうにて羽がやしニツ三ツくるりくと打返し、行方知らず飛去りしは、さても是非なき



次第也。瀧口も詮方なく、横笛は猶途方に暮れ、あきれはて、立たる所に、中宮の侍所加賀の郡司師高は、どなせの局の弟にて、御所中に威を震ひ、五常をまらぬ我慢者、聞くどひとしくやり戸蹴はなし駈出、瀧口には一言の挨拶なく、横笛の小がひな取つきのけ、はつたどにらんで、なんと此御所を茶屋あげ屋と思ふか、たどへ男御所にても使者奏者には作法あり、上から下迄女子原、殊に此師高が、仕置をも守らず、ひろうの振廻、不屈とも慮外とも名を付ていひ様なし、剩へ大事の鳥を取にがし、ようのめくど生きてめて、人中へつらが出さるゝか、重々の罪科侍なれば仕様あれ共、女なれば死罪をゆるして籠舎也、中間共横笛に細かけよどぬめつくる。瀧口すゝみ出、いや是郡司殿、今日の次第横笛いさゝか存せられず、某一人の不調法、切腹どかくぞ致せし所に、何とやらん見苦しき耳こすり、瀧口も耳あればよつばどあつて聞にくし、侍なれば仕様ありとは、サア其仕様承らん、瀧口は侍どふなさるゝときめつくる。いやいなとを耳にかけめさる、某が支配する此御所を、侍が斯様の不義不屈有るなれば踏み付てくゝしあげ、まばり首はねて獄門にかくれども、お手前は重盛公の御内衆、をどつてもはねても腰元衆と狂はふが、山がらをむしつて焼鳥にしてくらはふが、此方にかまはぬと、腹が切りたか切めされ、ヤア何とてをそなはる、横笛に細かけて牢屋へ引けとよばゝりける。横笛みだけ高に成り、是御所の

仕置をする人が、みづからを始め女中衆へ状文つけぬはひとりもない、此言譯から聞かんといへば、瀧口刀に手をかけ、小松殿のお家のならひ外の家も吟味する、ふみ付てくゝしあげまばり首打つ法ならば汝からふみ付んとどびかゝれば、どびまさり、よつて見よどぎしみ合ひ、御所中上下騒ぐ聲、中宮かくと聞こし召し、表近く御出有り、あれ静めよとの給へば、女中聲々、是宣旨が有る、御せんなるはと制せられ、あつと頭をさげにける。中宮仰有けるは、横笛に不義有とは、それは人のそらごとならん、横笛にかざらず、いづれにても不義あれば吟味の役をかうふりし師高が替越度、何しにあやまり有べきぞ、瀧口が山がらをにがせしも、餌をかひ水をかふたびにかどの戸をあけまいものでもなし、籠鳥の雲を戀ひ、羽あればいつかたへも飛行くはふしぎでなし、殊に其山がらは奥の庭へ來りしを、手づから捕へてふせごの中に入れ置いたり、北山のもてなしに庭籠の用意有りと聞く、其山がらも諸鳥の中へひとつに入れて見せ参らせんと、お返事よろしく申すべし、横笛も瀧口も必ず／＼氣にかけな、腹切とやらいふとは聞くもうるさしおそろしや、九こんでも取り、早く機嫌よふしてはやく／＼歸れど、慈悲深き御詞、二人は身にまむ有難さ、忝しと頭をさげ、涙をながす計也。師高は漣面つくり、肘をはつたる無念顔、中宮御覽じ、やい師高、よしあしに付け今日の噂かたふ致すなど下々に乾といひ渡せ、其上にも沙汰あらば其方があや



まりど、入御ならせ給ひける。人の歎きの山がらを、打かへしたる上々の、御なさげこそ  
たいらね。

小鳥盡し

はや日限も、北山の茸がりの御遊とて、紅葉を嘗きて御假屋、御亭主方には小松殿、小松  
のかげに庭籠をくみ、敷の小鳥をこめらる。中宮立出御覽あれば、百千の鳥の籠なれて、  
見知らぬ袖にもなつくらん、遊ぶつばさに誘はれて、罪も消つゝむらさきの雲のうてな  
のりの花、ほう法華經よむ鶯の、初音和々國なれば、心も花の都鳥、神の恵の深き世に大  
るり小るりつばくらめ袖にもつれてなくこそは、ひあやひよ鳥四十雀、色も匂ひもふくみ  
聲、うづら衣のつまごとの、ひらきに通ふうその聲、野さはの水に影見へて、あがるもく  
だる夕雲雀、愛事聞かぬみづくや、もずの志もくを手に取れば、ゆらくの玉のあな鳥、  
胸のひたきに立つけふり、むらゝすいめ、てりまして、輕き羽風の山がら小がら五十が  
ら、まだ十二がら、ゑながさしいにまつむしり、菊いたしきが菊のませがきそなたへくる  
りくるり、くれはのとりくに聲のあやなすれんぞやくや、思ふ中には名もつらき、人目  
のせきれい、うちとけていつかはめぐりあふむの鳥、忍び大むくこよひこむくど人につぐ  
みのせせうくし、鳥にいふな、かし鳥まらせまらしてまぎのはねがき、とまよりこら

口まめ鳥に、ほつとあいたよほつとさすのひと、一こゑに友よぶこ鳥、かほよ鳥、ア、  
三味線のことどりや、山鳥の尾のまだり尾の、ながき千歳の友鶴を、はなちてやるはをじ  
鳥と、おぼしめせども人の爲め、瀧口と横笛がうき名をつゝむ御情、後生菩提にかこつけ  
て鳥の色音を樂むも、よしなやあなじ佛性と、籠の口のみ打開き、昔一同に放なされるれば、  
翼をかはし羽をのして、百よろこびの聲をあげ、あなたこなたへかけり行く、慈悲心ふかき  
小松殿一しほ感じ入り給ひ、是ぞ誠の放生會、紅葉は明日御覽あれど、夕暮はやきあく山  
の、鹿の妻こふよるの聲、聞こしめさるゝ爲なれば、よひより御かうし成べしと、假屋に  
入らせ給ひけり。研え行く月も奥山のまげみに暗く更くる夜に、越中の二郎兵衛が弟左京  
の進義次は、かるもと約束の時こそ來れとほふかぶり、お庭のまがきにたゝざんだり。横  
笛も瀧口に今宵逢んといひかはし、友傍輩の寝入りばな、そつとあき出で衣かつぎ、籠の  
かげのほうかぶり、まねけば男も招き寄り、互にうなづくおとがひに、物をいはせてそれ  
か、かれかど名も問はず、背中向けては顔見へず、氣のせくまゝにひつたりとおはるゝ腰  
をうしろ手に、おつと引きしめおひまめて、おもき戀路をかるゝとおふて行こそあやな  
けれ。かるもはもとより左京の進に契約をたがへじと、はや月かげも夜半過ぎ、相圖の時と  
衣引かつぎ、左京や來ると待居たり。瀧口は猶横笛と直に契りし北山のあふせは今宵とは



うかぶり、御庭に忍び入る。かるもはそれぞと招き寄せ、兩方待も待るゝも問ふに及ず引寄せて、背中にとんとおふ戀の、我より外に有ぞとは、思ひがけなきがけ道や、そこつ山路踏み分けて、谷の小川の老よろゝ水、瀧口はながれにつき、左京の進は川上へと、のぼる道にてはたと逢ふ。兩方よけつよけられつ、忍ぶとすれど朝夕につきそふ傍輩もかげ見へて、瀧口か。ムウ左京か、あぢぢやゝの。そつちもあぢぢやの、此方もかくの仕合、互に隠密さたなしと、行ちがふて別れしが、二人の女中ふり返り、どふやら名がちがふたが横笛殿ぢやないかいの。かるも殿か。ワアウ男が違ふたは。ヤアウ男がちがへば女ぼもちがふとあろし置き、衣引のけほうかぶり取て、四人一度に横手をうち、せいでの上の皆さう、餓鬼の目に水見へずとは此事、いかに念頃中とてもまだしもせなかにあふて珍重、前にだいたらいものか、兩方無疵に返辨くゝと、取かはせば二人の君、サア今こそ前にだかれふと、老とゝもたれて身をよせて、松がね枕こけむしろ、ながき契りと成にけり。斯る所に上の峯より人大勢月夜に挑灯棒つきちらし、山廻りかど見る所に、蝶の丸の紋付は加賀の郡司師高、サアきやつはむつかし一期の浮沈、女中達は谷ごしにみとも假屋へ歸られるか。チ、くゝ是も戀故劍のはをも渡らんもの、すいぶん首尾よく遊ばせと、かひくゝ敷も手を引あひ、谷をつたふて歸らるゝ。瀧口きやつに手をとらせんと、横笛のきぬ引かつぎ女

のまねして待つ所に、郡司山をかり廻し、かるも横笛見へざるはそゝのかす男覺へ有りど、あめきさげんで、あれゝ人影、そののがすなとをつとり巻き、ヤア不義者は左京の進、からめとれとひしめきける。義次わざと迷惑そふに、近頃なんぎの御咎め、よるの紅葉を見んため只今是へ参りしに、不義とはさらゝ覺へなしと、いはせもはてず、いやぬかすな、あのきぬかづきはかるもの前、某數年心をかけ我心に老たがは、後々中宮に申上げ、我北の方にそなへんと、たちぬにつけてくどけ共、をのれが邪魔とはとつくより知つたるぞ、御法度亂だす不届者、我ためには女敵同前、女めも同罪と、とびかゝつてきぬひつたれば、齋藤瀧口太刀ひねくつてぬめ付くる。はつと計りにあきれしが、ムウウぬが是に有るからは横笛も居るはづ、けとつて早くもかくせしな、よしゝ後日の詮義、みな來いゝと逃歸る。義次瀧口弓手馬手に立ふさがり、後日は後日今は今、なんで侍のかづきし衣をひつはぎ歸るとてかへそふか、中宮の御所に威をふるひ、女中をおどした其格とははらりとちがふべし、此埒あけずにかへつて見よ、兩すぬ切てきりすへんと、兩方よりつめかくれば、是れゝ不義と申は横笛とかるもが事、其役なればすみゝ迄詮議せねばならぬ事、お氣にさはらば御免あれ、是手を合するとうぞぶるふ。瀧口からゝと笑ひ、其役人がたつた今かるもに年月心をかけ、たちぬに付てくどくといふ、不義ならずや、御所にて汝がぬかした通り、



ふみつけてくしあげ、まはり首打つ不義の科、それ義次細かけよ、太刀とりは此瀧口、下人原からまふてとれ、のがすなやつと呼ばつたる、聲におどされ、下人共棒提灯もなげちらし、谷底にころび落ち、命からく逃げ失せけり。ふるひく師高大をんあげ、よいくうぬらにはまけたり共、此代りには横笛かゝるも二人の女になんとあたる待て見よと、云捨て、にげてゆく。兩人とつと打笑ひ、逃足はやきお侍、まだをつかけるまねをして、おどしてあそべよいなぐさみと、木の根をたきき聲をかけ、手ごろのいしをおつとりく、はらくはらりくとうちかけく、谷の川水さつくく、さらくさつと踏みたて蹴たて踏みちらし、もみぢ踏み分け鳴く鹿の、聲も互ひの身の上と、連れて假屋に歸りけり。

## 第二

佛種は縁より生ずとかや。瀧口が父齋藤左衛門の尉勝頼は、平家譜第の御奉公、ちやう七十の頭の霜、そりて返らぬ梓弓刀もやめて樂坊主、隠居領とて下さる、十人扶持も寺参りに、月日を送る常精進、名を西頼と申せしが、藍ずりの狩衣烏帽子取出て、一子瀧口を招き、

是は一とせ小松殿大臣の大變有りし時、着して御配膳仕れとて拜領したる召あろし、汝に是をゆづらんが着して彌我家をつぐべきか、此頃は事か勤方の善悪を聞ず、御前跡の御覺いかに有るぞとひ給へば、瀧口謹で、さん候、不肖の身に候へども、親に御恩の有がたく、御前ていの思召し、諸朋輩にすぐれ候故、心まめしく相勤め、殊に中宮の御所様より御目をかけられ、御所のお使は皆某が承り、去る北山の御遊にも、こゝへも瀧口、かしこへも瀧口と召出され、女中方のもてはやし、諸人の思ひ入れ、主君の御威光親の光りを以て、立身近日に候と、いひもはたさず、西頼はつたとにらんで、ヤアだまれく聞たふない、某年よつて御扶持は下さる、なんにも浮世に役はなく、寝ても忘れぬは未來の事より我子の上、風の吹くにも心を付け、よしあしの噂を聞くものを、おのれが行跡知らぬと思ふ愚かやな、横笛と云ふ女中にほだされ、御所にて山がらを取にかしはかをつくし、加賀の郡司師高に悪口せられ、すでに罪科は極りしを、中宮様御慈悲にて穩密に治まりし事、其日に我は聞きたるが、北山の御遊にも横笛をそのかしようかれ廻り、師高に見付られ、剩へそのれが非を持たながら師高を追ちらし、狼藉は何とぞぞ、隠居の我さへ知たれば諸人が知らで有るべきか、諸人の知るもの小松殿の御耳に立で有るべきか、此君は當代の賢人、色には出し給はぬども、底意に見限りまします事、たどへば草木の根をやいて土にうへし



が如く、自然に枝葉枯れ老ぼみ、いつ花の咲くともなく、身のなり果は家の滅亡、エ、淺  
 ましや口惜や、をのれもよつく知りつらん、越中の二郎兵衛が弟左京の進義次、かるもど  
 やらんに密通し、たび重なつて此かるも懐妊し、悪名かくれなく、義次は兄二郎兵衛病氣分  
 ちして追ひこめ置くと傳へ聞く、其如くをのれを追込んでも勘當しても、一子なれば家の  
 断絶、平家重代の我家ををのれ故にたやさふか、今日より某遠俗して御奉公相勤め、もと  
 の左兵衛の尉勝頼、其爲の烏帽子狩衣と、褌衫脱ぎ捨て、是こらしめのおどしなど、思ふ  
 な、七年以來の常精進たい今落る淺ましやと、兩眼に涙を浮べ、エ是非もなや、主君の御  
 影にて隠居の身を安樂に、一筋にぼだいに入り、先立し母め一蓮托生と願ひしに、をのれ  
 は父母の地獄の手引するぞやと、せき上げく涙の下、精進落る是見よと、小四方引寄せ、  
 昆布にそふたるのしひつつかみ口に入るれば、瀧口あはてすがり付き、勿躰なや情なや、  
 向後色の道ふつと存じ切り、耻を志のぎ御奉公仕らん、まつびら御免と泣ければ、をしの  
 けてつくと立ち、ヲ、親はともかくも世間は何と云分せん、越中の二郎兵衛が手本を出し  
 て渡されたりと、烏帽子狩衣肩に打かけ、太刀ひつさげ、ヤア下人ども供の仕度せよ、齋  
 藤左衛門尉勝頼が二たび小松殿へ出仕なりと云捨て、奥をさしてぞ入給ふ。瀧口も前後に迷  
 ひ、涙にかきくれ居たりしが、膝を打て、ア、そふやよしなや、父の恨は至極の道理、成

りんじ事をば説かず、遂げんじ事をば諫めず、すでに往事をどがめず、身のあやまりは悔ん  
 でさらに甲斐もなし、君賢人にてましませば勤によつて思召もなをさるべし、世間の耻辱  
 を雪ぐべし、兎にも角にも悲しきは、父の菩提妨げして母上迄永き世を惡道に沈めん事、  
 八逆五逆十惡の無量の罪にもまさるべし、遠く昔をどふまでなし、まぢかき文覺西行法師  
 戀路を種の發心にて、六親九族をわんだうせり、よしやまぼろしの境界、ほまれもそしり  
 も夢のたはふれ、恨も情も水鏡、さつてとよまるかげもなし、此戀我身の善智識、さぞ横  
 笛が恨の歎き、煩惱菩提の回向によつて、皆極樂の縁たるべし、流轉三界中恩愛不能断、  
 棄恩入無爲眞實報恩者と、自身の受戒さしぞへ抜いてもとよりふつと切て捨て、父がぬ  
 き置く褌衫の衣を取てをしいたき、思へば父は我師也、師資相承の此三衣、世に有る父  
 世になき母、妻も我身も隔なく、期する所は九品のうてな、南無阿彌陀佛と、三界の家を  
 出るぞあはれなる。たまさかに、あふ坂山のさぬかづら、人は知らじと通ひしも、くるし  
 や女のならひとて、はや懐妊のおもき身と、うき名御所の外迄隠れなく、御奉公も憚りと、  
 達て御いとまを願ひ給へ共、郡司師高こだわつて埒明けず、ひた屋籠りの局ずみ、傍輩達  
 の見廻迄、かたく禁制との掟、愛きをとぶらふ人もなく、召つかふはした二三人、泣いて  
 ふすぬのかるもの床、涙にくる、計也。加賀の郡司師高雜人に乗物かかせ、局の中へづか



つかどふん込み、是れかるも、奉公の身をもつて出入きびしき御門を忍び、築地をこへかき  
 をこへ放埒の老かた、剩へはてつはらかべに茶つぼとやら、今に成てお暇下されとや、そ  
 ふはならぬ、左京の進義次は兄越中の二郎兵衛が追ひこんで置くだん定てよつく聞きつら  
 ん、此道計りは相手づく、其方とても只置れず、殊に奉公人なればきつと罪にをこなふ大法  
 あり、され共此師高が執心かけしおぬしが事、今とてもにくふない、サア今日から魂を入  
 れかへ、年月だんく状文にもくどく通り、なびくといふたゞ一言聞くといひとしく直ぐに  
 屋敷へ連れ歸り、師高が北の御方、よめ入の乗物、又いやと云が最後罪科に行なふ籠ごし、  
 あれ乗物は一ちやう、サア籠ごしになりとも、よめりのこしになるとも、あけすけの返事  
 またがよい、むごふいふのもいとしさ故と、目元にあいをもたせしは、見るもいぶせくつ  
 らにくし。かるもはわざとにつこと笑ひ、科深き自らを御にくしみもなく北の方になされ  
 んどは有がたや忝や、あつと申て夫婦になりたふ候へ共、左京の進義次よも堪忍致されま  
 じ、其時はいかゞ遊ばすぞ。ア、氣遣ない事、左京めは勅説と云ひなし討て捨るになんの  
 とがあるものぞ。できたゞ、して此胎内の子はちろとふと思ふてか悦ばせふと思召すか、  
 いや／＼あるすは母にも氣遣有り、請取りにくいみやげなれど、そもじがいとしい、やす  
 やすと平産させ、某が物領の若君ともり立る。さればその事、此子は左京の進義次の子、

ちろづいて親の敵と師高殿をなをいけて置まいが、此御思案が聞きたいといへば、其時  
 は其がきめ、ひねり殺して捨るに猶氣遣のないと、いはせもはてず膝立なをし、扱は夫  
 を殺され子を殺されし師高殿とそふて居そふな此かるもと見付けたか、いきめくらの死者  
 生、男も女も戀と云ふもの命をかばひ身をかばふてなるものか、自がお暇を願ひしも身を  
 のがるゝ爲でもなく、名をつゝむ爲でもなし、義次殿兄御の不興と聞きし故、火の中へも  
 尋入り共に愛目を見たいとひたい心ざし、なんじや心にしたかはし師高が北の方とはどれ  
 どの顔で、能々佛神三寶にも捨てはてられし女があらば知らぬ事、此かるもなどへは慮外  
 ないひ分、君が一日の情に妾が百年の命をしようない、心任せに切さいなめ、去乍ら是さも  
 しい心からは此あだを義次殿へあたへて、救説宣言と偽り、いかなる罪にか沈めんと、悲  
 しいは是一ツ、エ、あはれ知らず、邪見者、世をいき通しと思ふかや、一たびは死ぬる身  
 の、後世も報ひもないと思ふに情なやと、恨みつ口説いつ伏しまるび、聲を上てぞなげかる  
 る。師高したゝか耻しめられ、大きにいかつて、彌、罪科極つたり、いかに岩村源五、か  
 ねていひしは合點か、舟岡山へひつたてよ。承るといふより早く、小がひな取り、たぶさを  
 つかんでねぢふせく、乗物に打込んだり。下女共歎き取付くを、取てつきのけ、ふみち  
 らし、世の憂き淵瀬こがれ行く舟岡山へと急ぎける。けに紅はそむるしたがつて色をまし、



道は學ぶによつて智をみかき、心も清き瀧口入道、法名を西俊と改め、嵯峨の奥往生院に引籠り、しばらく世塵をのがれしが、こゝも都に近ければ、うきふし聞くもほだしの種、高野山へと思ひ立ち、故郷のなごり父の後生母の菩提、法界順逆血縁と、洛外の三昧をよなくめぐる道心の、回向につれて知る知らぬ、ともに導く蓮臺野、舟岡山に着けるが、亡が數そふ高ぞとは、石塔五輪松のまるし、たが名を殘すかたみぞや、こゝに消ゆれば向ふには今もえそむる無常のけぶり、昨日後れし其人も今日は又明日の人にさき立つ身ぞぞ成りにける。ハア思へば嬉しくもかゝる姿となりしよと、おもふも佛の御誓ひ、攝取不捨と鉦打ち鳴らし、南無阿彌陀、佛願以此功德平等施、一切同發菩提心と、回向をなすこそ殊勝なれ。斯る所に岩村源五乗物さきにあつ立てさせ、此處よ彼處と墓原見廻し、一木の松の下蔭、これ屈竟の所、こゝへとあるさせける。瀧口それとも思ひよらず、ヤア是も死人ぞや、時日もきらはず我れさきと急ぐ冥途の旅、我等が先はらひの宿わり故、追付け誰も追ひつく身と、念佛申して吊ひける。武士ども乗物より手を取て引出すを見れば、やあ、死人にはあらずやんごとなき上臈也。いかさま仔細有るらんと、卵塔のかけに身をひそめ見る所に、岩村源五大音上げ、如何にかるも、サア只今が最後首が落てはくやんでも埒明ず、主人師高公は其ま、討てどの御説なれども、いかにしても殘念、其身計りか胎内

の子に日のめも見せず、ともに殺すは不便とは思はずか、命有てから義次には逢ふ事ならず、未來は猶見へぬ事、師高公の北の御方となれば、我々迄も主人とあをき奉る、一生の大事の返事承らんと云ければ、推參也下郎め、をのれが主人に返答するが口惜しきに、なんの心變らふぞ、よしない最後に腹立させ、未來の妨げせんよりも、はや首討てと有ければ、エ、志ぶとい女め、こりや、今が最後ぞと、太刀ぬきはなしろにまはる。瀧口入道躍り出で、是お侍暫くと、かるもをかこふて立ぶさがる。源五あどろき、やあすて坊主、いはれぬ命もらひだてか、ならぬと云ければ、いや、左様では候はず、是は洛外の三昧をめぐる夜念佛の修行者、此女中にとがあればこそ御成敗、汝が罪汝をせむ、それはせひなし、去ながら懷妊との仰、されば罪もなき胎内の子を殺さる、御太刀取のむくひいか計りとか思召す、いく月か存せぬども、月々の守り神守り佛有る故、其月にあたる佛神の御怒り、太刀取にあたつて、或は悪病或は劔難にかゝり、忽命をはると、むかはりを待ずと云ふ事、摩耶夫人經に説かれたり、されども武士のならひ、懷妊とてもうたでかなはぬと有り、其時は身にむくはぬ大事の秘文を傳授して、三遍唱へて討つ事也、愚僧此文をまりながら科人はせひもなし、とがもなき太刀取様を見殺しにするは目の前の殺生、お笑止さよとぞ申ける。源五駭き、扱々夢にも存せぬ事、さすが御出家よふこそ、卒爾乍ら



其秘文只今御傳授なるまいか、頼み入ると云ければ、我らも三七日の荒行にて受けさづかりし秘文なれ共、参りかゝつたふせう也、必ず他言遊すな、いでく傳授いたさんと、耳に口よせ小聲に成り、利劍即是彌陀號、一稱正念在菩提、此文を三遍唱へ討ち給へ、御身にけし程も祟りあらば此法師がうんでかやし申べし。いや三遍は扱置き一遍も覺えられず、小六づかしいちんぶんかん、どうぞ短かい覺えやすい文はないかといへば、然らば其刀此方へたべ、やきばに文を唱へかけ、能々加持し申せば其身にとなへ給ふも同前、ヤアそれは珍重、然らばむづかしながら御出家の慈悲、いざ加持を頼み奉ると、抜いたる刀うかくと手に渡すこそあるかなれ。瀧口嬉しき心もいさみ、是太刀取様、ひつきやう秘文もなんにも入ず、此女性をさへ殺さねば、むくひもなければたゞりもなし、利劍そくせみだがう、みだの利劍にて煩惱惡業を切はらひ、善心にかへれとの秘文、愚僧がかぢは此通り、一稱正念在菩提、ア、南無阿彌陀佛と申ける。源五大きに怒つて、扱は刀を奪はん爲の偽な、芋堀坊主め、其刀ぬつくりとあのれに持せて置べきか、いはれぬ人を助んとてうぬが命失なふたはけ、是見よと飛びかゝれば、入道ひらりとひつはづし、ヤなされなく、坊主の手へ入た物俗の身でとらんとは、それこそほんの寺から里、此上臈もこつちのものと、かゝるもをひつ立て奪ひ取り、利劍そくせは此事と、一文字に切りかゝれば、源五を始め雜兵

共、やれ推參なる法師めと、一度にとつかけ寄るを、心得たりと、太刀振つて八方をなぐり立れば、かなはじと、むら／＼くづれ逃げ散つたり。中にも源五は太刀を奪ひかへさんと、大石たうのかげにかくれて待ちかゝる。下人原とつてかへし、法師やらぬと弓手馬手より討つてかゝるを、おひまはし、をひまはされて大勢が石塔にまぐりつけられ、我知らずにをすほどに、さしもの大石源五が上にとつと伏し、うんと計りを最後にて、徹塵になつてぞ失にける。猶も残る奴原をおつたて／＼をつちらし、走りかへつて、是かるも様見知つてか。瀧口殿か。いかにもく御身のうへも我身の上も先づ此所を立のいて、心靜かに承らん、扱源五め、法師のいはれぬ殺生逃がば逃がさんと思ひしに、をしにうたれてまんだよな、いで戒名にれんぞやがうよがうつけ引導してとふらはんと、死骸にむかつて合掌し、ア、悲しきかなや、おもしにをされてひまやげし亡者、さつさばのすしやまされてひらく、それは人の口にくう／＼ぞやく／＼、此亡者のすしは、煮ても焼いてもくはれんぞや、どうよひつまやう禪定門、南無阿彌陀佛と打笑ひ、肩にかるもを引掛け、くびにはせうごひつかけ、ゑてにひつかけ身にひつかけ、曉かけて立つ空の、雲のはやしの名を頼む、紫野ゆき、まめ野ゆき、行く道筋はおほけれど、戀ひより入りし法の道、迷ひままひて後の世に、迷ふべき様なかりけり。



## 第三

風なふして荷葉動くは水底に魚の行くこと決定せり。此理りを以て萬事をあさば、人心何をかくるしまん。されば小松殿人の非を顯はし給はず。今度義次瀧口が噂一向に御沙汰もなく、空しらぬふりにてましませ共、ひいきの人心、瀧口戀意の輩は、左京の進と云ふ浮氣者にそのかさされ、瀧口があつたら身を捨てせし、瀧口が身代の敵は義次也とさ、やけば、義次入魂の人々は、瀧口と云ふ好色ものに伴なひ、浮名をながす左京の進、善悪は友による、瀧口にかゝつて義次が兄の盛次迄面目失ひ、其無念つもりなば、瀧口が父左衛門とはどこぞでいひぶん喧嘩のはしど、御番所御廣間若侍の是れ沙汰、互の耳にもれやすく、齋藤左衛門勝頼、越中の二郎兵衛盛次、傍輩づきもぶしくと、心よからず成りにけり。折節盛次御對面所の當番にて出仕有り、義次ひいきの若侍、我もくと出むかひ、珍しや盛次殿、御舍弟左京殿の御身の上承り、氣の毒千萬、我人若き者はあしき友のつきあひにて、心の外のわけ、悪道へ引入らるゝ、近頃も笑止くと有りければ、いやと左様の事ならず、弟左京めは病氣さんくと斗り、挨拶して坐しける所に、齋藤左衛門勝頼相番

の役なれば、ぼんのくぼ迄烏帽子引込み顔をかくして出仕ある。瀧口ひいきの若侍、是は是は勝頼殿、御子息瀧口は遁世とや、扱と残念善悪は友による、損者三友、益者三友、兎角悪い友と辻風には出合ぬが手柄、さぞ御心底に友達へのうらみ鬱忿推量いたし候と、そばから喧嘩のすを乞ふも、是堪忍のせとしなる。勝頼は盛次に目禮して上座にむす座したりける。盛次聲をかけ、是西頼坊主、老眼故見ちがへしか、越中の二郎兵衛盛次也、座次がちがふた、とうと下座へさがられよといひければ、勝頼打笑ひ、チ、老眼なれ共傍輩の顔は見ちがへず、御邊は左程の事でもなくもの忘れせらるゝか、御分は五位の兵衛の尉、我が位は左衛門の尉、上に座するに何事か有る、扱といかひ物忘れ、少薬のんで養生めされと、空うそふいて居たりける。イヤサさがれといふにさがらずば小がひなつかんで引ずりあらず、あらだてたらば烏帽子すべつて坊主頭振りまはり、耻かくが笑止也、但し手をかけふかど、苦々しくつめよれば、チ、老人とてあなごるか、小がひなとらばとつて見よ、先五位の身がらにて四品を下に付んといはづれの家の有職、サアいへくとた、みかくれば、盛次ちつ共さはがず、彌老耄に極つた、何ぞ四位のかしのとやかましい、勿論御分は四品なれ共隠居して法牒の身、御役御番とも御免ならずや、今日は御邊が世倅瀧口が當番、瀧口は身の放埒不義の悪名をつゝみかねて遁世したるとな、いかさまにも其まゝあつては、



御家中の若侍見るを見まねに友をそこなふは必定なるに、遁世は一段、去ながら、御仕置は上の御心、切腹仰付らるゝか、御成敗なさるゝか、下としてはかられず、遁世すればすむと思ひ、法躰の親が還俗して御番勤むるとはどつく聞たれ共、參會は今日始め其以來御番がへもなく、今日が、瀧口と相番の當日、然れば御邊は瀧口が代り、代番と云もの、かくいふ盛次は五位、瀧口は正六位、終に一度も瀧口が下座に着ぬ此盛次、ひがとあらばいへ聞んど、氣色をふるひりくつをたし、席を打てぞ怒りける。勝頼あざ笑ひ、ム、和殿が言ひ分は座あらそひは脇へなり、世倅瀧口上の御仕置を待はず遁世せさせしを禰するど覺へたり、切腹にても打首にても御意次第、今にても召かへす、なんと遁世すれば御仕置はかなはぬか、御分が弟左京の進、不行跡の浮名をいとひ、病氣分にして追こめ置しとな、チいか様にも左京其まゝ置ならば、御家中の若侍見るを見まねに友をそこなふは必定なれば、追こめ置しは珍重、去りながら、我君慈悲深く何ごとなくめしつかはれば、面の皮厚く武士をたてさせ、諸侍にまじらせんと思ふよな、義を知るものゝ分別、御邊などが合點のいかぬ事、ヤイ猿と云けたものはな、をのれがつらの赤い故に、我顔にちがふをもつて金色の佛の顔を笑ふといやい、コレヤあの蟹と云ふ虫はな、をのれが横に行く故にすぐにあゆむ人間を笑ふといやい、チ、老ぶ柿の青柿があまい熟柿の烏に食はるゝを見て笑ふ

といやい、ヤイ磔か獄門の首を見て、淺ましい足の下に居るといふて笑ふといやい、ヤア扱は御邊獄門のあんばいよつく覺しな。ムウ御分は未だ鹽梅知らぬか、少老らせふか。ヤアみごと我に知らするか。おんでもない事、望みならば今なりともと、互に刀に手をかくれば、一座の諸武士ひいき、兩方へ立分つて、すはや喧嘩のさや持だて、かたづをのんでひそめく所に、中宮の御所よりの御使者と、中門の案内お式臺の小取次、御廊下の申次、御前の取次、段々に披露して、君御對面有るべしと、上段に出で給へば、勝頼も盛次も威儀を改め伺候する。中宮の御使者加賀の郡司師高罷り出で、扱も御所の女中の内横笛は齋藤瀧口、かるもは左京の進義次、思ひく密通の男を持ち、御法度亂れ候うへ、かるも懷妊いたし、御奉公も成りがたく、中宮様以の外御機嫌損じ、急度仕置に行ふべき由仰そむきがたく、舟岡山にて首をはねさせ候所に、何者共走れず太刀取某が家來岩村源五を切殺しかるもをぬすみ落ち失せ候、疑もなく左京がわざ控をかるしめ上をないがしろにする大罪中宮様御にくしみ深く、早速左京の進が頭をはね、御怒りをやすめらるべし、横笛をも追付け御所にて首をうち、かさねて御左右なされんどの御使なりとぞのべにける。小松殿まばらく黙然としておはせしが、珍しき中宮の御仕置古今其例を聞ず、昔の和泉式部は宮づかへの身にて保昌にかよひ、又橘の道貞になれて小式部の内侍を生む、赤染の衛門は中の



關白に契り、紫式部は西の宮の左大臣に密通せしも、皆奉公の時なれ共、其時の女院上東門院いさゝかどがめ給はず、かへつて末代に名を殘せり、をだやかならぬ御政道故も姉のとなせの局と心を合せ、諫言は申上ずやとの給へば、さん候姉も我も再三諫め奉れ共、中宮様はもと君の御妹、武家より出させ給ふ故、諸事武家の御作法也と誠しやかにぞ申ける。いや〜武家の法ともいひがたし、太刀取源五とやらんがかるもを奪ひとられしが武家の法か、惣じて刑罰人に鎧長刀をぬきみにして、きびしくけいごすると咎人のけいご斗りとおもふか、同類ゆかりの狼藉をふせがん爲の要心也、ゆだんどやいはん不心掛とやいはん、やみ〜と奪ひ取られ其身迄切ころされし不覺者、志やつが死骸を磔にし、眷族を罪にふせ、主人の汝にも腹切らする、是を武家の法といふ、武家にもあらず公家にもあらず、律令に背きし掟重盛は心得ず、され共中宮の仰は救誼同前、左京の進は今日中に首を刎ね申べし、いかに盛次、弟義次を召出せ、扱横笛は御所にて害せられんとや、太刀取は誰ぞ、おぼつかなし、又奪ひとられ御所の騒動如何なり、檢使太刀取此方より參らすべしと、罷歸つて申上よ、重盛が御返事は是迄也、扱又誰かは老らす御所の女中に文玉章を通じ、其戀かなはぬ恨みにはにくみ苦しむる侍有りと聞く、是こそ誠の大罪人、汝が仕置を聞入らずば重盛に老らせよ、きつと罪に行ひくれんずやつと、の給ふ聲耳のねにこたへあら肝とられ、

たいはつ〜と斗りうろたへて、袴につまづき疊にすべり、はう〜御所へぞ歸りける。無慘やな義次、兄が内意の召のお使御成敗とは夢にも知らず、長髪ながら裝束あらため參上す。盛次中門に出向ひ、大小これにぬきをき御白洲へ廻れと云ふ。扱は我罪極りしとあつとこたへてにつこと笑ひ大小ぬき、面鉢す〜しく覺悟の躰、あつばれ武士の手本やと見る人涙をながしける。小松殿御覽じ、珍し、左京、中宮の御所より御咎めにて首を刎ねよとの御誼、其身に越度ある上はせひなしと存ずべし、不便や幼少よりそば近く召つかひし者なればせめて切腹させんと思へ共、中宮へは〜かり有り、主従の情には、重盛が手にかけて得さすべし、兄朋輩にも暇乞し、ちくの小庭へは〜廻れとの給ひて、御坐を立て入給へば、義次さしきを見上げ、なふ盛次殿、朋輩達も聞給へ、身のあやまりは宿世の因果、今生において果報の者、主君といひ日本の賢人、小松殿の御手にかゝり、さいごに情の御詞、名僧貴僧の引導も、何此上の有べきと、未來の成佛うたがひなく、現世に心は殘らぬども、とてもならばながらへてもしものどのあらん時御命に代り、御馬の前にて討死せば弓矢とつての面目ならん、心にかゝるは是れ一つ、さらば〜となみだぐみ、ちくの御庭に入りければ、其座にありあふ諸侍、日ごろうとさきもまたしきも思ひ切つたる盛次も、忍びなみだはせきあへず。や、有て盛次勝頼をまりめにかかけ、ア、嬉しやもし左京めに通



世などさせたらば、君の御なさけにもあづからず、引出されて雑人の手にかゝり、坊主首討れなばなんぼう口惜しかるべきに、是れ弓取りの本望、あら嬉しやといふ所に、主馬の判官盛久首桶もつて奥より立出で、これ〱齋藤左衛門、只今左京の進を君御手にかけてられ、首を此桶に入れ上に封をつけられたり、御邊中宮の御所に持参し、ふうをきつてあらため、中宮の御覽に入れ、横笛が首を討ち、すぐに此桶に入れ封を付て歸らるべし、越中の二郎兵衛は檢視を仰付らるゝとの御説、兩人いそぎまいらるべしとありければ、左衛門かしてまつて候と首桶もつて立ち上れば、盛次もつゝと立ち、是左衛門、御邊はあつと申す申すが、見事我弟の首實檢の御使を致し、横笛が首を討つべきか。ヲ、さて又御分は檢使を見事つとむべきか。問ふまでもなし、我は檢視をして見せふ、若しお使の仕様、首の討ち様わるければ、御邊を此盛次がのがさぬが合點か。ヲ、若し又御分檢視の仕様わるければ、此勝頼がのがさぬ合點か。ヲ、言葉をつがふた忘るゝな、サア來い、いけとひぢをばり、兩方にらんでつれ立しは、老木若木のいはほの松風にもみあふ。

中宮歌がるた

夕されやく、時雨まじりの初敷、御庭の栢ちぢばして、菊もうつろふ御つれ〱、中宮の御遊び、双六はさいの目の心に合ぬもねたましく、へんつきはむつかし、貝ちほひは

手もつめたし、いざついまつの歌がるた、いかいあらんどの給へば、げに賑やかなるも慰み、はやはじめんと、若き女中の坐をくみて、手箱のふたをとり〱に、もじに目ざるしのいめけば、横笛はあけくれに夫の戀しき身のつらさ、思ひに沈み思ひくれ、ならふる歌の下の句の、我衣手ももるともに、ぬれつゝ袖のみやつかへ、もるゝ涙ぞ不便なる。中宮あはれと思召せども、それとはさしての給はず、なふ人々歌がるたは常のと、たゞ取つては珍しからず、少と心入有る故にみづからはとらずして、上の句を出すべし、いづれも随分わはせてとれ、其歌の心にて、めん〱其身の願ひ事かなふかかなはぬか、住吉玉津嶋に立願かけ、御く心の心のつひ松ぞや、サア上の句讀むぞ、蟬丸、これや此行も歸るもわかれては、是は横笛に取らせたい、人にとらすなずいぶん目にきかせよ。誠に此下の句は、まらもまらぬもあふ坂のせき、わかれし人に逢ふ歌、此横笛が願ひぞと、心に樂み目をくばる間に、ち腰元の小櫻が、こさかしげに小さし出て、これ〱こゝに合せてとること本意なけれ。サア藤原の實方の朝臣、斯くどだにえやはいふきのさし草。コレさしもまらじな、もゆる思ひはと、合せてとつたる十六夜が、心の願ひはあすかあつてちいとま申し、やひとすへんと存せしに、いぶきもぐさの諸願成就と悦べば、サア伊勢大輔、いにしへの、ならの都の八重ざくら、これはめでたい下の句、次第に花の色をまし、けふ九重に匂ふと



は、未に願ひのかなふ歌、それ横笛。あいと云ふまにまんがちの、をしあひ、せり合、右近  
 が取て、嬉しや此暮のきぬくばりのちまきせを、いくへもく七重八重けふ九重とのねが  
 ひぞや。コレ大<sup>おほな</sup>中<sup>なかつ</sup>臣<sup>み</sup>能<sup>よ</sup>宣<sup>のたま</sup>の朝<sup>あ</sup>臣<sup>そん</sup>、御<sup>み</sup>かきもり衛<sup>ゑ</sup>士<sup>し</sup>のたく火<sup>ひ</sup>のよるはもえて。せめて一首と  
 横笛が、たまくとつたる下の句も、今のうき身にぎんずれば、ひるは消つ、物をこそ、  
 思へば我に思へかや。サア右<sup>うだい</sup>大<sup>だい</sup>將<sup>しやう</sup>道<sup>だう</sup>綱<sup>まづな</sup>の母、なげきつ、ひとりぬる夜のおくるまは。つ  
 けて是も横笛が合せて取し下の句の、いかに久しき物とかは、其身ならずは老る人もよも  
 有まじと涙ぐむ。是こそ前の大<sup>たい</sup>僧<sup>そう</sup>正<sup>せい</sup>行<sup>ぎやう</sup>尊<sup>そん</sup>、もろともにおはれとおもへ山ざくら、此下の句  
 は自らがすぐ合せて取るごととて、花より外に老る人もなしとないひそ、諸共におはれを  
 知るはみづからよ、やよ横笛と、かほばせをつくくと御らん有りければ、うさもわする  
 る添さ、いと涙の種ならし。サアくはやう急いでとれ、柿の本の人丸、あしびきの、  
 山鳥<sup>やまどり</sup>のちのまたりちの。ハア取つてつらいはいつ迄か、ながくし夜をひとりぬせふか。  
 サア謙<sup>けん</sup>徳<sup>とく</sup>公<sup>こう</sup>、あはれともいふべき人はおもほへで、下の句取つたは小<sup>こ</sup>菘<sup>す</sup>か、まだ十三や十  
 四で身のいたづらになるまいぞ。中<sup>なかつ</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>ごん</sup>家<sup>か</sup>持<sup>ぢ</sup>、かさゝぎの渡せるはしにをく霜の。下の  
 句とつたる小<sup>こ</sup>侍<sup>じ</sup>従<sup>じゆう</sup>が、南<sup>なん</sup>無<sup>む</sup>三<sup>さん</sup>寶<sup>ぼう</sup>、毎<sup>まい</sup>夜<sup>や</sup>くのおよづめがぬぶたいに、まろきを見れば情な  
 い、また夜がふけふと打笑ふ。サア崇<sup>しゆう</sup>徳<sup>とく</sup>院<sup>いん</sup>、せをはやみ岩にせかる、たきかはの、たきと

云字もあもしろく、いは岩石にせかれても、われても末にあふ下の句、とつたる者は諸願  
 成就、あれが見へぬかあれくと、横笛に御目をかけし御かほにてをしへ給へば、横笛飛  
 び立つ嬉しさの女中をしのけ及びごし、サア取つた、せかる、たきと横笛と、われても末  
 に逢ふよとて、だいて悦ぶ歌がるた、おぼしめしやる中宮も共に奥にぞ入り給ふ。かゝる  
 所に表<sup>おもて</sup>使<sup>つかひ</sup>の老女あはたしく、加賀の郡司師高急にお直に申上る事ありとて、只今是へ  
 と披露する。ハア局を以てもいはざるは、何事か氣遣し、先づ横笛はまばし是に隠れよと、  
 ふせごに深く忍ばせ、聲ばし立つな音すなど、かどりの御衣を打かけ、御そばに引きよせ  
 て、さあらぬ舂にておはします。程なく師高打蕪れたる舂にて罷り出で、小松殿よりは非  
 もなき御使御座候、左京の進義次かるもと不義の密通にて、かるも懷姙致せし故此御所御  
 暇取候と、重盛公のお耳に立ち、左京之進を御手討になされ、首を中宮の御覽に入れ申せ  
 と、齋藤左衛門勝頼持参仕る、それさへ有るに瀧口をも同罪と思召共、遁世して行方知れ  
 ず、其代りに横笛を討つて参れ、もし中宮より横笛を御渡しなくば瀧口をさがし出して討  
 つべき間、此通を中宮へ申上げ、横笛が首討て参れとて、太刀取は則ち齋藤左衛門、檢使  
 には越中の二郎兵衛盛次、兩人中門に伺候仕る、小松殿には似合さる情もまらぬ御仕置、  
 出家の瀧口を討せんより横笛を引出し、首討せ候べし、御奉公も能つとめし者、かはゆき



事にこそと、さら泣してぞ申ける。中宮はつと御胸塞がり、や、御いらへもましまさず、横笛はふせごの下、聞くより心きえくと、はつ共あつと共聲立られず、袂を口にをし入て、落る涙は村時雨の軒のまつくにあらそへり。中宮御涙にくれながら、兄ながら小松殿は狂氣ばしと給ふか、ぬし有る人に通ふこそ佛もいましめをき給ふ、戀は心の誠のもと、歌の道にも戀の歌を手本として、在原の業平は二條の后に忍びあひ、齋宮の女御に通ひ給ひしも、歌の情にゆるされし、其例あれば公家の仕置とも云ひがたし、和泉式部紫式部赤染衛門思ひくりに忍び男の有しかども、其時の武將頼光頼信などは是を制し給はねば、武家の法ともいひがたし、たどへ如何なる科のあるとも、奉公において露程もあそそかのない横笛、何故に殺させふ、主と頼み下人となるも三世の縁、みづからか中宮の位にかへ身にかへても思ひもよらず、殺させぬと、御手を廻しふせごの下、横笛が手を志かど取り、今日よりみづからは横笛がためには姉と思へ母とも思へ、娘はころさせぬ、妹はころさせぬ、よの様にいひなをし、たすけてくれよ師高と、御涙せきあへさせ給はねば、横笛は有難と、冥加につきる勿躰なと、身の悲みより悲しさの、御手にすがりをしいたきく、もたへなげくぞ道理なる。師高猶も心つよく、太刀取掬使つめかけ候上は、すごとくとは歸り候まじ、横笛が命は中宮様の御おしめ、瀧口をさがし出し其方にて首討れよと申べきかと云

ければ、横笛堪兼ぬ衣をしのけて出んとするを、中宮は御涙の袖を人めのまがきにて、をしまづめく、といめ給へばのびあがり、御耳に口をよせ、御慈悲を無下になす御にくしみはゆるさせ給へ、我命助れば夫の命とらるゝとや、我を渡して瀧口をたすけさせましませと、なげくも道理、止むるも御ことばりに、さゝやきの聲も涙ももるゝやと、思ひふせごのそらだきの、どもにこがるゝばかりなり。や、有て中宮あなをらせ給ひ、扱は横笛か瀧口か二人の内一人は命をどれとの小松殿の仰よな、よし心へたり、齋藤左衛門越中の二郎兵衛、太刀取、掬使として來りしとや、それく女房達二人の武士を次の間迄よび出せ、物どしにみづから言ひ聞かする事ども有り、師高もそれにてきけど、御涙をしのごひ、御氣色たしく貝おけにこし打かけさせ給ひしは、けだかくもうつくしく、空恐しくぞ見へ給ふ。取次の小上臈二人の武士も次迄と披露あれば、中宮御聲高々と、小松殿はみづからが兄なれども今にては臣下也、され共位は内大臣の身をもつて義次を手討とは狂氣とならでは思はれず、其上こゝも雲の上横笛をうたせんと、太刀取掬使にふみあらさせ、雲井の庭に血をあやし、けがれもはかり給はずや、かはいやふびんや、横笛がふり袖まらほの昔よりそばさらず使ひし者、情なくもやみくんと武士の手にかけさせふか、女なれどもみづからも弓矢の家を生れて大相國清盛の娘、人切る様はならはぬ共、うつにうたれぬと



有まじ、横笛を手付にして首を檢使に見せんぞや、盛次とやらん檢使の作法まつたらばよふ見てかたれ、義次が首も其時見ん、やれ横笛、斯くまで心をくだけ共々ものがれぬ命ぞや、是へ出よと計にて、たけく勇める御目元に、御涙をはらく、どうかめ給ふぞあはれなる。ふせごをしやり横笛も涙にひたれさしうつふき、須彌より高き御厚恩、海より深き御情、何と報じ奉らん、御手をけがし申さん事、天の咎め未來の耻、此上の御慈悲に、太刀取の手にかけてたべ、八ツさきになるとても、浮世に恨は残らねど、夫には來世で添ふ世もあり、七たび生れ代つても、又逢ひ難き御情の御主に別る、悲しやと、御前にかつばと伏しまろび、聲をあげてぞなげきける。いや、女なれ共みづからがそばのもの、男なれば腹切らする、其かはりに我手にかゝるを本意とせよと、御衣のつまかいはさみ、御はかまのそば高く、とかひくしげなる御すがた、日の守りの御劍を取て、弓手の小脇にかい込んで、最後場は殿上の櫛形、サア來れとの給ひて、横笛をさきにたて、まづ、として入給ふ。世を恨みたる御腹立、御顔ばせにあらはれて、御いたはしくも勿躰なく、見る人身をぞひやしける。兩人とつくと伺ひ聞き、何と左衛門、只今中宮の御ふるまひ御詞、小松殿の御さたとは雲泥うら表の相違也、是はまさしく中にてまよはし偽りたる謔言有りと覺ゆるぞ、御邊と我とが意地ばり合ひも私事、又瀬口義次が身のうへとても輕き事、上

と上との御不快、御中絶とある時は、大事の基亂れの端、いざ和睦してせんぎをどげ、事の筋をあきらかに聞きわけまいかといひければ、左衛門うなづき、チ、我もさこそと思ふ所、先御分と和睦して諸人に氣を付け心をつけ、油断するなど兩人が、四方を見まはす面魂、師高、座にもたまられず、あいたく、サア、持病の痲氣さし起つた、ア、いたいは、どうもこうもたまられぬ、御兩人頼み入る、此通りよい所に、あいたく、と顔をかめ、腹をかへて歸りけり。二人は跡をきつと見て、きやつは此御所支配の役人、かゝる大事の御用の時節、持病とはくせ物と、おくを見やつてひかへし所に、となせの局首桶かへ立ち出て、何れも是へとありければ、あつとこたへて兩人はひろびろさしにぞかしこまる。扱横笛を中宮様御手にかかけられ、御自身首桶に封を付られ、左京の進が首をあらため請取り、横笛が首をもわたし申せとの仰也と、述べければ、かじこまつて左衛門小刀ぬいて首桶の封ふつとどきり、蓋を開けばとはいかに、首にあらでよし次がたぶさを切ておもしに石を入られたり。各はつとあどろげば、となせの局もさすがをもつて封をし切り蓋をどれば是もまた、首にはあらぬ笛竹を歌口かけて二ツに切り折り、おもりに土をもられたり。三人一度に手を打て、是はくどあきれしが、中にも左衛門とつくと思案し、ハツアいやしき我等が詞にかけ、申も恐れ多けれ共、あつばれ小松殿御兄弟、天のなせる賢人



地に報せる賢女かな、御兄弟の御仁心いつ言ひ合せ給はねども、竹をわつて合せしごとく、寸分ちがはせ給はぬは、たうとくも有がたし、義次をうち給へばかるも、たすけをかれぬ法、たぶさを切て其身を落し給ひし事、出家は生死の世間をはなれ、法名つけば死人也、あもりの石はまるしの石、手にかげ給ふ理は同じく、命たすかる事はすくれ、理同事勝の法門にかなはせ給ふ御心、中宮も其心、横笛を討給は、瀧口ながら有るべきか、笛竹に十二律五行五音の理をそなへ、笛に聲有り魂有り、名は身をよぶ此横笛、御手にかけて討給ひ、あもりの土のこけの下、今は此世になき人といはん誰が非をうたん、命ひとつと思召せども、たすかるは二人也、二人と思へば四人也、親有り兄有り一門有り、縁類ゆかりの悦びの、其功德は小松殿中宮の御所御兄弟にとまつて、六萬恒沙の佛を作り、阿僧祇劫が其間、百萬僧の供養にも、人の命をたすくるごとく、まさると聞し御慈悲心、是盛次よその事と思はれな、弟の命我子の命、弟嫁惣領嫁四人の命給はりし御恩は何と報せんぞ、さしも切なる弓取ども手に手を取り組み聲をわけ、小松殿の御方と中宮の御方とふしあがみ、感涙さらせきあへず。となせもとも涙にくれ、耻かしや是に付け、大悪人は只一人、申さぬとても御推量、父母のなき我々が、弟は子も同前、ふびんとは私ながら、かく迄ごとく御理發の中宮様に小松様お目にまらで有べきか、妾も同罪とのちばし

めしは必定と、覺悟は極め候へ共、六親眷族諸どもに、奈落に沈むちかひにかけ、妾か露ちり存せぬ事、亡き跡迄も上方の御疑ひの悲しさを推量あれと泣きければ、勝頼も盛次もどもにあはれむ心の底、我も人も世の中の子の心親まらず、弟の心兄まらず、君君たり天天たり、日月は心中に神こそおはします鏡、ゆがんでむかへばゆがんでうつり、すぐに向へばすくなる影、御前とても其通り、たいまつすぐに御披露あれと、まるしの首桶取かはし、いとま申して立かへる。禮義亂れぬ白絲の、瀧口歌口横笛の、よくに聞へし御政道、太刀取り恨みず、細取りも恨みなき世ぞ有がたき。

#### 第四 横笛道行

尋ね行く。哀れなるかな、横笛はあや菅笠にて顔隠し、志のびあたりしくはさんば、まだ夜をこめて出給ふ。とりがなく、音羽の山をあとに見て、歩みもならはぬくろつちを、たちろく行く程に、をたぎの寺をばたてになし、南を遙かにながむれば、いなりの山のうす紅葉あをかりしよりとよみ給ふ、和泉式部のながめある、そなたのそらも薄霞、かの深草の少將の、其名ばかりやア、残るらん。鴨川こへて見渡せば、五條あたりを



車が通る、たそと夕顔のやんれ花車、花見車はあもしろや、去るしはこゝぞ、古の光る源氏の物語、思ひつらぬて行くほどに、夫にはいつか大うち、山又山に出る月、雲の林にやどるらん。御室の里の吳竹のうきふしまけき世の中を、何ををしちのいはくらの、名もよしみねと聞くかちに、たのみてまばし松のあの、千代もとむすびしかねごとの、あだになり行く朝顔の、花の上なる露よりうすき契りをば、ア、恨めしやいとをしや、扱我夫の浮世をすてゝころもでの、森のまげみをわけ行けば、匂ひも深き梅津川、渡りの舟に挿さして、筏を下だす大井川、その水上は清瀧の、高根は地藏大権現、よそながらも伏し拜む。北に向へば高尾山、紅葉の御遊の古を、思出ればなつかしや。流るゝ水はとうくどなるたき川にぞ着き給ふ。嵯峨の奥あそこの谷々この峯、世を捨て人の隠れ家の、庵敷數多ければ、いづれか我夫瀧口の住家ならんと、行きくられたつむ細道や、里の女の菜をつみて、はたけづたひを歸りくる、袖をひかへて、なふ姉御、此わたりに都方の若侍御出家有てあはします、庵室はこの程ぞとの給へば、ハア、御侍のはてとはそれはどれぞやな、念西坊は獵師のはて、道らん坊は切のはて也、毎日京へはつちかうならに出られた道さい坊はなげらるゝ、ヲ、それく近き頃平家方の御侍、此往生院と申す寺にて髪をそり、あれあの見こしの松の下道を二町程其さきに、念佛の鉦の音それをまると云ひ捨て、まや

なくふりてぞ歸りける。横笛嬉しさがざりなく、平家方の侍の、近頃の發心とは、夫瀧口にまがひなしと、ならひし道を走り付き、庵のあみ戸にやすらへば、鉦の音かすかに念佛の聲、猶もどび立つ心地して、あみ戸をたゞき、なふ申し、此庵のあるじ様に申したき事有り、錠明てたべこゝ明け給へど、かきもあみども打破き聲をはかりによび給へば、あおいと答へて四十計りのみそかす坊主、いとびんの跡髭の跡、青ねのこきてかきこした、アちがふた、油かけから明日のお齋米持つてかと思ふたれば、ときにもひちにもはづれた、くひかけんな夜食が来た、是お住持は若ければ下地か武士でずんとかたい、なんぼうまふ持かけてもいかなふたも取人でない、あらゝも今日明日は精進じや、きりぐらゐで合點ならばあさつてあじやと云ければ、つがもない、それは何の事ぞいの、もどからあ心の一道なも知つてゐる、お目にかゝればあなたも合點、たゞ一言傳へてたべ。ム、扱はなじみか、どうからそふいふたがよい、まちつとそこに待つてやと、走つて庵に入にけり。跡見送つて、常々瀧口様氣に入のさうり取り有どの給ひしが、共に道心おこせしか、まほらしや殊勝や、下々には奇特な主思ひと、ふかく感じ給ふ所へ、なふ怖はやくととんで出で、御上臈待てか、あゝら怖はやの、右の通り申たれば、たゞきがね程な目をぐつと見出して、やいそこなうつけ者、其様な使用する物か、此所へ引込で振袖もつめでもいつよんだ事が



有る、先第一にかねがない、そのれがすきな任せにをなごを見ればびろくど、うなきを見ればぬらくど、ぬらくもの持あぐんだ、重て使志をるなど、志もくをつ取り此あたまこんくく、こんどとされと云ければ、げに誠、みつからがいひ様のわるい故、聞きまがひ有るは尤、太儀ながら今一度、中宮の御所から参つた女子とつたへてたべ、それではあなたに御合點。いかなく、中宮は扱置き、内宮でも外宮でものみこまる、かほでなし、又あたまくはされふ、一度のこりせず二度のかけ、あらのいやとかぶりふる。なふそもじも見れば今道心、さぞつむりが冷そふな、ア、頭巾がやりたい、是れこれなりとも、袂よりふくさ物取出し、籠ごしにひらりとなげ給へば、道心かぶつて見て、サア表は縮緬、裏はもみうら、中につゝんだ物はなかつた。ア、それは皆道すがら袖ごひ共にとらせしが、何なりとも欲しいもの今度持て来てやらふぞる。あのさだめしはな紙はあるで有るふ。ア、く其様な物手のこびなどは持合ふた、とふぞ頼みます。任せてをけと云ひ捨て、飛で庵に入にけり。下々程正直にあるかなるものはなし、我爲の結ぶの神、今宵は此庵にて夜すがらつもる事どもをど、思へば嬉しさ氣はすむ。顔の見たさに氣もせきて、そいろふるふて待ち給ふ。ア、有て道心すくくとして立出る。なふとふぞいのく。どふはふつり埒明かぬ、たとへ知つても知らないでも、女子と云ふ名が付けば人間は扱置き

女犬でもめんどりでも物もいふ事かなはぬと、誓文立ていひきられた、ふくさ一つ棒に振つたと思召せと云ければ、横笛とかふのともなく、わつと計りにむせび入り、土の上にかつはと伏し、消え入りく泣き沈み、變ればかはるものよなふ、互に焦れ暮ひしを、二年三どせはみ、なれて、淺はかな様なれど、日數は千々のよるひるを、思ひくらし泣きあかし、又なれそめては世をつゝみ、人目を忍び、七生もかはるまいぞや、變るなど、契りし中に、あすか川せめては波の聲なりとも、聞かせてたべとかきくとき、柴のあみ戸にすがり付き聲をしましなき給へど、あはれ事とふものもなし。ア、ぐちな歎くまじ、夫ひとりを楽しみの、夫に捨られ、世にながら、月も花も何かせん、あの川に身を沈めせめて夫の往來の影うつるを未來の樂みと、思ひ定むる思ひの數、ちどりがふちへとたどらる。道心驚き、やれ身をなげるはありやくなげるはくど、呼ばる聲に主の僧、あはてさはぎて走り出で錠ねち切つてだきとむれば、なふ瀧口様かといだき付く。エ、是々瀧口ではなはいの。いやそふはいはせぬと猶取り付くを引はなし、ア、横笛殿か。左京様か、あら悲しやうらめしや、中宮様の御情にて、うき命たすかりしも瀧口殿に今一度とちもふ計りの嬉しさなるに、此頼みもきれはて、か、殺してほしい左京様と、衣の袖にすがり付き、又むせ返りなげかる。義次も涙にくれ、我等も主君小松殿の仁心にて、不慮に存命いたし



遁世の身とはなつたれ共、心にちこらぬ道念、忘れぬはかるもが事、御身の躰を見るに付け、不便やかるもはまつその如く我をまたひ歎くべし、瀧口も又我等が如く御身をまたひ歎くべし、現世にてさへ別れくの四人の中、未來の一蓮思ひもよらず、一所不住はこゝが徳、庵へも入らず御身をともなひ尋ねなば、瀧口とてもかるもとても皆思ふ者もつたる者、遠國へはよも行くまじ、此一念のひきは太鼓鐘にて尋るにもまさるべしと、庵は下僧にゆづり捨て法はいづくも一佛にて、行くさき同じ佛也。いとま申に及ずとさとりは重く、身は軽く、心も軽きすみの袖、行衛定めずまるべなく、いづく宿りとあてもなく、夫にはなれし鴛鴦と妻にわかれし野邊の雉子、つれて音を啼く風情にて、我妻ならぬ旅衣、袖に涙を拂はまし。花の吹雪と詠じけん、志賀の山路に着にけり。頃は極月初つかた、空もどどろにふる雪の、つもる方よりこほりきて、道はつるぎを踏むごとく、比叡の嶺あるしはらくど、横ざる風に横笛は、此頃いたはる身のつかれ、頼むは義次只一人、頼まるゝ身も只一人、藥わたへん手だてもなく、是病氣には氣遣ない、追付け瀧口に逢はせふと詞を著婆ども、扇鴝ども、力を付ていふ聲も、ア、忝しといふ息もともに嵐の吹どちて、口もこいへし雪の暮あゆみかねたる斗り也。チ、道理く、せめて二三日宿を取り、雪の晴間養生と存ずれども、時分がら師走の空、ひとり坊主ひとり女、一夜を貸す人もなく、百日

斗り野山のおきふし、をさなきよりやはらかに御所をだち思ひやりていたはしや、半道程行さきは志賀の里家さへ見たらば泣きくといても今宵はあかさせ参らせん、歩み給へど引立れば、横笛も行んとするに足すくみ、たちくたぢくよるくど、どうとふして泣けるが、扱もく忝や、御身の上にも尋る人、うきくのつもりし御身にて、年月の御介抱、達者な身でも有る事か、死にかゝてある者を、ふせうな顔も見せ給はず、他國三界此雪に、御身にかけてのいたはりは、先の世の親か兄弟か、たゞの御縁と思はれず、御身様とは縁有て、二世とかけたる瀧口様、かく迄めぐりおはざるは、ア、あやにくの世中や、中宮様の勿躰ない、御身にかへての御あはれみ、冥加につきたる天罰かや、我身のうさにつまされて、思ひやればいたはしや、かるも殿は懐妊、それよりは早五年、御身様の物案じ、かるも殿の心根、思へば是も病の一ツ、我身の上の上、つもりし雪に息もきれ、目もくらみ、あす迄いきんと思はれず、お情には念佛すゝめ、未來を夫の瀧口とひとつ蓮に往生させてたび給へど、はやたへくの息づかひ、かつはど伏して泣き給ふ。同じ思ひの義次も、どもに心は亂るれど、病者に氣を付んと聲をあらけ、エ、曲もなき横笛殿、かるもが事を思ひやり給ふ程ならば、など心を取りなをし、雪氷はあろか火の中にも分入て瀧口にめぐりあひ、三人一所にかるもが行衛尋てくれんと思ふ心はないかいの、エ、いひがひなし



とひつ立れば、今を限りの横笛も、ア、あやまつたり、我ながら心弱しと夕やみの、さきはそことも白たへの、雪のひかりをさるべにて、あしに任せて人ぞとは、まだはるかなるひとつ屋の、雪にふすぶるたき火のかけ、かすかに見ゆればたどりつき、内をのぞけば來迎の三尊燈明はそくぬふたげに、五六さいなるわらんべの、柴折りくぶるいろりには、湯のにゑたつ浦山しく、心迄こそこほりけれ。是ぞ寶所の宿りと思ひ、ちと頼みませふ、頼みませふといひければ、わらんべのびあがり、誰じや何者じや。ア、苦しからず、今宵の雪に道ふみまよひし旅の者、つれとても只兩人、其かたすみに夜明迄やすませて下されかし、頼みますると云ければ、やすいとなれどこの亭主の御坊様のあるす、必ず門を開るなどのいひ付け、なりませぬとぞまほらし。オ、いづかたも用心時御尤なれ共、つれと申は女也、殊にわづらふてゐる者、ぬすみなどいたす様な者でなし、ちとなにいふ様に不調法な事ながら、大きな慈悲になること、其中あるじのお歸りならば、我々言譯いたすべし、せひく頼み奉る。いやなんぼでもなりませぬ。然らば其湯を一ッおふるまひに預りたし。いやく是は湯ではない、是は藥、一ばんせんじがまだあがらぬ。扱は是にも御病人有かや、御病人とはどなたかとは云ければ、されば我母様久しい御煩ひ、あの障子の中によるもひるも寝てはつかり、朝晩のまゝも皆御坊様の手わざ、今宵もそこないばらかは

迄藥取にと云ければ、然れば主の御るすでも、お袋が有るからは此通申て、ひらに一夜の御無心が申したし。いやくあの母様を大事にかけ、人が連れていなふかどて、るすの間は誰がきても入れるなどの云ひ付け、それ故ならぬと云所に、奥より女の聲細く、なふ龜若、旅のち方の宿かりたいとや、此ひえるにおいとしゃ、其中主もお歸りならん、先よび入れよと有りけれども、わらべ心の一筋に、いやくたど一見まつた人なりともるすの間は門明などのいひ付け、ついでよんで参らんと、壁にかけたる竹笠を取てかづくもいたいに、まめをむすぶもまどげなく、宵よりつもる大雪に、姿はなかばかくされて、笠の歩むが如く也。ム、主は出家と見へたれば、妻をかくすも尤々、子は弟子とはいひなすらん。此間にそつと内に入り横笛を先火にあて、我も寒氣を凌がふか、いやく主が歸つて不興せば一夜の宿をかりそこなふ、まそつの堪忍と、なやみふしたる横笛に、二人の笠をうちきせて、おほふが上にふりうづみ、夜はまげくど更け渡り、打拂ふ雪はぬさどちり、袖のつらゝはがらくど。神樂の鈴に異らず。遙か向ふにをさな聲、なふく旅人主は是へど、よばしる中、二人づれにて立歸る。宿かりたいとはこなたか。いかに我等。主殿とは、ヤア瀧口か。なんと義次。是はく、ふしぎの對面、先々大事の預りもの、是こそ御邊が胎内にて別れし子よ、なふかるも殿とよばれば、夢かと計り走り出で、是ぞ我子よ、父な



るかと、すがり付けば、いだし上げ顔を見合せ手を取りかはし、親子三人聲を上げ、悦び泣きこそ道理なれ。是程縁のあふものか、いで義次がみやげには、是横笛を伴ふたり。それは深切、朋友の誠顯はれし、是横笛是横笛と、ゆりおこせ共言もせず。雪打はらひだきおこせば、身もすくみて息たへたり。人々あはて立騒ぎ、くひつめたる齒こち明け、薬さましくふき入れても、脈の玉の緒きれはて、此世の縁はたへにけり。瀧口は前後にくれ膝にだき上げ我身の上はだにはだをつけ、扱もく浅ましや如何なるすぐ世の悪縁にて、某に思ひそめけるぞ、我は彼故身を苦め彼は我故うきめに逢ひ、せめて一日半時も夫よ妻よと世間はれ、一家にすまめしよはもなく、五年此方ありかもしらず、一生物を思ひつめ、一生人目を忍びつめ、今宵と云ふ今宵我が夫の門とも知らず迷ひ来て、詞もかはさず不便にも、内にたき火のまざくど、色を見ながらこゝろ死したるよな、餓鬼は水を火と見るとや、御身は又火を見ても八寒地獄に落けるか、なんの罰ぞむくひぞや、法体の父に還俗させ、常精進をおとしたる、佛の咎めましまさば、我が又此五年、發心出家の功徳を捨てたまふや、情なやうらめしや、やれ横笛、瀧口がかはゆくばたつた一言我夫といふてくれよと、斗りにて、空しき死骸をだきまめく、聲も惜しまず歎きしは、目もあてられず、いたはし。義次夫婦はかきくれて、身にかへんと歎きしが、餘り本意なき最期なり、

169

此上の念はらし、たき火にあて、五臓をあた、め見るべしと、山柴くゆらせ額をささぐ、手足をなで、様々看病いたわれ共、更に志るしはなかりける。かるもは取分け、おさなきより中宮の御そばにて、共にそだちし傍輩の、過し昔を思ひつつけ、せきくる涙のひまよりも、守袋をひらき、是は薬王香と申す名香、もろこしの帝より後白河の法皇様へ参らせられ、中宮様へつたはり、三國無双の寶なるを、横笛と自らに、二世迄も主従の印なりとて、中宮様よりいたしき、此人の守りにも有るべけれど、自が二世をともなふ約束の焼香、中宮様のお心ざしと、をしいたいきてたくとひとしく、匂ひ家内にくんじ渡つて、横笛が肌あたまり、ほつと息つき目を開き、なふ瀧口様かと云ふ聲に、人々驚き、ヤアよみかへりと悦びの、皆よみかへりし心地にて、夫婦くがすがりあひ、つらと今の嬉しさと、泣くも笑ふも道理なる。只今息もたへて、夢ともわかぬ其中に、名香のかほりして、中宮様の御聲にて、横笛くど召ると思ふより、二度此世に立かへる、主君の御恩の有がたさと、各一度に手をつきて、都の方を禮せらる。主君は親なり佛なり、かりそめながらまばしが程も、身を墨染の衣の思、導き給ふ御身は釋迦、むかへあひたる我等は彌陀、願ふ都は西の空、かへり入るべき月弓の、弓矢の家督子寶と、そだて、時をば待にける。



## 第五

勸善懲惡は國政の始と云や。加賀の郡司師高惡事讒言あらはれ、死罪に行なはるべかりしを、姉となせの局がゆかりといひ、慈悲をおもてのまつりごと、命斗りを助けられ、帝都退放せられしかば、すでに朝夕にせまり、一とせ舟岡山にて害せられし岩村源五が一族岩村源九郎、鎌須の無藏、彼等をかたらひ、路頭にさまよひ、或はかたり鳩のかひをひはぎをし入りごまのはひのねだれ取り、其日くのきてんの身過、是能事と思ひ込み、見へぬ我身の志賀の浦、辛崎邊に徘徊す。師高二人を木蔭に招き、今日は申の日山王参りも有べし、あれに捨舟有り、源九郎はあの舟に乗つて船頭に成り人をのせて沖中ではいぞれ、明神の拜殿に禰宜の烏帽子装束有り、無藏はあれを着て社人にばけて、初穂賽錢十二燈を志てやれ、我は道にぶらついてうつかりつらの旅人のこしのまはり懐、念がけるとこつちの物、サアめんく油断すなとうなづきあふてぞ別れける。となせの局は中宮の御願御代参の仰をかうふり、大津の町に宿をとり、山王と辛崎へ七日まふでの乗物に、供人少々召ぐして、辨當さゝるさゝ波や、志がから崎の一ツ松、こかげに乗物たてにける。局あたりを見廻

し、ハアいつもの禰宜様三太夫は見へぬか、尋て見よと有ければ、無藏心得、いや私則ち三太夫が親、お神樂でも十二燈でも仰付られと出ければ、扱々三太夫はもはや六十のうへ共見へる、其親には若いなふ。いやく三太夫は親で其子の二太夫と申もの。ム、ウ三太夫のむす子か、是れこくくと招きよせ、自は忝も都中宮様の御代参、三太夫の咄あつたかまらぬ共、横笛かるもといふ女中戀故らう有し事、御ふびんに思召し、此の志賀のほとりに其男左京瀧口と云ふ人一所にある由おみくに立ち、尋出し参れとの仰にて、山王様と此神様に願をかけ、大津の町に宿を取り、七日参りの今日五日目、もし左様の人聞及びもない事か、行衛の知れる其所念ひとへに頼むと、神前を、一心不亂に禮拜有る。師高編笠傾ぶけ、参詣のふりにて後に立て聞すまじ、飛かつて局のものと首ひつ、かみ、あをのけに取てひつかへす。なふ悲しや、何者じやと、わつとさげせば、若黨六尺、盗人のがすなどばらくと取まはせば、ヤア寄るまいくうず出めら、あれぶちふせてひつはげ。心得たりと、源九郎舟よりあがつて切てかれば、無藏もぬいてひらめかす。此勢に恐れをなし、いふにかひなき若黨中間、ひるがんだうよ、をひばきよ出あへくを力にて、皆散りくにご逃にける。となせわつと聲を上げ、何者かと思ひしに弟の畜生めか、お主には御苦勞かけ、多くの人をそこなひ、すでにあちる其首が誰がかけて胴に付いて有る、此姉かがけ



と云ふも中宮様の御慈悲、御恩報じ罪ほろぼし、出家沙門ともなりはせず、其さまになつてもまだ合點がいかにぬか、地獄の釜のかまこげめと、はがみをなして泣き給へば、コレ其合點がいく程なれば此さまにはならぬ、兄弟の情に命は助けた、そのれが身軀知つてある、五兩や三兩の懐にも有筈、サア出せ、出さぬや殺すとぬぢふする。ヤイさもし根性な己れが氣に引あて、金出さぬば殺すとは、たとへ千兩萬兩でも命にかへておしまふか、中宮御所の局ともいはる、身が、懐に金銀をたくはへて何にせふ、殺さば殺せと泣き給へば、ム、是はかう、懐には有るまい、大津の宿に有るはづ、取てくる迄うごくなと用意のやなは取出し、踏み付け、まばり上げ、乗物に取て打込み、サア来い兩人、七日逗留の用意なれば金銀はしつほり、扱は葛籠挟み箱、着換へから夜の物、見事な事とかけ出す、身の行末ぞ恐ろしき。左京の進義次は夫婦の中に子をそだて、世に不足はなけれども、今一たび都に出で、主君の恩を報せずば人たる道にあらざとて、親子三人日參の志賀幸崎の大明神、松の名にあふ小松殿、あがむ心と頭をたれ、いのる姿で殊勝なる。かたはらより誰とはまらず、なふかるも殿義次様と呼ぶ聲頻りにきこへたり。不思議とふりかへり、あの乗物の内そふな。チ、こゝじや、かるも殿なつかしや、是へ、とよぶ聲に、またがひて立より戸を開けて、ヤアお局様か、此姿は何事ぞ、淺ましやおいとしやと、抱き起し

て細をとき、たゞ泣くより外の事ぞなき。となせやう、涙をおさへ、横笛瀧口はいづくにぞ、上よりそもじ達の行衛を尋ね、召かへせと神々へ御代參の折から、弟の悪人め御扶持をはなされ盜賊となり、斯様にからめ置たるが、追付是へ来るべし、恐ろしや、いざ歸らぬ其さまに、一先都へ同道せん、早ふとせき給へば、義次打笑ひ、我々参りあふからは何ごとか有べき、瀧口横笛も追付け參詣致す筈、都へのぼるは四人一所暫く是に待給ふべし、師高が立かへらば、御身乗物に入かはり、左京の進に捨られしと辯舌を以てたらしこみ、あの舟へつれてのれ、我船頭のふりをしてずんとよい志あんあり、といへばかるも心へて、高をさへのみこめば其上は時のさいかく、手つかいよふし給へど、乗物に入りければ、チ、ぬかりはせぬと龜若をかきいだき、となせの局諸共に舟引よせて打のり、舟ぞこに二人をかくし上にとまさおほひ、其身は簀笠ふかくと、空ねぶりしてありけり、程なく師高大汗になつて走り歸り、乗物たいて、是姉じや人、大津の宿でも志るしがなふては渡さぬ筈、晝中にどやくとをし入も成るまい、金銀衣服渡す様にしるしを渡すか、サアどふぢや、といへどもさらに返答なし。エイ面倒など乗物の戸引たくれば、思ひもよらぬかるもの前、ア、はづかし師高様と、志ほくとして出ければ、さすがの師高きよつとして、是はどふぢやと計り也。今更くやんでかへらぬとも、一とせ嬉



しいお詞を無下にしたる人罰にて、左京めに捨られ、あまつさへりんきするがにくりとて、此湖へ沈めにかげんと申せしを、漸逃てせんかたなく明き乗物を幸に、せんごわかずに此通、どふぞ昔のお心が半分残つてあれかしと、おもふはゆげにぞまかけしる。扱は姉めは逃をつたか、姉子人ともかへはせぬ。昔の心半分とはつらい仰、其時より百倍まし、身の上萬端予が請込み、少しひねてまぬめうくれ女房ぶりがあがつて、いとと思ひはますほのすいき、ころしくされといただき付く。あれ人が見るはいの、あの舟かつて沖中で人目いどはずまつほつてはなんとある。びやくらい女房があがれば智慧もあがる、是船頭、さいぜんは捨舟かと思ひしに、其方が舟よな、石山までかしてのせまいか。ヲ、ちよつと見るより戀と見た、船頭は戀の渡し守、うんちんもかまはぬ、戀にこがるうき舟、サアめせくといひければ、是こそ本の渡りに舟どのらんとするを、是こそ、岸が高いあぶないく、一人づゝ女中からサアとざれと、かるもをだいてどうと乗せ、さほ取なをしるいく聲、是はくんと云ふ中に、三反計さし出す。師高大きに腹を立て、人買ひ船か盗人めと、淺瀬を尋ねかけ廻る。義次篋笠取て捨て、舟ばりにつゝ立ち、天罰に眼くらみしか、左京の進義次お局もかくまへたり、永く悪業さらさんより腹をきれとよばつて、各あられ出給へば、エ、たばかられし無念やな、たどへ此うみ千尋萬ひるふかくとも、渡たりつきてへさきに

取り付き、ひつくりかへしてくれんすと、裾ぬちからげうでまくり身づくろいする所を、瀧口横笛遙に見付け、瀧口一さんとかけ付け、後よりとあしをかいてまつさかさまにどうど伏せ、背骨にとつと乗ければ、横笛はあたまをはり足をつめつてせめさいなむ。エ、小くはじやめに組みまかれ、一生の不覺取たりと、手足をもがくぞ心地よき。義次聲をかけ、殺すなく、上御慈悲にてたすけをかせ給ふを、我々殺すは私也、同類を待ち受けうつて捨よと、舟さしよせとびあがり、手足ひとつにからめ付け、口にぬちわらをしこみく、手のごいにてぐるくまき、乗物に取てなげ入れ、サア大悪の御本社を志めたれば、末社くは今のまどやしろのかげにぞ忍びける。程なく無藏源九郎大息ついではせ歸り、旦那も見へずさんくの仕合、先此ば、めが不吉者、まよふてのけんと乗物の兩方に立ち別れ、すだれごしに刀をつゝこみ、えいゝゝえいと思ふさまにつき通しと通し、かねがなく共なんぞは有ふ、懐さがせと引ずり出し、あけになつたる死骸を見れば、なむ三寶師高也。無藏ぬかるな、瀧口か義次かこゝらにあるは極つたぞ、油断するなど云ふ所へ、ヲ、よい推量、左京の進義次齋藤瀧口是にありと、弓手馬手より切かけく、打伏せく、二人が二人に乗かゝり、とゝめのつるさし通し、悦びいさみ立つ所に、齋藤左衛門越中の二郎兵衛、小松殿より歸參の奉書、本領安堵の御朱印と、聲を上げ扇を上げ招きよせて頂戴



す。夫婦兄弟親子の奇縁、忠孝の徳、和歌の徳、神の威徳や神かぐら、鼓はでんくから  
幸崎の松は萬代、横笛の、竹は千とせの若縁さか行く家こそ目出たけれ。

### 娥歌加留多終

## 井筒業平河内通

### 第一回

むかし、昔はむかしの今日にして、更に昔よりのむかしにあらざ。夏は般のむかし、  
般は周のむかし、其昔の禮によりて損益する所をあらば、百萬代の末かけて、天地と共に  
限なく、かはらぬむかし、久堅の天津御位五十六代、清和の帝の御兄四品惟高親王、通  
世の皇子いませかりける。比は貞觀十五年二月始つ方、御乳母のよしあつて伴の大納言宗  
岡、御外戚のまたしむ散位紀の有常、日枝の山の麓小野の閑居に伺候ある。また山里は遠返  
り、雪はこぼすが如くにて、無媒のかけ路を埋み、雲凝て磐石頭に傾り。人家の煙道た  
へて、朝來一片の霞を飲むとは、かゝる所の山居かや。雪吹にまぢる勤行の鈴の聲をる  
べにて、室の戸に案内すれば、蘆のすだれ押やりて立出給ふ惟高親王、香のけふりにま  
はりし、麻の衣赤木の數珠をこなひ入たる御形、珍し、方々、公の事繁きに雪踏み分し番づ



丸は丸が爲の梅、山家の春を迎へたり、隠遁者のもてなしと幅りをかゝり、佛壇に一連々  
 具の骸骨、頭に冠手には笏、小葵の袖引まつひ、そも是を誰ぞか思ふ、丸が外戚の祖父  
 有常が爲には父、正三位紀の名虎の骸骨と、仰も果ぬに有常驚き、あやしくも悲しくも、  
 おつと烏帽子を簀子に付け、心迷ひて見へければ、白骨を安置せしはれ、大納言は老つ  
 たれ共、有常はよも知るまじ、語て聞せん、事おたらまきいひことながら、今の帝惟徳は  
 第二の宮にて弟、丸は文徳帝第一の宮、位に即くべき理運と、祖父名虎心身を碎きし事、  
 惟高惟仁位あらそひと秋津島にかくれなし、名虎は大力弓馬の達者なりしかと、天の時至  
 らず、競馬するふの勝負にまけ、終に無念の此世をさる、天晴れ其時おらそひ勝ち我十善  
 の位につかは、名虎を攝政關白、有常も任槻、宗岡を大將にもなすべかりしを、と思ひく  
 やむにかひなく、名虎に恩を報せんため、墓を發き骸骨をつくれ、私に正一位太政大臣を  
 贈り、魂を呼返す招魂の祭をなすも、恩を報ずる計ぞやと、語り給へば、有常父を慕ひ、  
 親王の御心、忝く、顔をもあげず直垂の袖は涙にこほりけり。大納言す、み寄り、斯る御  
 仁心の徳によつてお運ひらく事此扇のひらくがごとくと祝ひ奉り、當代の繪かき百濟の河  
 成が筆、繪を御賞翫候へと、扇二本献上す。親王御感な、めならず、一々ひらき御覽有る  
 に、山水花鳥の類にあらす、三本に三人の美女の姿、うつくしやくと御めもきへくと志

み入る計り、墨の衣は忽に色にそめたる戀衣、思ひこがれし御聲にて、書きも書いたり異  
 國の楊貴妃我朝の衣通姫あふぎの上に来りしか、かゝる女も有る世ならは通世はすまじ物、  
 繪ぞら事が但寫しとめたか入はし有るかとの給へば、君老らしめさすや、今の世日本の三  
 美大と及ぶも及ばぬ戀もたふは此三人、柳の五つ衣に紅の袴、扇かざせしは中納言藤  
 原の長良が娘高子の君、當今清和天皇の女御に定り、いまだ入内なき先に二條の后と號し、  
 色好みの業平が案内にて、童の踏明たる築地の崩れより帝志のびくくに御幸有る程の美  
 人、又井つゝに水鏡見る姿は外にもあらす則ち紀の有常の息女井筒の前、在原の業平に縁  
 組とかや、委細は親父に御尋ひ、又欄干に寄て山の月詠るは河内の國高安左衛門が娘伊駒の  
 姫、日本ひらしと申せ共美女と申は此三人、叶ぬ戀とは我等躰の上、天子の御身にて人の  
 妻とて普天の下に住もの勅説はそむかれず、御心ひとつにて今でも天子とならる、御身、  
 何覺しめす事かど、すくむる色は謀反の媒、有常はつと肝にこたへ、南無三寶毒氣を吹込  
 むまわす、何卒倭臣めいひ破つてくれんと、腕をもみひさ立て直しむかひしが、親王は  
 扇の繪顔にあてつ抱まめ、宗岡が辯舌に聞入給ふ御氣色、いや／＼なまじいの諫言だて  
 却て娘井筒を上よなど、無躰を請ては難義、時節わるしと分別極め、大内の勤事繁し、先  
 お暇と申せ共、さらばとたにもの給はず。大納言を走りめにかげ御前を蹴立つる有常か、



くはつとせいたる面は火焔、寒風に大汗、頭のいきりに雪とくる、山路踏け分け歸りけり。親王遙に見送り、丸が伯父なれ共叔親に似ぬ小氣者、道をまもるも時代による、既に孔子も道行はれずといへり、正直は阿方の異名、兼々汝にまめす如く、名虎なくては本望はどげられず、僧正眞雅が傳受招魂の法、今日百日の満願、いで一いのりと煙にのぞみ、獨鈷三鈴鈴錫杖、此幣帛にうち乗て名虎が魂魄呼子どり、鳴くをまるべに招魂の法、去職還來敵王教、歸り來れ歸り來れ、抑東方には千仞の長人、魂を鑠す事あそるへし、南方には虺蛇素々として人を呑む、西方には赤き蟻象の如く、玄峰壺の如く、其土人を爛す、北方には氷の山巖々として雪の淵千里也、天に八重雲九重の虎の關豹の關、地下には土伯の三眼角ぎいたり、天地四方にともならず、もとの幣に歸り來れ入來れ、空風火水の五倫五行に五大尊、八大童子は八職の道を薄き、大地藏は六根に加被をなし、應護を加へ、今爰に紀の名虎再來せしめ給へやと、金剛安立の印をむすんでせめかけ、所誓ある、祭文經文鈴の聲、比敵の根あらし雪あらし谷の嵐を吹上げ吹巻き、とうとうと、さつと柵引く焼香は反魂香の煙の中白骨うごとく見えけるが、眼耳鼻舌明々々、髮髮生し、皮肉手足をなはつて、忽ち入牀連續すれば、陰陽の氣貫通し、段をひかりと飛あり、一揖まで立たりし秘密の法ぞ不思議なる。昔にかはらぬ大音聲、ア、あかや、あかるやな、無念の魂幽冥のくら

やみより婆婆に歸つて本の名虎、清和天皇を追くたし、君を南面の位につけ、二條の后を女御にたてんこと日をかぞへて待給へ、心の勇氣腕脚の力前生に百倍と、片足くつと踏のぼせば、沓脱の大石かつはと踏かへされ、谷底千仞とたぐと、とうとひびきたる山彦は雪に答へて夥じ。賊や天皇は二條の后の入内を待兼ね、築地の崩より忍ばるゝよし、通路に人を伏せで惱し、忍びの者を以て后を奪ひ取り、親王はたはつ修行とあそむき、大内必推参り、無理難題を云かけ、いなど勅説あらんは必定、それを味方の詞質、あとは名虎に任せおけ、都遠くを叶ふまじ、洛陽烏丸の古御所とひそかに移し奉れ、宗岡やうと、既に下山の用意ある。上求菩提下化衆生をまなぶ雪山の、修行を今の一時に、くたぐ、賊おの、山、跡まら雪ぞふりにける。東五條に棟高き二條の后の御里御所、いつの間にかやら童のちよつと築地のちかひちぎ、二寸二寸五六寸、都一はいふみ廣げ、今は惟仁親王の御通路と名に廣く、浮名とめよと關守の、打も寐ならで寐すの番、夜る晝るきびしく守りける。音に聞えし色好み在中將葉平朝臣、郎等般若五郎仲則を召具し、常々君の御供して、通ひなれたる築地の崩れ、立よればこはいかに、數多の仕丁坐をならべ、用心きびしくまもる跡、案に相連し給へども、般若五郎目くばせし、築地をこしたる梅が枝の花見る跡にもたなしで、行きつ戻りのやすらば、番の者共聲々に、立まい、と通りやれお通りなされ



とよせ付す、木ではなこくる男共、梅計りこそ色香なれ。業平五郎をかたへに招き、取沙汰にちがひなく、惟高親王のわざと覺たり、後の父中納言長良は老病身、物の情知のたる人伴の大納言宗岡が我意に任せ、番を付しに疑ひなし、いかゞはせんとの給へば、もどより無意氣剛力の般若五郎、惟高でも、鵬でもなんの事、旦那私戀ではなし、勅説をかうふり給ふ上、番で有ふが關守で有ふが、片はしつままのける分、いざ御出と駈け出す。ヤレまて五郎、其勅説いはぬ事、大内の儀式相濟み、后大裏へ入給へば平人の夫婦同然、戀も情もいらぬとも、君待かねさせたまひ、斯る鎧地の崩より十善天子の徒歩既足の忍路、其媒は業平、武骨の振廻未代の笑草、業平は梅花一枝所望と表門よりまされ入らん、汝は番の者をすかしのけよ、其内に后をいざなひて此所より忍び出、すぐに内裏へ入れ申さん必ず荒氣出すまいと、走つめて別れ給ひける。般若五郎分別し、番のあたり腰かちめ、行かどり立戻り、用あるげの跡を見て、ユルヤ御侍うつふいてはなをひこくと、此街道がとどろか、はやく通つた。御尤も、たうた今此所で車袋をとどいた、金子三十兩をまねがたのふかみと、いふより番衆目の色かはり、役目も番も打忘れ、あたりほとりをうろまると、大地をわいで廻りしが、サアまてやつたと般若五郎、ハア、思ひ出した、何某の院の櫻の下、うつかりと轡を見えていたが、儘其時落したと、聞より番入我先と、落さぬ金

をひらふとて、魂落して走り行く。窺ふすき間の斑犬聲をも立せずせをふせて、鎧地の穴よりみらんとす。サアまれたる犬めと立へてにらみ付れば、大も尾を立しり、引ばの下ののはばか、う、付廻しつ、二三ばんまきつて土かきに腮をむき、うなむ計り低味もせず、我身をかばふ有様は、たけばつ令に立のびて常にすむれし大犬、サア心付置、掴みと飛でかればさぞくをぶみ、鎧地の内へかけ入りしは翼のあるが如く也。ハアテつなふらひ肥なのら犬め、あつたら骨お草臥た、番の者の歸らぬ内主人は御出なされぬがど、内を見やつて待の所に、やかたの内さはがして、一犬吠ゆれば萬犬の聲もききり、内よりも業平後に負參らせ、鎧地をぐり忍摺、后は夢ともまら玉が、何ぞとどがむと、尾筒を取て引戻し、むんずとだいて押ふせ、サア忍路の犬とめた、早ふとと呼はれば、中將今は心やすし、跡より追付け俵則と、大内さして急がる、志かれながらひやうん、おん、はねがへさんと身をもがけば、サア無用の長吠と、顔の皮引ぬれば、三十計りの鬘男、頭計りが犬男、五郎からくと笑ひ、あのれが顔見知つた、伴の大納言が家來一藤太基國、音に聞た忍びの上手、犬になつたはまさいが有ふ、サアぬかせ、口くときめ付れば、サ、仔細がなふて犬のがはかふる物か、后を奪ひとらんたあ、口



をしいさすがでも持たらば、下よりぐつと突かんもの、無念くともむ所を咽ぶるう  
 んど一ひぬき、きやつと計りに息絶ゆる。番の者共立歸り、エ、につくいなんにもなひ  
 物々そのきつ、ハア、見事な番の衆、落したといふはうそのかほのたん袋、左程かはぶく  
 るがひら度くば、似合た儀に夫ひらひ、此皮袋ひらひあればかな頼の皮袋とい笑ふて  
 はては行く空の。春の日數も二月の、涅槃供養のをんかくと、御垣が内の糸竹に雲井の  
 外も覆すむ折から、大の法師ふんぞう衣の高からげ、鐵鉢さげ、錫杖つき、郁芳門をつ  
 つと通る。當番の馬部吉上御遊の折からいづくの坊主、罷出よとどがむれば、耳にも更に  
 聞入ず、御階のもとにつ、立ち、十方旦那の福田、宿植徳本の沙門に齋料、はつちんぐと  
 大音聲、管絃の調子も亂れけり。諸卿の老若、あれこそ惟高法親王、帝の兄君、御運つよ  
 ければ御位に即せ給ふ御身、八目草鞋の徒歩既足、愚痴無智のはら坊主同然の御修行、  
 我が着飾る綾錦は却て地獄の種と成る、あの御姿がすくは佛の三十二相八十種好も外に  
 ない、アア御殊勝や有難やと、手に黄金めいかう名珠、たすけ給へと御鉢になげ、曹南  
 無阿彌陀とひれ伏して、あにようかつかう申けり。親王せもつをくはらりと投捨て、還  
 しや凡夫身、金銀珠玉は今生一世の寶、却て人を迷はず地獄の導きとは此事、されは經に  
 頭目驚腦と説く、又は捐捨國位僕從妻子とて、古異國の天王は佛法のため眼をくぐり、五

昧の筋をぬき、王位を捨て、妻子をすて、法に歸伏したる例有り、雜人の施物うくれば内  
 裏へ來るに及ばず、今日の施主は清和天皇手づからの志、はつちんぐといひ捨て空うそぶ  
 いてぞびたりける。伴の大納言横手を打ち、お、御尤々、一ツは御祈禱且は結縁、由御有  
 べしと奏すれば、天王御階近く出させ給ひ、こはそも殊勝の御有様、朕不思議に位に即  
 と雖、種々は兄、朕は弟、もとは文徳の二ツ木末に連る枝、佛法不思議王對座迎、佛の像に  
 成り給へば、王位とて、憚なし、御望たはいはたど、七堂伽藍成りとも建立し、ま  
 らせん、金銀の施物を擲給ふ無欲の程、實や金は山に捨て玉は淵になぐべしと、墨賢の  
 詞に呼ぶ御心の清らかさ、感ずるにあきたらずと、御扉の巾子を傾ぶけて、御手を合さ  
 せ給ひける、御有様、忝き、心を合せし大納言ありよしとつ、と出で、是を勅説に異議  
 はない、七堂伽藍建立の御望か、イヤ、僧正僧都の位が望か、イヤ、然らば知行の御所望  
 か、イヤ、經文の通國城妻子が所望、大納言打うなづき、ム、妻子を施物にほどこそは  
 扱は二條の后を御所望か、マ、何もいらぬ五條の后高子の君をはつちんぐと呼はぬたりや  
 天皇大に驚き給ひ、扱はきやつまいす坊主、案に相違と勅答なく、立て入らんと是給へ  
 ば、宗廟飛かぬ御衣の裔老が、おのの恐みを叶へんとたつた今の繪言、天子に三言な  
 りと引とむる。惟高入道錫杖取直し、后を奪ひ取るはやすけれ共、おのれが縁を切らさん



ば賢女だとして我心に未だかふまじと思ふてのことは、サア后と縁きるといふ一言聞  
 ずば、錫杖のむね打も、傍若無人の有様、既にあやうく見へたるをりふし、散位紀の有常  
 義權桂金吾廣國を召具し、来るよりはやく天皇をもきはなし、あくへ押やり奉らせんと  
 北山にて雨木の眼色たし事ならずと心を付け、まづかふ有ふと思ひし事、親王の宮のどあ  
 がむるも、君臣の道をまもる内へ、我姉の腹より出た正しく甥なれども、頭をさげ腰をか  
 かめてくせじ、斯る無道の悪僧はつちひらきの乞食坊主、アレ金吾引きずり出せ、意地  
 張は打殺せ、承ると廣國、錫杖もぎ取り、振りあげんとする所を、大納言かけだて、錫  
 杖の柄をじつかと取り、ユキヤげすめ、一天の君さうやまひ給ふ惟高親王、主が物に狂  
 へばさて、おのれまでが此錫杖ふり上げてなるとする。まづかふすると引たくり、今日心  
 さじ、錫杖の二握り手の内のほうしや、いたいけと、つづけ打ちにてうし、愛な奉  
 加場世話やき、十方旦那法界の捧請とれど、同じく打ちすへ、サア出でうせいとねめ付  
 る。かゝる所に待賢門待天門騒ぎ立ち、先年死したる紀の名虎再び顯れ出たるは、なふ恐  
 ろしやすまじやと、逃廻る程こそわれ、荒れに荒れたる紀の名虎、火雷神の如く驅け來  
 り、廣國が胴骨はたと蹴倒し、ヤアまだるし惟高親王、御身位につき給へば三條の后は  
 ぶに及ばず、空飛鳥地をはる獸山河草木皆こなたの物、名虎が再び娑婆へ出たるは何の

ため、二百三十六地獄のつかさたる閻魔大王にも身震ひさせたる某、わづか六十餘州小國  
 の玉位なる共ない、天皇籙の内に閉給へ、冠を脱で三種の神器を渡し、大内をぞつく出ら  
 れよと、御籙をにらむ眼の鏡、淨琉璃などといひつべし。有常も疑はしく、狐狸の所化  
 かと、誓しは程こそまがひつれ、見れば見る程父の名虎、淺ましくも恐じざる落涙五輪を  
 走ばぬしが、大地をたいて、エ、親ながら情なや、我國の王位は神明の御はからひ人間  
 のかに肝はぬ事、申に及ばず御存じ、それゆへ一歳見ぐるしき非業の自滅、朝敵の名を娑  
 婆世界に残されしは、子孫の恥とはおぼされずや、せめて未來罪障消滅のため、朝暮讀誦  
 びんぎやう忌日命日の吊ひは、冥途へは届かぬか、むむらひと、かぬ程ならば、よし女き  
 招魂とやら、悪法邪法はなごといきしぞ、二たび三途に立返り悪に悪をつみ、業に業を  
 重て、其身の苦み子孫の歎き、哀れとは思はずか、一向ならくに落ち給は、再び蘇生は有  
 まじき、魂中有に有しゆへ、思へばなまなかに追善とむらひのくやしやと、理をつく  
 し詞を盡し、泣きけびてぞ諫めける。名虎からく、と笑ひ、親に似ぬ世倅め、せめて我心  
 十分一持たせたい、惟高の御世になし、おのれらを高位高官にのぼせ、子孫の繁昌願ふ故、  
 佛の説法聖人の教聞ぬ程の此名虎、おのれが異見聞くべきか、天皇のためには味方、惟高  
 のためには仇敵、親には不孝者、親子の契是迄、ふみ殺してくれんと踊出れば金吾手を



すり、ハア御尤、コレ殿、親の老ひ思召老らぬか、申爰はとつくと御恩案の有そふ義  
 と、眼に知らせ詞に心をふくませて、大事の所と氣を付くれば、ヲ、それよく、天皇の御  
 味方申せば忠立つ共孝行たらず、又親の命にまたがひ惟高に味方申せば忠孝の南義立つ、  
 心をひるがへし父の命にまたがひ候と、いひもあへぬに、ヲ、でかしたく、それ大納言  
 天皇を引ずり出せ、今日より親王御位と衣をぬかせ奉り、冠よ沓よとひしめく所へ、大納  
 言立戻り、早かぜをくらふて天皇は神靈寶劔内侍所を帶し行方知れずと御所中の女原立さ  
 はき候と、いそ共名虎ちつともさはがず、今の間にどこへ行く物、おくに忍ぶは疑ひなし  
 先親王を玉座にすゝめ、天皇をさがせやと下知をなし、各どつとかけ入れれば、關白左右の  
 大臣百官百司かけへだて立へたつれ共、事共せず、公家も地下もいはせばこそがたはし  
 に取て引よせふみ付け、投たをし、なんなく奥に亂れ入り、上を下へとさがしける。人  
 まを親ひ紀の有常三種の神寶天皇にいだかせ奉り、衣かつぎの女の躰、麗影殿の櫛形より  
 そつとぬけ出で、いつかたよりや落べきと、もどめ親折から奥に名虎が大音聲、有常が見  
 えざるは、有常とて呼ばれば、南無三寶とうろたゆる。立藩の蔭より金吾是にとつと  
 出る。地獄で佛に逢ふた心、事急也、まさはいふに及ず玉躰あんな業平にわたし奉れ。  
 ヲ、心得た、まつかせといふよりはやく御手を引立て、無名門のすい垣より飛が如くに走

行く。宗岡名虎猫の鼠をにがしたる顔色、エ、口惜し、よし天皇は追放し、一大事は三  
 種の神器いかんはせんと身をもめば、有常とぼけた顔付にて、天皇なればとてつばさはな  
 し、但天狗がつかんだるも存せず、父はあたご山宗岡は比叡の山、鞍馬山僧正が谷さがさ  
 れよ、有常は下の醍醐ひらやよかはを尋べし、それにも見へずば太鼓鐘、稻荷山をかる計  
 り。ヲ、尤と立別れ、足に任せて急ぎける。かく共知らず業平主従、后をやすく迎へ参  
 らせ、御門へは人目まげし、暮を待て局口より移し申さんと、ひそかに忍ぶ加茂川堤、  
 むかふを見れば桂金吾帝を供奉し、のがれがたなき毒蛇の口、虎の尾を踏む名虎が圍み、  
 漸どかけ來り入々にはたと行あひ、ヤア業平公、今日大内の騒動御存なきか、先年死した  
 る紀の名虎再び蘇生し、伴の大納言が内通にて、大内へ踏み込み、惟高親王を推して御位につ  
 け、既に天皇御命危やうかりしを、主人有常敵一味の躰にもてなし、漸に盗出し、三種の  
 神寶諸共天皇是にとうす衣とれば、后是はといたき付く。業平主従はつと計りあきれて詞  
 もなかりけり。いや是あきれて濟ぬ事、アレ、名虎が再來跡より急に追かくる、と聞よ  
 り各のびあがれば、章駄天が足疾鬼を追かくる勢、ハア力なし、此上は天運次第、命限り  
 足手限り、御邊と我等兩御所を負奉らん。尤もと二人がせなかさしむくれば、業平天皇の  
 御肌に付けさせ給ふ内侍所いたしき取て首にかけ、立あがらん振返り、後を見れば、次第



に這付く名虎がいきほひ、サア見とめけたりあますまむいと呼はる聲、耳そこに突通れば、  
 兩人あきれ見られよ金吾かく腰をかけられ逃足見せては勝にのり、此方は先とられ、仕  
 損するは必定いさふみとまり先を取て打かけ、是非の安否を定ん。テ、尤と天皇御夫婦  
 業平がこひい二人は身がまへ鏢打して立とまる。またく間に紀の名虎賊の虎より猶はや  
 く、土ぼこりを蹴立て飛て来るをやり過し、真中に立はさみ、ホウ珍らしい婆婆の歸り新  
 參、只今手にかげ逗留間もなく本の冥途へほづかへすも不便至極、金吾が爲には家の主君、  
 善惡の返答にてまやばせかいの逗留か、但し立歸りか、望み次第とさや口抜かけの寄つ  
 たり。名虎びくともせず悪人共、うつけ共、目前手に取る果報を知らず、無用の忠節仁義  
 だてに咽をほす汝等、冥途ではうさいがき、其刀抜かばぬいて見よと、くはつとにらむ眼  
 のいなづま、面に火矢を射る如く、腕すくみ氣もあくれ覺えずまされば、名虎もついで  
 とふる足にてつめかくる。跡より般若すきを鏡ひぬらひよれば、ふり返り、はつたどにら  
 めば性根をうばいれ、心ならず跡をとり、弓手馬手よりぬらひかゝるをねめとせ、毒龍  
 悪虎のはげみをなし、のがさぬやらぬと兩方より、一二の拍子に聲をかけて切りつくる。  
 水腫じとひらりとほづし、二人が胸板はつたくと左右へ蹴倒し、飛かへり、業平のほと  
 首つかんで投のけ、天皇皇后を兩のこわきにまつかとかい込み一まめしめてつ立つちあが

り、サアうぬら切先でもあけるが最後、さやつらを則ちまめ殺す、そのけやのど怒る聲、  
 金吾も般若も心手り、玉躰あやうく、持たる太刀もひらめく斗り、牙をならしてひかへた  
 り。后御息たへんに、我命はしかばふな、天皇様の御命すくひ申せと、泣こがれ給へば、  
 いやり、朕が身一つたすけん連萬民をくるしめ何かせん、朕を捨て代をも位も兄惟高に參  
 らせ、世界の亂をまづめ、國民を助けよと、御涙にくれ給ふ、慮慮の程ぞ有難き。テ、い  
 ふ迄もない、日本は此方の物、あのれらはめいどの王となれ、サア只今と、既に危く見へ  
 け難ば、其隙に業平内侍所の御正躰がらげをどいて名虎にむかひさし上げ給へば、あら不  
 思議や、神國清淨の神鏡、光明あたりにかいやすき渡り、不淨不潔の名虎が五躰、照し給へば  
 朝日の永春の霜、鬢髪皮肉さへくも爛れ失せ、頭はうつぼのまやれかうへ、形は白骨つら  
 なつて、編るすだれ、きざめる石、朽木の風に破る、如く、ばらばらと砕け散つたるは、  
 前代未聞、未代不思議、はあせ一度は禮拜有る、金吾立寄り、根深く仕込し惟高の謀叛、  
 有常はいつ迄も敵一味の色を見せ、すは御大事に及ぶ時は、ひそかに内通申す所存、兩御  
 所一所に忍び給ふは、人の見る目とそれ有り、后は主人有常に御預、あれ遠方の小路く  
 宗岡將軍兵みちりて、君をさがす鯨波、事せまらぬ其内と、連理の枝を引分て、わかれ  
 分枝になり平朝臣、天皇の御手を引き、金吾は二條の后を供奉し、無念を胸に押つむむ、



入目おつむ、道よくる、徑ほそ道つたひ道、分行く草の葉末まで、昨日の味方今日のでき、時に變じ日にかける入界不定の心は淵瀬、風にまたがふ雲水の、大和河内へ別れけり。

第一 業平歌念佛道行

さる間、つし王殿御臺所に近付き、生としいける物ごと、父も有り母も有る、某親父といふは御座なきか。なふ父こそあれ、勅勘を蒙りて、筑紫へがされ給ふと有りければ、其義にて有ならば、あかねいそまを給はれや、父を尋て参らばやと仰有る。御臺所聞し召し、左程に思ひつめたらば、自からも尋ね上らんと、つし王兄弟めものうはたけ御供にて、國を出るはいつ比ぞや、三月廿一日に旅の装束なされける。山樹太夫が古事を今身の上につみて老る、落人の身に業平は、墨の衣になげづきん、見る目忍べば日ぐらしや、人をすゝめの歌念佛、修行の僧に身をやつし、ふぢやうを肩に押かけて、まんくの紐のかねてより、知らぬ柏子はうつなや。勿躰なくも天皇をせもつの箱のかた／＼に、三種の神器をかくし入れ、般若五郎もほうかふり、にないし棒のあれそれも、御免をうけて隔てな

く、まぎれ落ちさせ給ひける。都に残すうめかうむり、今日は頭のすきびたひ、竊かに井手の玉水の、數はひいふうみかの原、わきて流るゝいづみ川、衣かせ山かりそめの、旅と思へど君ませは、是も御幸のためしごと、箱に向ひて再拜し、御先をはらう警蹕の、塵は昔に替らねど、かほる水かさの木津川は、誠淵瀬のたぐひかや。朝出のまづの劔鍬や、あぜに草刈る人影に、業平かねをひやうしどり、是は打置つし王殿やあんじゆ姫、丹後の國由良の湊山樹太夫が買取て、渡す道具は何々ぞ、桶と柄杓と笠袴、兄弟是を請取て、山と濱とへ泣わかれ、無慘やなつし王が、山風に吹立られ、無寒からんかあひやと、流涕焦れ泣給ふ。今はあたりにもなし、箱の内さぞお氣つまらんとふたをひらけば、天皇は吹きつたへたる神風や、みもすそ川の濁る世に、住かひもなき身なれ共、よしや世の中あさまらば、今の情は忘れじと、いと畏こき詔、業平草にひれふして、河内の國高安左衛門が娘伊駒姫、某に和歌の指南を請ひ文にてかたらふ契りも有り、頼むに粗略候まじ、かしこに忍ばせ奉らん、かゝらざりせばいかにして、君が見るべき名所の、向ふに霞む奈良坂や、あまかならでも春日野の、枝に角くむ八重櫻、あれ／＼御覽ぜ、秋篠や、外山の峯の松檜、葉末きらめく夕附日、うす紅にうすもへぎ、あかね詠はいかに共、いわせの森はあれどらや、鶴もかさぬる諸つばさ、齡も永きかめがせの、上を歩みて行く道は、道の道あ



るすべらぎの、まばしこそ、花くもりなれ、敵慮を苦しめ給ふなど、云もはてぬにむら鳥の、はつと羽をのす其音を、人かどあはて、天皇を箱にわた蓋引志めて、いかにつし王殿汝落し物ならば、追手かゝらんは治定也、然らば近き寺を頼め、出家は五戒をたもつ故、其身は果ても出さぬぞ、サイ／＼急げ、こつちもいそげ仲則と、むかし語を身のうへに、箱をかたげてどつかはと、あき立つ野路の袖の露、草のもぢずり忍ぶ身は、人目恐ろし鬼取山、くらがり峠打過て、爰は御燈の明らかに、名も高安の神垣に、暫と疲れ休めけり。社内に人音にぎはしく、高安殿のお下向、お供のお衆と叫ぶる聲、業平聞付け給ひ、高安殿の下向とは、後家の老母か、孫の伊駒姫か、若し伯父大炊の介殿か、誰にもせよ願ふ折から、心をうかひ頼んど、般若五郎をかたへに忍ばせ待ち給ふ。程なく下向の女乗物、玉をかざりて花かづら、二月の雪のふり袖の、姫婢とりまきて、静かに道を歩ませしが、業平を見て、女房達、あれ日暮しの歌念佛、お慰にと興立させ、コレ坊様、ずんとあはれな涙のこぼる、様な事聞たい、とてもなら山樹太夫が所望／＼と呼ばれば、業平頭巾まぶかに鉦打ならし、聲志はぶき、國分寺にてつし王丸、おひじり頼むを身の上に、引なぞらへてぞ語らる。去程に、痛はしやつし王殿、山にて姉御に暇乞谷峯として落給ふ、是と申も山樹太夫惟高が邪見謀反と聞へける、肩にかけたる箱には、つし王殿の守本尊清和なる天

皇様を入られたり、かゝる所に宮参りする人に行逢ふた、たのんで見ばやと思召、此あたりにぞい所はなきか、ぞい所こそあれ、寺はなきか、寺こそ候へ、本尊は馬頭観音か、馬頭は馬のかしらとかく、駒といふ字を名乗る人、跡より追手のかゝる者、よそにも人の聞く物を、某が名は申さぬ也、なり平にかくまい給はれや、契りもあれば申なり、なりひらに／＼と、我名をば餘所に知らせて頼まる、つし王殿の心の内、聞て推量なされやと、貴賤上下おしなべて、感ぜぬ者こそなかりけれ。跡はだん／＼お望み次第、女子衆聞てか哀なかく／＼と、いへ共きよろりと女房達、涙が出そうで出兼ねて、哀そうでなん共ない、ア、泣たやとぞさゝめきける。乗物の内より局めくもの召よせて、何事やらんつど／＼仰付らる。あい／＼と承り、業平のそばに立寄り、のり物にめしたお方を御存知有てか、つし王丸によそへかくまへ申せとのお願、そなたの御名は合點ながら、互にわけていはぬが秘密、此年月歌の點どりに事寄せて、文の數々申せしごとく、いつか／＼と逢瀬を祈りし中なれば、早速かくまへ屋敷へともない申たさは飛立斗り、去ながら振分髪あしなげの井筒つづみとやら、其外お心多きが玉に疵、御心底の奥底を聞ましたいとの御事と、辨舌さばけし長口上ちがひ。業平、扱こそ音に聞く伊駒姫と頼もしく、井筒のいの字は門柱に打つ看板斗り、眞實は河内の河水に首たけ、もし心かはらば二度冠をいたゞくまいとの給へば、ア、御心底見へ